

山形大学人文社会科学部

研究年報

第 17 号

目 次

論 文

課題解決型会話の談話展開と提案の可決・否決：母語場面と第三者言語接触場面の対照

..... 渡 辺 文 生..... 1

Predicate NP Movement in *Tough*-Constructions Naoto TOMIZAWA..... 19

記憶再生、視線移動、負担からの情報表示における画面サイズと表示位置に関する検討

.....本 多 薫・門 間 政 亮..... 45

Developing Intercultural Competence: recognizing the minimization effect

..... Stephen B. RYAN..... 59

English sentence adverbials and truth-conditional meaning: A questionnaire study

..... Yukiko KOIZUMI..... 71

映画における晩年性

アンドレ・バザンとフランソワ・トリュフォーの老化をめぐる議論

..... 大 久 保 清 朗..... 91

投稿規程 111

令和 2 年 3 月

山形大学人文社会科学部

論 文

課題解決型会話の談話展開と提案の可決・否決 母語場面と第三者言語接触場面の対照

渡 辺 文 生

1. はじめに

本研究の目的は、課題解決型授業の擬似的場面を設定して収集した日本語母語話者同士による談話データ（母語場面）と日本語学習者同士が「共通語としての日本語（Japanese as a lingua franca : JLF）」を用いて話し合う談話データ（第三者言語接触場面）をもとに（竹井・吉田 2018；竹井ほか 2018）、談話の展開のあり方と提案の可決・否決に関してそれぞれのデータに観察された特徴的な発話連鎖の質的な分析・考察をすることである。分析の観点としては、談話の単位の「話段」と提案行動に関わるストラテジーを用いる。

本研究で分析の対象とするデータは、異なる言語文化を背景とした学生によって構成される学びの場において「共通語としての日本語」がどのように使われているかを調査する目的で収集されたものである。収集されたデータには、母語場面と第三者言語接触場面のほかに、日本語母語話者と日本語学習者による相手言語接触場面のデータ¹もあるが、本研究では、日本語母語話者が会話に参加していない第三者言語接触場面の課題解決型会話に焦点を当てることで、「共通語としての日本語」による言語行動に関する課題が浮き彫りになるのではないかと考える。まとめにおいては、本研究の分析・考察結果から得られる日本語教育への示唆について述べる。

2. 課題解決型会話についての先行研究

課題解決型会話に関する先行研究としては、桑原（1996,1998）、若野（1998）、野原・藤江・宮谷（2002）、星野（2010）などが挙げられる。桑原（1996,1998）は、日本語母語話者同士の主に公的な多人数による会議の会話をデータに用い、提案行動の談話構造とストラテジーを分析している。若野（1998）は、大学サークルのミーティングにおける日本語母語話者の多人数会話をデータに用いて、提案の可決・否決を決定する際に使われるストラテジーを分析している。野原・藤江・宮谷（2002）は、初対面の日本人大学生4名と留学生3名の計7名からなるグループの会

1 本調査による相手言語接触場面のデータについては、竹井・吉田（2018）に母語話者の言語行動と意識という観点からの分析がある。

話を対象に、提案から同意への過程を分析している。星野（2010）は、大学生の4人グループによる会話をデータに用い、会話参加者が先行のやりとりを受けどのように応答を重ねているかという観点で、提示された意見に対する肯定的な発話連鎖、否定的な発話連鎖、停滞した話し合いに転換を与える発話連鎖などを取り上げて分析している。

本研究は、談話を「話段」という単位を用いて分析している点、会話参加者の戦略に基づく分析を行っている点で、桑原（1996,1998）と若野（1998）の分析方法に依拠するため、それらの先行研究の分析方法と結果について取り上げる。「話段」とは、相対的な内容上のまとまりとして成立する談話（話し言葉）の言語単位（佐久間 1987）で、それぞれの会話参加者の談話の目的によって相対的に他と区分される部分（ザトラウスキー 1993）である。戦略とは、談話のやり取りの中で各参加者が目的を達成するために用いる手段（ザトラウスキー 1993）にとらえる。

桑原（1996）は、提案行動を開始時の契機によって「要請型」と「自発型」の2つに分類した。「要請型」の提案行動では、まず検討課題が提起され、「情報授受」・「条件設定」を経て複数の「提案」と「反対」の話段が現れて、最終的に一つの提案遂行が決定されるのに対し、「自発型」の提案行動では、課題が示され、「誘導」の話段の後、単独の提案について「提案」と「反対」の話段が交互に現れ遂行か却下の提案に至ると述べている。桑原（1998）では、提案行動における「提案」と「反対」の話段について、ザトラウスキー（1993）を参考にして分類した発話機能、特に「相手の考えを変えさせるなど、相手を動かそうとする」機能をもつ「操作」の発話を手がかりにして会話参加者の戦略を分析した。提案の可決に至る「提案」の話段では、提案が参加者相互の補い合いによってまとめられる・提案内容が反復されたり言い換えられる・提案の肯定的評価やあいづちが頻出する等の特徴を指摘している。提案の否決に至る「反対」の話段では、提案者自身の提案取り下げの発話が決定的な役割を果たしており、特に、上位者の提案は提案者自身が却下していたと述べている。

若野（1998）も、ザトラウスキー（1993）による発話機能の分類を基に、提案の可決・否決を決定する際に使われる戦略を分析した。提案の可決については、複数の参加者が連続して〈提案支持〉をすることや、提案の聞き手が提案者と一緒に〈提案説明〉の発話をするなどによって決まると指摘している。提案の否決については、〈提案懸念〉がなされた後、会話参加者がその〈提案懸念〉に納得してだれもその提案に触れなくなることによって、否決されたことになる」と述べている。これを若野（1998）は「闇に葬る」形だと呼んでいる。可決・否決をめぐって意見が分かれたときは、〈提案懸念〉に対して会話参加者がどのような行動をとるかによって可決・否決が導かれることになる。たとえば、提案の支持者が、反対者の〈提案懸念〉に納得していないことを伝えるなど〈提案懸念〉に対して反論することは、問題となっている提案を引き続き話題にし、闇に葬らせないという意味でも効果的だと述べている。また、「いやだ」「そうではない」といった、直接相手の発言を評価する発話はなされなかったとのことである。結論と

して、提案の可決は直接的だが、提案の否決や意見の不支持を表すストラテジーは間接的であり、否決の間接化の方法として、反対者が提案に対するマイナス要因を提示し、他の参加者が何も発言しない場合は提案が否決されたとみなすという談話展開を指摘している。

3. 調査の概要

2016年6月～2017年6月に日本国内の大学において日本人学生、学部留学生・交換留学生18名(延べ)を調査参加者として、母語場面(日本人学生3名)、第三者言語接触場面(留学生3名)、相手言語接触場面(留学生2名+日本人学生1名)の各場面2グループの計6グループの会話データを収集した(竹井・吉田 2018)。本研究ではそのうち母語場面2グループと第三者言語接触場面2グループのデータを取り上げて分析する。調査参加者の内訳は以下の通りである。

表1 グループ別調査参加者の内訳²

グループ	個人コード	母語	身分	日本語レベル
母語①	JP_M2	日本語	学部生	母語
	JP_F1	日本語	学部生	母語
	JP_M1	日本語	学部生	母語
母語②	JP_M3	日本語	学部生	母語
	JP_M4	日本語	学部生	母語
	JP_F2	日本語	学部生	母語
第三者言語接触①	CN_F1	中国語	学部留学生	N1
	KR_F1	韓国語	交換留学生	N1
	NZ_M1	英語	交換留学生	N3
第三者言語接触②	TW_F1	中国語	交換留学生	N1
	VN_F3	ベトナム語	交換留学生	N2
	NZ_M2	英語	交換留学生	N2

調査においては、PBL型授業における言語使用に近い疑似的場面(課題解決型三人会話)でのインターアクションを分析するため、「附属高校から大学体験の目的で訪問する女子高校生10名のために、大学生活を知ってもらうためのプログラム内容(キャンパスツアーなど)を計画する」という課題を調査参加者に与えて会話を行ってもらった。調査参加者は、入室後に教員から課題の説明を受け、教員退室後に課題遂行のためのディスカッションを開始する。30分後に教員が再入室し、計画案の発表および感想を口頭で求める。この一部始終について録画・録音を行っているが、分析の対象としたのは課題遂行作業の部分のみである。

調査参加者は、会話のあいだに話し合いの結果を計画書にまとめることも求められた。表2は、母語②グループが作成した計画書をほぼ同じイメージのまま表したものである。計画書は、計画

² 個人コードは、出身国_性別・話者番号を示す。JPは日本、CNは中国、KRは韓国、NZはニュージーランド、TWは台湾、VNはベトナムを表す。日本語レベルはJLPTによる。

するプログラムごとに時間・場所・内容を記入するようになっており、最初の「出迎え」と最後の「見送り」については、時間・場所ともに記入済みであった。調査参加者は、「出迎え」と「見送り」のあいだのプログラム内容の計画を求められたことになる。

表2 母語②グループによる計画書

時間	場所	内容
10:00~	〇〇駅前	出迎え
10:10~11:10	図書館	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館までの道のり ・書庫なども（説明しながら）
11:10~11:50	9号館	<ul style="list-style-type: none"> ・学部の先生に説明していただく
12:00~13:00	食堂	<ul style="list-style-type: none"> ・昼食 ・自由時間
13:00~14:00	5, 6号館	<ul style="list-style-type: none"> ・キャンパスツアー 授業参観 その他施設
14:00~14:45	交流ラウンジ	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生, 大学生と交流 グループ分け（質問も）
15:00~	バス停	見送り

表2の計画書は、会話参加者が何について話し、何について合意したかをまとめたものにとらえることができる。否決された提案内容は、当然ながら書かれていないが、可決した内容の客観的根拠を与えるものである。次節で述べる話段の認定作業においては、これらの計画書に書かれた単語をキーワードにして分布を調べ、その結果を認定の手がかりに用いた。

4. 各グループの調査データの分析

ここでは、話段の認定作業をもとに各グループの調査データの談話展開をとらえた上で、提案の可決と否決に関わる特徴的な発話連鎖について分析を行う。話段の認定作業の手がかりとしては、南（1983）が言語単位の認定基準として挙げた「表現された形そのもの」「参加者」「話題」「使用言語」「コミュニケーションの機能」「媒体」「表現態度（フリ）」「全体的構造」の8種類と、ザトラウスキー（1993）が話段区分で重視した発話機能を用いて、総合的に判断した。それらの中でも特に重要な手がかりとしては、南（1983）の基準の「表現された形」と「話題」が挙げられる。前者は、「じゃあ・次に」などの接続形式を手がかりとし、後者の「話題」については、会話参加者が書いた計画書を手がかりとした。

4. 1 母語①グループ

母語①グループによる調査データの話段に基づく談話展開は表3に示す通りである。話段は重

層的なものであるため (佐久間 2006; 渡辺 2013), 「開始部」「展開部」「終了部」と呼ばれる最も高次元の大話段や, この表に挙げた話段より下層の小話段もあるが, ここでは話段の多重構造のうち談話全体の流れの特徴を捉えるために, 「開始部」「展開部」「終了部」より一段下層の話段を示している。(イベント6) などとあるのは, 計画書において最初のイベントである「出迎え」をイベント1としたときに, その話段の話題の内容が何番目のイベントであるかを表している。

表3 母語①グループの談話展開

話段	発話数	%
1 談話開始のあいさつ	4	0.5%
2 アイデア出し	75	8.8%
3 昼食 (イベント6) について	13	1.5%
4 授業体験 (イベント2) について	74	8.7%
5 図書館見学 (イベント4) の検討	28	3.3%
6 授業体験 (イベント2) について	7	0.8%
7 午前中の行事の流れについて	29	3.4%
8 計画書の記入作業	8	0.9%
9 授業体験 (イベント2) の先生について	19	2.2%
10 掲示板 (イベント3) について	32	3.7%
11 図書館見学 (イベント4) について	166	19.4%
12 新学部の説明 (イベント5) について	24	2.8%
13 学食での行事 (イベント6) について	16	1.9%
14 電子マネー (イベント6) についての雑談	18	2.1%
15 サークルの説明 (イベント7) について	83	9.7%
16 計画検討の終了の確認	5	0.6%
17 担当者の検討	241	28.2%
18 タスク終了の確認	12	1.4%

母語①グループの会話では, 最初に昼食の時間帯を決定し, その後, 午前中の行事, 午後の行事と検討を進めている。昼食以外は, ほぼ時系列に沿ってイベントを検討しており, 後で時間帯を入れ替えたり新たなイベントを導入したりという修正が少ないことが特徴と言える。課題解決や提案の可決・否決に結びつかない話題が内容となっている話段を「雑談」の話段とすると, 表3に示した話段の層では, 話段14のみが雑談の話段であるが, イベントについて検討している話段に埋め込まれる形で雑談の小話段が分散して含まれている。

(1) の発話連鎖は, イベントについてのプレーストリーミングを行っている話段2「アイデア出し」のうちの, 「図書館でのイベントを提案する小話段」に続く「9号館での新学部説明についての小話段」の冒頭部である。「9号館」を見せてはどうかというJP_M1による発話01の〈提案〉に対し, 発話02でJP_M2が〈提案懸念〉を行っている。JP_M1は, JP_M2の「9号館?」という疑問形の発話による〈提案懸念〉が予想していなかった対応なのか, 発話03で「え?」と意

外性を示す「注目表示」の発話をしている。JP_M2の〈提案懸念〉に対して、発話04～05で JP_M1と JP_F1の共同発話による〈提案説明〉があり、〈提案懸念〉を発した JP_M2による発話07の「なるほど」によって〈提案支持〉が示され、〈提案〉が受け入れられている。

(1) 母語①グループによる新学部説明についての発話連鎖³

- 〈提案〉 01 JP_M1 9号館。
 〈提案懸念〉 02 JP_M2 9号館? [まだこれできて、できてねえよ。
 03 JP_M1 [え?
 〈提案説明〉 04 JP_M1 でも、ここになん [か、その、栄養。
 の共同発話 05 JP_F1 [できるんよみたいな?
 〈提案説明〉 06 JP_M1 そうそうそう。栄養 [系統。
 〈提案支持〉 07 JP_M2 [ああ、なるほど。(1.0)
 08 JP_M2 [で、あと、xxxx。 ああ ああ
 〈提案説明〉 09 JP_M1 [一応その合併したっ [ていうのもあって。[できたんよっていうのが。
 〈提案支持〉 10 JP_F1 [ああ [なるほど。

(1) の発話連鎖では、若野 (1998) の指摘の通り、反対者の〈提案懸念〉に対して、提案者および提案の支持者が〈提案説明〉することによって反論し、その結果、反対者の〈提案支持〉を呼び起こしている。提案の可決については、桑原 (1998) の指摘のように、あいづちが頻出することによって〈提案支持〉が繰り返され、可決したことが示されている。しかし、JP_M2による02の発話の〈提案懸念〉は、直接的な不支持表明ととらえられ、その点は意見の不支持を表す戦略は間接的だとする先行研究の指摘と異なっている。JP_M2が直接的に〈提案懸念〉を行うことができた要因としては、いろんな意見を出し合うブレインストーミングの段階での発話のやりとりであること、会話参加者の3名が初対面ではなく知り合い同士であったこと、JP_M2が3名の会話参加者のうちで一番年長であったことなどが考えられる。

次に、(2) の発話連鎖は、計画した各イベントの担当者を検討する話段17の「図書館見学の担当者についての小話段」に続く「新学部の説明の担当者についての小話段」の冒頭部である。まず、発話01および発話02の JP_M2と JP_F1による共同発話で〈提案〉が行われる。それに対して JP_M1が発話03で〈提案懸念〉を示す。提案者の JP_M2と JP_F1は、発話04と発話05で JP_M1の〈提案懸念〉を否定する態度表明を行うが、反対者の JP_M1は発話06で直接的に〈反対〉を表明している。すると、JP_F1が発話07～08で〈反対〉を支持し、JP_M2も発話09で間接的に〈反対〉への同意を示す。発話09の「カメラ目線どう?」との発話は、JP_M1に「カメラ目線で言っ

3 発話連鎖の表示において、記号 [は、発話の重複を表す。xxxx は聞き取れない部分、() 内の数字は沈黙の秒数を表している。

てはどうか」という〈反対〉の発話を促す発話で、暗に〈反対〉を受け入れていることを表している。発話09の促しを受けて、JP_M1は発話10で〈反対〉の発話を繰り返し、発話11~12のJP_M2とJP_F1による笑いによって提案否決の受け入れが示される。

(2) 母語①グループによる新学部説明の担当者についての発話連鎖

- | | | | |
|----------|----|-------|--------------------------|
| 〈提案〉 | 01 | JP_M2 | で、新学部の説明は (1.0) [学長 (笑)。 |
| | 02 | JP_F1 | [学長 (笑)。 |
| 〈提案懸念〉 | 03 | JP_M1 | いや、学長は (1.0) 話長くないですか。 |
| 〈提案懸念〉を | 04 | JP_M2 | 何で? あ (2.0) |
| 否定する態度表明 | 05 | JP_F1 | あ (笑)。 |
| 〈反対〉 | 06 | JP_M1 | いや、そこに 学長出さなくてもいい [と思う。 |
| 〈反対〉 | 07 | JP_F1 | うーん [ま、確かに。 |
| への支持 | 08 | JP_F1 | 学長 [をわざわざ出すのはちょっと。 |
| | 09 | JP_M2 | [カメラ目線どう? カメラ目線 [どう。 |
| 〈反対〉の復讐 | 10 | JP_M1 | [学長いいっす。要らないっす。 |
| | 11 | JP_M2 | (笑)。 |
| 否決の受け入れ | 12 | JP_F1 | (笑)。 |

(2) の発話連鎖では、反対者の〈提案懸念〉に対してそれを否定する提案者の態度表明があるにも関わらず、反対者がさらに直接的に〈反対〉の発話を行っている点が特徴的である。直接的な〈反対〉が行われる要因としては、〈提案〉の発話01~02における笑いが示唆するように、この〈提案〉自体がそれほど強い提案ではないということ、〈提案〉の内容がイベントの担当者というような計画の副次的事項に関するものであることなどが考えられる。

母語①グループによる (1) および (2) の発話連鎖からは、談話展開の中の話題の位置づけや、会話参加者の人間関係によっては、提案の否決や意見の不支持を表すストラテジーが直接的になりうるということが示唆される。これらの発話連鎖は、表3が示す談話展開の中では、課題を実質的に検討する最初と最後の話段であり、それらの内容的な性質から直接的な〈提案懸念〉や〈反対〉が生じたものと思われる。

4. 2 母語②グループ

母語②グループによる調査データの話段に基づく談話展開は表4に示す通りである。母語①グループの会話と同様に、昼食を検討した後、概ね時系列に沿ってイベントを検討していき、話段13までで一通り計画を作るが、話段15でのキャンパスツアーの内容の検討、および、話段16での新イベントの導入がある。その他、母語①グループの談話と異なる点としては、話段2, 17, 18,

22など作業の進行に関わる話段が多いところ、計画の最終案が固まってから計画書の記入作業を行っているところが挙げられる。

表4 母語②グループの談話展開

話段	発話数	%
1 談話開始のあいさつ	3	0.4%
2 検討方法についての合意形成	11	1.4%
3 アイディア出し	43	5.5%
4 昼食（イベント4）の検討	74	9.4%
5 授業見学（イベント5）の検討	40	5.1%
6 図書館見学（イベント2）の検討	26	3.3%
7 9号館見学（イベント3）の検討	29	3.7%
8 出迎えから移動の所要時間について	48	6.1%
9 午前中の行事の検討	59	7.5%
10 キャンパスツアーと授業見学（イベント5）の検討	34	4.3%
11 留学生との交流（イベント6）とバス停への移動（イベント7）の検討	22	2.8%
12 集合・解散場所についての雑談	23	2.9%
13 スケジュール全体についての確認	27	3.4%
14 オープンキャンパスについての雑談	49	6.2%
15 キャンパスツアー（イベント5）の内容について	51	6.5%
16 自由時間（イベント4）の検討	28	3.6%
17 談話の経過時間について	12	1.5%
18 誰が提出書類を書くか	17	2.2%
19 計画書の記入作業	153	19.5%
20 タスク終了の確認	8	1.0%
21 実際のキャンパスツアーの回る場所について	11	1.4%
22 発表者について	17	2.2%

(3) の発話連鎖は、一通り計画を作った後にキャンパスツアーの内容を検討する話段15に続いて、自由時間という新たなイベントを導入する話段16の冒頭部である。まず、話者 JP_M3は、発話01で「生徒ってさー、自由時間欲しいと思うかな。」と自由時間について話題提示し、その導入について間接的に〈提案〉を行う。しかし、その発話に対して他の会話参加者から何の反応もなく、1秒間の沈黙を〈提案〉に対する消極的な態度と解釈し、JP_M3自ら発話02で「時間ないもんね。」と〈提案懸念〉の発話をしている。これは、〈提案〉の主張の強さを緩和し、他の会話参加者が〈提案懸念〉を行いやすくする働きを持ち、一種の気配り発話（ザトラウスキー1993）をとらえることができる。それを聞いた JP_F2と JP_M4は、発話03～04で同内容の発話をして〈提案懸念〉への同意を表している。そして、JP_M3も05で同内容を繰り返し、この〈提案〉の否決を受け入れる発話を行う。しかし、2秒の沈黙の後、JP_F2と JP_M4は、発話06～07で01の〈提案〉を独立したイベントではなく昼食の時間に組み込むという折衷案を〈提案〉する。この折衷

案の〈提案〉を受けて、JP_M3は発話08で折衷案への〈提案支持〉を行う。それ以降、発話09から発話13まで3名の会話参加者が折衷案の中身についての合意を形成する。そして、発話14~16で再度〈提案支持〉が行われ、折衷案の提案が可決する。

(3) 母語②グループによる自由時間の導入についての発話連鎖

- 〈提案〉 01 JP_M3 学生ってさー, 学生, 生徒ってさー, 自由時間欲しいと思うかな。(1.0)
- 〈提案懸念〉 02 JP_M3 要らんか。でも, 時間ないもんね。
- 〈提案懸念〉 03 JP_F2 あ, 時間 [なさそうです。 うん
- への同意 04 JP_M4 [時間ない。
- 05 JP_M3 時間ないよね。(2.0)
- 折衷案の 06 JP_M4 自分で探検する時間みたいな。
- 〈提案〉 07 JP_F2 それを昼の中に入れちゃうか。 うーん。
- 〈提案支持〉 08 JP_M3 あ, もう自由時間でーみみたいな (1.0) 感じで。
- 09 JP_M4 あー, 昼食[は。 [食べたら。
- 10 JP_M3 [じゃ, もう, 昼食はもう全部自由時間って形 [で。
- 11 JP_F2 (1.0) 自由?
- 12 JP_M4 食べたら, [自由? あー
- 〈提案説明〉 13 JP_F2 [1時には戻ってきてくださいねっていうふうに。
- 14 JP_M3 なるほど。
- 15 JP_F2 そうしても。 いいかな。
- 〈提案支持〉 16 JP_M4 いいと思いますよ。

(3) の発話01では、間接的な表現で〈提案〉が行われているが、一通り計画が固まった後にその変更を要する提案であることから、直接的な表現が避けられているものと思われる。この提案者のJP_M3は、母語②グループの会話参加者のうちで一番の年長者であるが、自ら〈提案懸念〉を表明している発話02は、桑原(1998)が指摘した通り、上位者である提案者自身の提案取り下げの発話が提案の否決において決定的な役割を果たす事例となっている。しかし、(3)の発話連鎖では発話01の〈提案〉が完全に否決されるわけではなく、発話06~07の折衷案の〈提案〉により話題として復活する。この折衷案の〈提案〉は、JP_M3のフェイス(Brown & Levinson 1987)に対する配慮と考えられる。このように、母語②グループによる(3)の発話連鎖からは、談話展開の中で〈提案〉がもたらす計画全体に対する影響への配慮、会話参加者同士のフェイスへの配慮が認められる。

4. 3 第三者言語接触①グループ

第三者言語接触①グループによる調査データの話段に基づく談話展開は表5に示す通りである。母語場面の調査データと同様に、「アイデア出し」の話段から検討が始まり、「昼食の検討」の話段がそれに続いているが、イベントの数を計画書の空欄の数だけ揃えることを優先し、順番は後で検討している点で、他のデータと異なっている。さらに、複数の話段に分かれて検討されるイベントの数が多く、話段2, 8, 9, 21のような計画の調整・確認のための話段が多いこと、下層の話段も含めて雑談の話段がないことなどが特徴として挙げられる。

表5 第三者言語接触①グループの談話展開

	話段	発話数	%
1	談話開始のあいさつ	11	1.1%
2	アイデア出しの提案と承認	12	1.2%
3	アイデア出し	35	3.5%
4	昼食（イベント4）の検討	97	9.8%
5	大学の説明（イベント2）の検討	70	7.1%
6	サークル見学（イベント7）の検討	81	8.2%
7	授業見学（イベント5）の検討	31	3.1%
8	他の行事についての情報要求	4	0.4%
9	作業時間の確認	16	1.6%
10	これまでの検討事項の確認	14	1.4%
11	キャンパスツアー（イベント3）の検討	24	2.4%
12	質問の受け付けの検討	23	2.3%
13	大学の説明（イベント2）の所要時間の検討	29	2.9%
14	キャンパスツアー（イベント3）でどこを回るか	22	2.2%
15	サークル見学の提案と却下	38	3.8%
16	最初の行事としての大学の説明（イベント2）の検討	16	1.6%
17	サークル見学（イベント7）の検討	24	2.4%
18	午前中の行事の順番について	47	4.7%
19	授業見学（イベント5）の検討	83	8.4%
20	全体の順番について	7	0.7%
21	行事を2つ考える必要性の提起	2	0.2%
22	記念写真（イベント8）の検討	18	1.8%
23	自由時間（イベント6）の検討	78	7.9%
24	全体の順番の確認	36	3.6%
25	計画書の記入作業	172	17.4%

(4) の発話連鎖は、大学の説明に関するイベントを検討する話段5に続いて、サークル見学を検討する話段6の冒頭部である。話段5は昼食の前に行うイベントの検討であったため、「じゃ、ごはんの後、何をしますか。」というCN_F1による発話01は、話題の転換と新たな〈提案〉を喚起する発話となっている。発話01を受けて、KR_F1が発話02でサークルの広報を〈提案〉する。しかし、NZ_M1は、発話05で図書館見学という追加の〈提案〉を行い、さらに、発話07ではプー

ルでのイベントも〈提案〉している。NZ_M1による発話11の「ま、私は、女子こう、高校生じゃないか、から。」は、見学にやってくる高校生の大学体験に対する実際の希望がよくわからないということを示唆する発話である。それに対してCN_F1は、男性であるNZ_M1の発話11を、男性にとっては女性（であり、かつ、高校生）の希望はわからないと解釈し、発話13で、女子でも男子でも関係ないと述べている。この発話11～13のやりとりは、発話01、発話05、発話07の〈提案〉については何の態度表明にもなっておらず、(4)に抜粋した部分においては提案の可決・否決は決まっていない。

(4) 第三者言語接触①グループによるサークル見学についての発話連鎖

- 01 CN_F1 ジャ、ごはんの後、何をしますか。
- 〈提案〉 02 KR_F1 (1.0) なんか、サークルの広報。
- 03 NZ_M1 ああ
- 04 CN_F1 あ、サークル [の [図書館
- 〈提案〉 05 NZ_M1 [サークルを見て、図書館見て、多 [分、
- 06 CN_F1 [図書館の紹介
- 〈提案〉 07 NZ_M1 [そうするとなんか、そして、多分、なんか、いい所とか、プールとか、
- 08 CN_F1 [プール? うん そうそうそう
- 09 NZ_M1 [まあ、あ、(1.0) まあ、プールとか、ちょっと、ま、あの、 (2.0)
- 10 KR_F1 うん
- 11 NZ_M1 ま、私は、女子こう、高校生じゃないか、から。
- 12 KR_F1 うん
- 13 CN_F1 多分、まあ、女子でも男子でも同じじゃないですかね。それ、あんまり関係ない。

(4)の発話連鎖では、KR_F1による発話02の提案について〈提案支持〉も〈提案説明〉も〈提案懸念〉も表明されていないうちに、NZ_M1の発話05、発話07によって複数の異なる〈提案〉が行われている。このような提案行動は、ブレインストーミングの「アイデア出し」の話段であればありうるが、実質的な計画の検討段階に入ってから話段において、母語場面の調査データには見られなかった。発話01で提案を喚起したCN_F1は、第三者言語接触①グループの談話において進行役の役割を果たしていたが、複数の〈提案〉がなされる状況において、発話04の「図書館」や発話08の「プール？」など、新たな〈提案〉に出てくる言葉を反復し、話題として取り立てている。結果として、最初のKR_F1による発話02の〈提案〉は可決か否決か決まらないままペンディングになっている。

4. 4 第三者言語接触②グループ

第三者言語接触②グループによる調査データの話段に基づく談話展開は表6に示す通りである。このグループの会話では、話段1の「アイデア出し」の後、時系列に沿って計画を立てていき、比較的早い段階で計画の第1案が出来上がった。しかし、話段8「スケジュールのまとめ」における第1案の確認、および、話段10「計画書の記入作業」の後、NZ_M2の提案から計画の再検討が起こり（話段11～12）、順番の組み替えやイベントの追加が起こっている。

表6 第三者言語接触②グループの談話展開

話段	発話数	%
1 アイデア出し	28	4.2%
2 最初の行事の検討 歓迎会	38	5.7%
3 次の行事の検討	47	7.1%
4 キャンパスツアー（イベント3）の検討	7	1.1%
5 歓迎会の検討	56	8.4%
6 キャンパスツアーで図書館以外にどこに行くか	15	2.3%
7 昼食（イベント5）の後に何をするか	30	4.5%
8 スケジュールのまとめ	30	4.5%
9 他の行事の可能性について	3	0.5%
10 計画書の記入作業	22	3.3%
11 NZ_M2の提案に対するやりとり	60	9.0%
12 計画の再検討（歓迎会を昼食と一緒に、イベント2・4の追加）	100	15.1%
13 午後の行事（イベント6・7）の検討	61	9.2%
14 計画書の記入作業	14	2.1%
15 授業見学（イベント6）の内容	16	2.4%
16 作業の経過時間について	2	0.3%
17 計画書の記入作業	129	19.5%
18 タスク終了の確認	5	0.8%

(5)の発話連鎖は、一通り出来上がった計画を計画書に記入する作業に伴う話段10に続く、NZ_M2の提案に対するやりとりについての話段11の冒頭部である。話段10で、決まったイベントを順番に計画書に記入していき、ランチについての記入作業に伴う発話の後に、NZ_M2による発話01が出てくる。この発話01の「体育」の体験イベントをやろうという〈提案〉に対し、TW_F1の発話02で〈提案懸念〉が示されるが、提案者のNZ_M2は発話03で同じ〈提案〉の発話を繰り返している。再度、VN_F3とTW_F1による発話04～07で〈提案懸念〉が示されるが、またしてもNZ_M2による発話08で〈提案〉が反復される。話段8までにまとめられた計画案では、最初にお菓子を食べながら「歓迎会」を行い、その後にキャンパスツアーをして昼食をするという案であった。VN_F3とTW_F1による発話10～11の〈提案懸念〉は、できつつある計画案との関連から発せられたものと言える。VN_F3による発話12の「えー」という否定的な態度表明を受

け、提案者の NZ_M2は発話13で別の〈提案〉を行っている。

(5) 第三者言語接触②グループによる体育に関する提案についての発話連鎖

- 〈提案〉 01 NZ_M2 ランチする前は、あの、体育。
- 〈提案懸念〉 02 TW_F1 体育 [やる？
- 〈提案〉の反復 03 NZ_M2 [体育の [経験をしたほうがいい。体験をしたほうがいい。
- 04 VN_F3 [でも
- 〈提案懸念〉 05 VN_F3 でも、[その一。
- 06 TW_F1 [あー、でも、なんとか、食べてから、(1.0)
- 07 TW_F1 あのー、[運動したら、ちょっと。
- 〈提案〉の反復 08 NZ_M2 [うん、食べる、た、食べる前、[運動したほうがいい。
- 09 TW_F1 [そうそうそう
- 10 VN_F3 え、なんか、ラ、ランチの時間は何時？ (1.0) 何時に？
- 11 TW_F1 あ、でも、歓迎会の後は、ランチしたら。(1.0)
- 〈提案懸念〉 12 VN_F3 えー。
- 別の〈提案〉 13 NZ_M2 あ、ランチと歓迎会は、一緒にしたほうがいい。

(5) の発話連鎖では、〈提案〉と〈提案懸念〉が繰り返されている。〈提案懸念〉に対しては、母語①グループの(1)の発話連鎖や若野(1998)の指摘のように、提案者および提案の支持者が〈提案説明〉することによる反論で説得が行われるが、この発話連鎖では〈提案〉の発話を繰り返すのみで、〈提案説明〉を行っていない。発話13で、提案者の NZ_M2が発話01と異なる〈提案〉を行ったことで、発話01の〈提案〉を取り下げたものととらえられる。

(6) の発話連鎖は、計画を再検討する話段12の一部で、(5) の発話連鎖の80発話後の部分である。まず、VN_F3と TW_F1による発話01~04はオリエンテーションの所要時間についての小話段の部分である。そこに、NZ_M2が発話05の「うん。はい。体育する。はい。」と強い調子で〈提案〉を行っている。その〈提案〉に対して VN_F3と TW_F1は、即座に〈反対〉の発話を発し、発話08~09で、発話01~04までのオリエンテーションの話題に戻っている。

(6) 第三者言語接触②グループによる体育に関する再提案についての発話連鎖

- 01 VN_F3 オリエンテーション、とー、30分くらい？ [に
- 02 TW_F1 [30分くらいで。
- 03 VN_F3 長 [い。
- 04 TW_F1 [や、ちょっと説明だけで。
- 〈提案〉 05 NZ_M2 うん、はい、体育する。はい。

- 〈反対〉 06 TW_F1 体育？ そ [んなに (笑)。 そん [なに？ あー。
 07 VN_F3 [そんなに好きの？ [めっちゃ体育が (笑)。
 08 VN_F3 15分でいい？ (1.0) 30分？
 09 TW_F1 15分。 いやー。

(6) がこのような直接的に〈反対〉を行う発話連鎖になっている理由としては、この提案者の NZ_M2 が体育に関連する〈提案〉をするのがこれで5回目、それまでの4回は(5)の発話連鎖のように〈提案懸念〉に対する〈提案説明〉がなく、若野(1998)の「闇に葬られる」形で否決されてきたことが挙げられる。NZ_M2 にとっては、「闇に葬られる」形の否決では、はっきりとした否決とはとらえられなかったのかもしれない、一方、ほかの二人の会話参加者にとっては、納得がいかない〈提案〉について〈提案説明〉がなければ考慮すべき〈提案〉とはとらえられなかったものと考えられる。(6)の発話連鎖の結果、この提案者の NZ_M2 は黙ってしまい、途中 TW_F1 からジェスチャーで発言を促されたりしている。そして、約50発話後、VN_F3 と TW_F1 は、体育館のイベントを昼食の前に設定することにした。これは、NZ_M2 のフェイスに配慮したものととらえられる。

第三者言語接触場面の2グループによる発話連鎖に共通する特徴としては、〈提案〉についての〈提案説明〉の欠如が挙げられる。そのこのとが、(4)の発話連鎖における課題解決の進展を阻害したり、(5)、(6)の発話連鎖における会話参加者間のコミュニケーション上のずれを生じさせている。

5. まとめ

以上、日本語母語話者同士による母語場面と日本語学習者同士が「共通語としての日本語」を用いて話し合う第三者言語接触場面の会話データを対象に、談話展開のあり方と提案の可決・否決に関する発話連鎖について質的な分析・考察を行った。談話展開については話段、提案の可決・否決に関する発話連鎖については発話機能やストラテジーを分析の概念として用いた。

談話展開に関しては、母語場面、第三者言語接触場面の全てのグループにおいて、計画の内容を細かく検討する前にブレインストーミングを行う「アイデア出し」の話段が見られた。また、昼食の時間帯や場所を最初に検討し、それに基づいて前後のイベントを検討するグループが多かった。母語場面よりも第三者言語接触場面の方が、イベントの順番の変更や新たなイベントの導入といった計画の修正が多い傾向にあった。

提案の可決・否決に関する発話連鎖に関して、母語場面の特徴としては、〈提案〉〈提案説明〉の発話における共同発話、談話展開の中の話題の位置づけに応じた〈提案〉や〈反対〉のストラテジーの直接性への対応などが挙げられる。第三者言語接触場面の特徴としては、〈提案〉につ

いての〈提案説明〉の欠如により、〈提案〉の可決・否決が決まる前に他の〈提案〉や話題に推移してしまったり、〈提案〉が直接的に否決されない場合に対するとらえ方の違いによって会話参加者同士のコミュニケーション上のずれが生じる点が挙げられる。

最後に、「共通語としての日本語」による言語行動に関して、本研究の分析・考察から得られる日本語教育への示唆について考えてみる。「共通語としての日本語」は、日本語母語話者を会話参加者に含まない場面も想定したコミュニケーション・ツールとしてとらえられるので、それを考慮した日本語教育においては必ずしも日本語母語話者らしい日本語使用が目標とされるものではなくなる。日本語母語話者の談話展開や提案についてのストラテジーが、日本語学習者にとって必ず身につけるべきものではないとすると、どのような表現が〈提案〉、〈提案説明〉、〈提案懸念〉などの機能を持つのかを教えることが重要になってくるのではないだろうか。会話参加者に関するどのような場面においても、効果的な説得の仕方として、〈提案〉の発話だけではなく〈提案説明〉を加えることがコミュニケーション上の問題を生じさせないためにも大事だということが言える。

本研究は、AATJ 2018 Annual Spring Conference におけるパネル（竹井ほか 2018）での発表内容をもとに加筆したものである。JSPS 科研費15K0277401（研究題目：国際共修カリキュラムのための「共通語としての日本語・英語」使用実態・意識の調査 研究代表者：竹井光子）の助成を受けている。

参考文献

- 桑原和子（1996）「日本語の「提案」の談話の構造分析」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』2, 1-12
- 桑原和子（1998）「会議の提案の談話における「話段」の展開とストラテジー」『国文目白』37, 33-43 日本女子大学国語国文学会
- 佐久間まゆみ（1987）「文段認定の一基準（I）—提題表現の統括—」『文藝言語研究 言語篇』11, 89-135 筑波大学文芸・言語研究科
- 佐久間まゆみ（2006）「文章・談話の分析単位」『月刊言語』35（10），65-73 大修館書店
- ザトラウスキー，ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析 —勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 竹井光子・吉田悦子（2018）「国際共修カリキュラム（相手言語接触場面）における母語話者の意識と役割」『2018 CAJLE Annual Conference Proceedings』274-283 Canadian Association for Japanese Language Education
- 竹井光子・吉田悦子・下條光明・藤原美保・渡辺文生（2018）「効果的な国際共修カリキュラム

構築のための『共通語としての日本語』話者の言語行動の分析」2018 AATJ Annual Spring Conference (2018年 3月22日 Washington D.C.) パネル発表資料 American Association of Teachers of Japanese

野原美和子・藤江希子・宮谷敦美 (2002) 「提案から同意に至る会話の分析：日本語母語話者と日本語非母語話者の課題解決を目指す会話データを基に」『岐阜大学留学生センター紀要』2001：31-45

星野祐子 (2010) 「課題解決型の話し合い活動における協働的な発話連鎖：聞き手の積極的な参与に着目して (イギリス共同ゼミ)」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書』192-198

南不二男 (1983) 「談話の単位」国立国語研究所 (編) 『談話の研究と教育 I』91-112 大蔵省印刷局

若野恵 (1998) 「可決・否決のストラテジー —大学生の話し合い場面の会話分析—」『日本語と日本文学』26, 23-38 筑波大学国語国文学会

渡辺文生 (2013) 「『話段』から見た講義の談話展開」『日本語学会2013年度秋季大会予稿集』36

Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

An Analysis of Developmental Structure and Agreement/Disagreement on Proposals
in Japanese Problem-Solving Discourse
A Comparison of Native Language Situations and Third-Party Language Contact Situations

Fumio WATANABE

In this study, I investigated developmental structures of *wadan*, ‘functional paragraph’, and speech sequences about agreement/disagreement on proposals in Japanese problem-solving discourse derived from native language situations and third-party language contact situations. The data of this study come from three-party conversation planning a campus tour for high school students.

Analysis of developmental structures of *wadan* shows that 1) all the groups of native language situations and third-party language contact situations had brainstorming *wadan* before they discussed their plans in detail; 2) the groups of third-party language contact situations tended to modify the order of their planning events, and to introduce new events into their existing plans.

Analysis of agreement/disagreement on proposals shows that 1) speakers of native language situations used co-construction in utterances for proposal and proposal reasons, and modified directness of their strategies for proposal or objection according to the importance of the topic; 2) speakers of third-party language situations shifted their topic on proposal to another before they had agreed/disagreed on the existing proposal because of lack of proposal reasons, and caused gap of communication by the difference in their recognition of the situation where the proposal had not been disagreed directly.

This study suggests to education of Japanese as lingua franca the importance of teaching expressions which can be used for proposal, proposal reasons, and concerns for the proposal. Effective way of making a proposal to avoid gap of communication is to make use of utterances for proposal reasons as well as ones for proposal.

Article

Predicate NP Movement in *Tough*-Constructions*

Naoto TOMIZAWA

A new analysis of the derivation of *tough*-constructions in English is proposed in terms of what I will call “predicate NP movement” and an additional A-movement, supplemented by the late merger of D. The idea that the NP part of the subject DP of *tough*-constructions has its origin in the “gap” position in the infinitival complement clauses of *tough*-predicates is not a new one: Sportiche (2006) and Messick (2012). The proposal to be pursued here is different from Sportiche’s in that the extraction of an NP out of a DP occurs basically in the original gap position. This enables us to give a parallel and systematic analysis to the formation of infinitival relative constructions and *tough*-constructions. It is also shown that the restricted distribution of gaps in subject positions in these constructions observed and analyzed by Postal (1974), Nakamura (1976), Stowell (1987), Takahashi (1997), Maruta (2013), among many others, are systematically accounted for.

1. Introduction

This paper proposes a new analysis of the derivation of *tough*-constructions in English as in (1a, b) in terms of what I will call “predicate NP movement” and an additional A-movement of a predicate NP to the subject position of the constructions, with a supplementary late merger of D, as outlined in the schematic derivation in (2a-c) for the sentence (1a).

- (1) a. The book is easy to put on the table
 b. The assignment is an absolute pain to do
- (2) Derivation for sentence (1a)
- a. [_{VP} PRO put [_{DP} D [_{NP} book]] on the table]
- ↓ A'-movement of “predicate NP” to Spec,C

* At earlier stages of this work I benefited from the information provided by Tadao Maruta and Masaru Nakamura, to whom I have been very grateful. Thanks also go to Stephen Ryan and Kotoe Onodera for discussions of empirical data and to an anonymous reviewer of this journal for valuable comment and suggestions. Any defects remaining are of course my own. This work was supported in part by Grants-in-Aid for Scientific Research (16K02755) from the Japan Society for the Promotion of Science.

- b. [_α [_{NP} book] [_{CP} C [_{TP} PRO to [_{vP*} t_{PRO} put [_{DP} D t_{NP}] on the table]]]]]
 ↓ A-movement of NP to the matrix Spec,T
- c. [_{NP} book] is easy [_α t_{NP} [_{CP} C [_{TP} PRO to [_{vP*} t_{PRO} put [_{DP} D t_{NP}] on the table]]]]]
 ↓ Late merger of D (= *the*) to the raised NP
- d. [_{DP} the [_{NP} book]] is easy [_α t_{NP} [_{CP} C [_{TP} PRO to [_{vP*} t_{PRO} put [_{DP} D t_{NP}] on the table]]]]]

The idea of this A'-movement of a predicate NP stems from the promotion/raising analysis of relative clause structures and quite similar analyses have been entertained by Sportiche (2006) and Messick (2012). They, however, suggest that the extraction of NP out of DP occurs not in the original gap position (typically, object positions) but in the Spec,C position created by A'-movement of the relevant DP operator.

The paper shows that our analysis of NP extraction from within the original gap in *tough*-constructions has interesting consequences for the account of the restricted distribution of gaps in subject positions observed and/or analyzed by many researchers (see Postal (1974), Nakamura (1976), Stowell (1987), Takahashi (1997), Maruta (2013) and references therein). Specifically, our analysis accounts for the unavailability of subject gaps in (3a), just on a par with the account offered by Takahashi (1997), and for the contrast between ungrammatical (3b) and grammatical (3c).

- (3) a. ?*John is easy to believe ___ to have kissed Mary (Takahashi 1997)
 b. *John is difficult ___ to solve these problems (Browning 1987)
 c. The room is easy ___ to be heated (Nakamura 1976)

In what follows, I will motivate in section 2 the derivation of *tough*-constructions in terms of an A'-movement of a predicate NP and its subsequent A-movement to the matrix Spec,T, followed by a supplementary late merger of D. Section 3 examines consequences of this analysis with respect to the restricted distribution of subject gaps in the constructions. Section 4 is a conclusion.

2. Predicate NP movement in relative clauses and *tough*-constructions

This section motivates the derivation of *tough*-constructions in English in terms of predicate NP movement as outlined in (2a-d) above. Section 2.1 is concerned with the categorical status of the obligatory “gap” in the constructions. Section 2.2 turns to an A-movement of predicate NPs into the matrix Spec,T and gives a couple of pieces of evidence in favor of this analysis, which include new ones not provided in Sportiche (2006).

2.1. DP/NP inconsistency in relative clause formation

As noted in section 1, our analysis is motivated by the promotion/raising analysis of relative clause formation. This subsection aims to introduce a “direct” promotion/raising analysis of infinitival relative clause constructions so as to provide the foundation for the proposal of the derivation of *tough*-constructions. Infinitival relative clauses share some important properties with *tough*-complement clauses: they are infinitival, do not allow overt *wh*-operator of nominal type (*who*, *which*), show Subject Condition effects (see Browning 1987). The unavailability of overt *wh*-operator of nominal type in infinitival relative clauses strongly suggests a “direct” raising/promotion analysis of the head/antecedent of the relevant relative clauses (without the mediation of null operators), which I will adopt in this paper. Since this direct promotion/raising analysis was proposed by Schachter (1973) for finite relative clauses, I will start with the discussion of finite relative clauses under the “direct” promotion/raising analysis.

Analyses of relative clause structures are always tied with an issue of the apparent categorical mismatch between the original gap and the head/antecedent of the relevant relative clause.

Given the DP/NP dichotomy in the DP analysis of noun phrases (see e.g. Abney 1987), it is a common practice to treat a DP as an element denoting an individual and an NP as one denoting a property (i.e., predicate). In this tradition it is quite natural to assume that the gap (___) in the relative construction in (4) is a DP rather than an NP because the verb *put* semantically selects an individual rather than a property/predicate.

(4) the book that John put ___ on the table

When we turn our attention to the syntactic category of the head/antecedent of the restrictive relative clause, on the other hand, we have good reason to assume that it is an NP rather than a DP. The structure for (4) should be (5).

(5) [_{DP} the_D [_{NP} [_{NP} book] [_{CP} that John put ___ on the table]]]

Discussions of syntactic differences between restrictive relatives and non-restrictive (appositive) relatives in Jackendoff (1977) favor this analysis strongly. In the tradition of semantics as well, the treatment of the head/antecedent of the restrictive relative clause as a predicate (namely, type <e,t>, rather than type e for an individual) is common. Thus, Heim & Kratzer (1998) assign to (6a) the structure in (6b) and state that both [_{NP} house] and relative clause [which is empty] are <e,t> (namely, predicates) and they are combined by

their rule of Predicate Modification (p. 88).¹ The NP part *house which is empty*, thus, denotes the function (6c), where D_e = set of individuals.

- (6) a. the house which is empty
 b. $[_{DP} \text{the}_D [_{NP} [_{NP} \text{house}] [_{CP} \text{which is empty}]]]$
 c. $\lambda x \in D_e . x \text{ is a house and } x \text{ is empty}$

This NP analysis of the head/antecedent of restrictive relative clauses provides a straightforward account for the ungrammatical status of sentences like (7a): proper nouns are superficially Ds and hence have no ability to serve as the head/antecedent of relative clauses due to categorical mismatch (NP vs DP) and/or semantic mismatch ($\langle e, t \rangle$ vs e). When a proper noun is converted to a common noun, henceforth, it can serve as a legitimate head/antecedent both syntactically and semantically, as shown by (7b), where it means “person by the name of Sue Jones.”

- (7) a. *John that came to dinner (Jackendoff 1977)
 b. She is obviously not the Sue Jones they are looking for.
 (Huddleston & Pullum 2002 (hererafter, H&P 2002))

Similarly, the contrast between (8a) and (8b) follows from this NP analysis. *John’s book* in (8a) is a full-fledged DP denoting an individual and, hence, inappropriate as a head/antecedent, whereas *book of John’s* is an NP serving as a predicate of the semantic type $\langle e, t \rangle$, legitimate as the relevant head/antecedent.

- (8) a. *John’s book that you read
 b. the book of John’s that you read. (Both examples from Chomsky 1986)²

These considerations strongly suggest that the head/antecedent of relative clauses are NPs rather than DPs.

Returning to the syntactic analysis of the internal structure of the relative construction (4), we now have a DP/NP inconsistency: while the gap (___) is best analyzed as a DP from the viewpoint of semantic selection, syntactic and semantic evidence points to an NP status of its purported antecedent occupying the

¹ The rule of Predicate Modification is given in (i), where $\| \delta \|$ = denotation of δ , $D_{\langle e, t \rangle}$ = set of all functions from D_e to D_t , 1 = “true.”

(i) Predicate Modification (Heim & Kratzer 1998, p. 65)
 If α is a branching node, $\{\beta, \gamma\}$ is the set of α ’s daughters, and $\| \beta \|$ and $\| \gamma \|$ are both in $D_{\langle e, t \rangle}$, then $\| \alpha \| = \lambda x \in D_e . \| \beta \| (x) = \| \gamma \| (x) = 1$.

² See also Jackendoff (1977, p. 181) for a similar contrast.

head/antecedent position.

A simple solution we pursue here is a variant of the direct promotion/raising analysis whereby an NP is extracted out of a DP and undergoes an A'-movement to adjoin to CP, as illustrated in the structural change from (9a) to (9b) (see Schachter 1973).³

- (9) a. [_{CP} that [_{TP} John put [_{DP} D [_{NP} book] on the table]]
 b. [_α [_{NP} book] [_{CP} that [_{TP} John put [_{DP} D t_{NP}] on the table]]]
 c. [_{DP} the_D [_α [_{NP} book] [_{CP} that [_{TP} John put [_{DP} D t_{NP}] on the table]]]]]

In (9b), α , with an $\langle \text{NP}, \text{CP} \rangle$ structure, is somehow permitted in the light of the labeling algorithm (LA) (Chomsky 2013).⁴ One possibility worth pursuing is that C in relative clauses is endowed with a [Predicate]-feature, which is checked by a predicate of an appropriate type: namely NP (but not VP or adverb, for example). The $\langle \text{NP}, \text{CP} \rangle$ under consideration, then, could be labeled as $\langle \text{Pred}, \text{Pred} \rangle$ by means of feature sharing.

Let us suppose this is the case and proceed to the examination of the next stage of the derivation illustrated in (9c) above, where *the_D* is merged with α . In the tradition of the semantic treatment of definite descriptions it is a common practice to treat *the* as a function that maps the set of $\langle e, t \rangle$ denoted by the relevant NP to exactly one individual *e*. Thus, if *the* is applied to *president of the US*, it yields *Donald Trump* (at the time of writing) (see Heim & Kratzer 1998, p. 74). A similar analysis is applied to the interpretation of (9c), where the set of denotations of type $\langle e, t \rangle$ corresponding to *book that John put on the table* is defined (narrowly) by the discourse/world of the relevant speaker/hearer. Therefore, it is natural to assume that D has a function to map a predicate $\langle e, t \rangle$ to an individual (*e*), insofar as the resulting DP

3 For analyses of relative clause formation, see also Kayne (1994), Sauerland (1998), Hulsey & Sauerland (2006), among many others.

4 Throughout the paper I will assume that raised nominals such as *book* in (9b) are actually phrasal rather than heads with the consequence that they cannot provide the label of the dominating constituent (e.g. α in (9b)) in the light of LA, unlike the analysis of *that*-relative clauses proposed by Donati & Cecchetto (2011), as correctly observed by an anonymous reviewer.

The assumption that *book* in (9b) is phrasal is not implausible at all, given that what we have been referring to as an NP here is actually a combination of a nominalizer *n* and its complement N. “NP-movement,” then, is actually *nP*-movement. However, I will continue to use the simplified representation [_{NP} book_N] as a shorthand for the formal [_{nP} *n* book_N].

Since the head/antecedent of relative clauses is uniformly phrasal, our analysis departs from Donati & Cecchetto’s (2011), where *book_N* in (i) is a head (rather than a phrase) and transmits its label to α .

(i) the_{D2} [_{α(-NP)} book_N] [_{CP} that you saw [_{DP1} D₁ t_N]]]

The head status of the head/antecedent of relative clauses is quintessential for their labeling purposes. Notice that if the head/antecedent is phrasal, as in (iib), it is unable to label α . In cases like this, they appeal to a late merge of *of John to picture* after the latter transmits its label to α as depicted in (iic).

(ii) a. the picture of John that I prefer ___ is on the top
 b. [_α [_{NP} picture of John] [_{CP} that I prefer [_{DP1} D₁ t_N]]]
 c. [_{α(-NP)} [_N picture] [_{CP} that I prefer [_{DP1} D₁ t_N]]]

They argue that the analysis predicts that constituents “late merged” in this way cannot reconstruct and that this prediction is borne out correctly. The lack of reconstruction effects is, however, empirically incorrect; for related phenomena see footnote 11.

denotes an individual (or put differently, insofar as it is referential). In the case of nominal expressions appearing in the complement position of *be*, things are a little complicated. Consider the following examples.

- (10) a. She's secretary of the bushwalking club.
 b. She's the secretary of the bushwalking club. (Both examples from H&P 2002, p. 271)

In (10a), *secretary of the bushwalking club* denotes a property (namely, serves as a predicate) and does not accompany an overt determiner. It could be said that syntax and semantics coincide in a sense: property/predicate reading \leftrightarrow absence of D. This correlation is not bijective, however. This is explicitly demonstrated by (10b), which has an occurrence of *the* and can still retain the same property/predicate meaning as (10a).⁵ We will understand this in the following way.

- (11) a. Every NP is merged with D, projecting DP.
 b. D has two variants from a semantic point of view:
 (i) a function that maps $\langle e, t \rangle$ to e ,
 (ii) a semantically vacuous element that maps $\langle e, t \rangle$ to $\langle e, t \rangle$.⁶

Both (10a) and (10b) have a DP as the complement of *be*; in the former the empty D is semantically vacuous and expresses a property that the complement NP originally has (namely, serves as a predicate), whereas in the latter the D could be understood either as a semantically vacuous element or as a function that maps $\langle e, t \rangle$ to an individual e . This semantic-vacuity option is available in the complement position of *be* but is strictly prohibited in the object position of, say, *put*, where an individual e (rather than a predicate $\langle e, t \rangle$) is required for semantic reasons.

An additional comment is now in order on the status of the D that merges with the relative clause ($[_a$ NP CP]) constructed by A'-movement of a predicate NP. We are assuming that this D is a different element from the empty D stranded by the predicate NP movement. To put it differently, the numeration for *the book that John put on the table* contains four different Ds: (i) empty D that takes *book*, (ii) *the* that takes *table*, (iii) empty D that takes *John*, and (iv) *the* that takes *book that John put on the table*.⁷

5 H&P (2002, p. 271) observe that (10b) is ambiguous between a predicative interpretation of *the secretary of the bushwalking club* just as in (10a) and its specifying interpretation. No comparable ambiguity holds for the NP without an overt D in (10a).

6 As examples of semantically vacuous elements, Heim & Kratzer (1998, pp. 61f) give *be* in predicative sentences, *of* in "proud of John," and an indefinite article *a(n)*.

7 The fourth instance of D here, which introduces $[_a$ NP CP], has two variants in the sense of (11b), too. (11bi) is instantiated by common referential restrictive relative constructions as well as the example in (ia) below, where $[_{NP}$ scholar] comes from the predicate complement of the predicative verb *be* and the whole DP denotes an individual. (ib) can be seen as an example

This supposition of the presence of the fourth D in this list is inevitable in the predicate NP promotion/raising analysis and is shared by Schachter. From a semantic point of view, the function of this D is to turn $\langle e, t \rangle$ to e. This would mean that the presence of this D is required by the presence of the $\langle e, t \rangle$ that needs to be turned into e. Since the $\langle e, t \rangle$ that needs to be turned into e is the relative clause itself, I will conclude here that this D is somehow introduced into the relevant numeration by the [Predicate]-feature on C.

Let us summarize our direct promotion/raising analysis of relative clauses.

(12) Restrictive relative clause formation

Syntactic operations	Semantic processes
i. A'-movement of NP out of DP	Variable introduction (λ -abstraction)
ii. NP-CP merger; Labeling	Predicate Modification (see fn. 1)
iii. D-NP merger; Labeling	Mapping from $\langle e, t \rangle$ to e ⁸

An essentially similar analysis is extended to infinitival relative clause formation. Take (13a) as an example. It is derived through the steps in (13b-d). As noted at the outset of this subsection, infinitival relative clauses of (13a) type do not tolerate overt *wh*-operators. In this light, the direct promotion/raising analysis is the simplest and most appropriate approach.

(13) a. the book to put on the table

- b. $[_{VP^*} \text{PRO put } [_{DP} \text{D } [_{NP} \text{book}]] \text{ on the table}]$
 ↓ A'-movement of NP to Spec,C; Variable introduction (λ -abstraction)
- c. $[_{\alpha} [_{NP} \text{book}] [_{CP} \text{C } [_{TP} \text{PRO to } [_{VP^*} \text{t}_{PRO} \text{put } [_{DP} \text{D t}_{NP}] \text{ on the table}]]]]]$
 ↓ Merger of D; Mapping from $\langle e, t \rangle$ to e
- d. $[_{DP} \text{the } [_{\alpha} [_{NP} \text{book}] [_{CP} \text{C } [_{TP} \text{PRO to } [_{VP^*} \text{t}_{PRO} \text{put } [_{DP} \text{D t}_{NP}] \text{ on the table}]]]]]]]$

For the discussion that follows, the stage (13c) is important because it is shared by the derivation that yields *tough*-constructions.

of (11bii) since the whole DP denotes a (non-)property attributed to *the interview*.

(i) a. Her book displays the fine skeptical intelligence of $[_{DP} \text{the scholar she is}]$

b. The interview turned out not to be $[_{DP} \text{the ordeal that I had thought it would be}]$ (Both examples from H&P 2002)

8 This is achieved in Heim & Kratzer (1998) by the rule of Functional Application (p. 44).

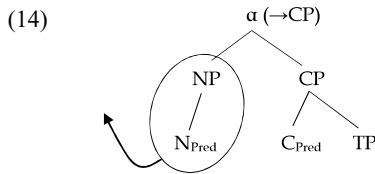
(i) Functional Application

If α is a branching node, $\{\beta, \gamma\}$ is the set of α 's daughters, and $\|\beta\|$ is a function whose domain contains $\|\gamma\|$, then $\|\alpha\| = \|\beta\| (\|\gamma\|)$.

2.2. The derivation of *tough*-constructions

Suppose that we have arrived at the stage (13c) above, where $[_{NP} \text{ book}]$ has merged with CP to satisfy the [Predicate]-feature on C. In the preceding section we assumed that this $[_{\alpha} \text{ NP CP}]$ structure is labeled thanks to the shared feature [Predicate].

Let us now hypothesize that this labeling in terms of the [Predicate]-feature sharing is optional. If this feature-sharing option is not taken, then $[_{\alpha} \text{ NP CP}]$ is unlabelable as it is. This type of labeling problem is typically avoided by movement operations (see Moro 2000, Chomsky 2013, Tomizawa 2016, among many other implementations of this idea). In our present case, NP is moved out of α , with the consequence that α is labeled as CP.



We now have two points to make clear: (i) the destination of the movement of the extracted NP and (ii) the treatment of a D that remains in the numeration. Remember that we have a D in the relevant numeration, which would have merged with α if $\langle \text{Pred}, \text{Pred} \rangle$ feature-sharing had occurred as outlined in the preceding subsection for the derivation of relative clause structures. It is quite plausible to expect that, in the derivation involving (14), this D is ultimately merged with the extracted NP; otherwise, the relevant derivation either would not terminate (because the D remains unmerged) or would yield an unintelligible interpretation (e.g., the D is directly merged with CP in (14): *the to put on the table*).

How is this merger of D and the extracted NP made possible, then? Drawing upon the suggestions by Sportiche (2006) and Messick (2012), I will pursue the possibility that the D is “late” merged with the extracted NP after the latter moves into Spec,T of the matrix clause whose predicate consists of a *tough*-predicate such as *easy*, *an absolute pain*. This derivation is illustrated in (15), which corresponds to the sentence *the book is easy to put on the table*.

- (15) a. $[_{\alpha} [_{NP} \text{ book}] [_{CP} C [_{TP} \text{ PRO to } [_{VP^*} t_{\text{PRO}} \text{ put } [_{DP} D t_{\text{NP}}] \text{ on the table}]]]]]$ (=13c)
 ↓ A-movement of $[_{NP} \text{ book}]$ to the matrix Spec,T
 b. $[_{\beta} [_{NP} \text{ book}] [_{TP} T \text{ is easy } [_{\alpha(=CP)} t_{\text{NP}} [_{CP} C [_{TP} \text{ PRO to } [_{VP^*} t_{\text{PRO}} \text{ put } [_{DP} D t_{\text{NP}}] \text{ on the table}]]]]]]]]]$
 ↓ Late merger of D to NP in the matrix Spec,T
 c. $[_{\beta} [_{DP} \text{ the}_D [_{NP} \text{ book}]] [_{TP} T \text{ is easy } [_{\alpha(=CP)} t_{\text{NP}} [_{CP} C [_{TP} \text{ PRO to } [_{VP^*} t_{\text{PRO}} \text{ put } [_{DP} D t_{\text{NP}}] \text{ on the table}]]]]]]]]]$

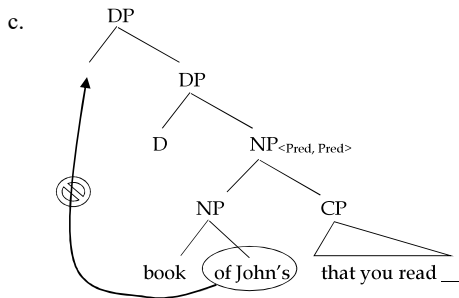
This analysis of *tough*-constructions has a number of direct consequences. First, the extracted NP can live a “DP” life independently of the DP life of the NP in original gap position, just as the promoted/raised NP does in relative clause formation. Overt quantifiers like *no*, being D, can be added to the extracted/promoted/raised NP, so that both instances of *nothing* in (16a, b) can never be understood in the original gap positions (= no scope reconstructions).

- (16) a. Nothing is hard for Melvin to lift __ (Postal 1974)
 b. nothing that I eat __ (Schachter 1973)

(16a) does not mean that it is hard for Melvin not to lift anything; nor does (16b) imply that I do not eat anything.

Second, just because the NP in *tough*-constructions is extracted from [_α NP CP], it can lead a more independent “DP” life than does the NP that stays within *α* in relative clauses. Given an NP of the form *book of John’s*, the possessor cannot raise to Spec,D in a relative clause structure as seen in (8a, b), repeated here as (17a, b), presumably due to some form of inactivity condition stemming from the <Pred, Pred> feature-sharing.

- (17) a. *John’s book that you read
 b. the book of John’s that you read.



In the case of an NP moved into the matrix Spec,T of *tough*-constructions as in (18a), on the other hand, no such obstruction to possessor raising exists, so that we can derive (18b).⁹

- (18) a. [_{TP} [_{NP} book of John’s] is an absolute pain [_{CP} t_{NP} [_{CP} to read [_{DP} D t_{NP}]]]]

9 For the need of a similar possessor raising operation, see Takahashi & Hulsey (2009, fn. 10).

- b. [_{TP} [_{DP} John's D [_{NP} book ___]] is an absolute pain [_{CP} t_{NP} [_{CP} to read [_{DP} D t_{NP}]]]]

The distributional differences of proper nouns and pronouns can be accounted for in a similar fashion:

- (19) a. *John/he that came to dinner

- b. John/he is easy to please

Let us assume that both proper nouns and pronouns are inherently Ns and they are obligatorily combined with Ds. In relative clause formation, [_N John/he] merges with CP with a resulting label <Pred, Pred>, just as in (17c) above. Movement of N to D, which is required for proper interpretation of proper nouns and pronouns, is blocked in this structure, again due to some inactivity condition derivative from this feature sharing. In the matrix Spec,T in *tough*-constructions, no comparable constraint is imposed on the raising of N to D.

The unique behavior of the elements in the edge of D in the Spec,T of *tough*-constructions is the highlight of Sportiche's (2006) analysis: in DP, the edge does not exhibit reconstruction effects (as glimpsed above with respect to quantifier *no* and possessors), whereas the interior shows reconstructions. Therefore, we will list the following reconstruction effects as the third immediate consequence of our analysis.

- (20) a. Pictures of his_i friends are easy to persuade [every photographer]_i to sell ___

- b. Pictures of [each other]_i would be easy to persuade them_i to sell ___

(Both examples from Sportiche 2006)

Since *his* and *each other* occur in the interior of NP, they have copies of their own within the original gaps (___). Therefore, *his* in (20a) can be understood as a variable bound to *every photographer*; *each other* in (20b) refers to *them*.^{10, 11}

A fourth immediate consequence of predicate NP movement is the suppression of weak crossover

10 As an anonymous reviewer correctly observes, addition of quantifiers to the subjects in (20a, b) results in ill-formedness. Thus, Sportiche (2006) reports:

- (i) a. *Most pictures of his_i friends are easy to persuade [every photographer]_i to sell ___
 b. *Most pictures of [each other]_i would be easy to persuade them_i to sell ___

The matrix subject DPs cannot satisfy two conflicting requirements simultaneously. Bound pronoun interpretation and Binding Condition (A), on the one hand, require the subject DPs to reconstruct; the quantifier *most*, on the other, requires the DPs to remain in the matrix clauses because it has no reconstruction site within the gap positions in the embedded clauses.

11 A similar reconstruction effect is observed in restrictive relative clauses. The following example from Hulsey & Sauerland (2006, p. 121) contains a reflexive variable bound to the quantifier *everybody*:

- (i) The picture of himself that everybody sent in ___ annoyed the teacher

For *himself* to serve as a bound pronoun, reconstruction is needed. Therefore, Donati & Cecchetto's (2011) late merge analysis of PPs like *of himself* is untenable and their claim that the head/antecedent of relative clauses are uniformly heads is weakened.

effects as observed by Lasnik & Stowell (1991):

- (21) a. John_i should be easy for his_i wife to love ___
b. John_i was hard to persuade his_i boss to vouch for ___

The element that moves over the pronouns in our analysis is not [_{DP} John] but [_{NP} John], which is not referential by definition. Binding is a relation holding between referential expressions and, hence, the structures in (21a, b) do not fall under the genuine weak crossover configurations. The same analysis could be applied to the lack of weak crossover effects in restrictive relative constructions as in (22), though the judgement is not uniform among speakers (see Lasnik and Stowell 1991, p. 698).

- (22) the man who his mother loved best (Chomsky 1982, p. 91)

A fifth immediate consequence of predicate NP movement is concerned with the A-movement of an NP that comes from within a predicative complement to *be*, *become*. It is often claimed that such examples do not make well-formed *tough*-constructions. Thus, H&P (2002, p. 1245) state that (23a) is marginal at best.

- (23) a. ?An ideal husband is not easy to be ___ (H&P 2002)
b. *The best doctor in Boston isn't easy to become ___ (Longenbaugh 2017)
c. *The strongest woman in the universe is not easy to become ___
d. *The world's cheapest full professor is difficult to turn into ___ (c/d from Postal 1990)

However, it does not seem to be right to conclude that these are uniformly ungrammatical, because we have acceptable examples as shown in (24):

- (24) a. What is the hardest type of doctor to be ___
b. A neurosurgeon is the hardest type of doctor to become ___
c. What type of doctor is much easier to become ___
d. The chancellor of that university is (the) most difficult to become ___

The example in (24c) is very suggestive about the semantic property of the subject expressions in these examples: it denotes the type/kind of a doctor rather than the identity of a particular doctor. This semantic characterization of the subject expression is extended to other examples. Thus, for (24d), let us suppose

that the chancellor of that university is John Smith. Then, what is being talked about in (24d) is not the identity of the chancellor of that university (= John Smith) but the type/kind/character of the social position (= chancellor) occupied by John Smith at that university.

The type/kind that the subject expressions denote in (24) is not the denotation type of <e,t>; rather, it can be viewed as a subcase of individuals (e). Hence, this type/kind reading of the subject expressions is a good solution to accommodate apparently conflicting semantic requirements imposed on the two DPs involved. Since the original gaps are predicative complements of *be/become*, they are <e,t>; the subject DPs, on the other hand, are e by definition.

Insofar as this line of reasoning holds, it lends additional support for the promotion/raising analysis of a predicate NP supplemented by late merger of D.

Returning to the examples in (23), consider source(s) of their ungrammaticality. One is the difficulty to imagine a context appropriate for a type/kind interpretation of the subject DPs. Given *an ideal husband* in (23a) and *the strongest woman in the universe* in (23c), it seems that we are more inclined to seek for the individuals that satisfy the descriptions. Similar considerations seem to apply to *the best doctor in Boston* in (23b) and *the world's cheapest full professor* in (23d). Because of the superlative forms, we tend to seek for the individuals appropriate for the descriptions.

Let me add here that an infinitival relative clause is also possible with a gap in the predicative complement of *be*, as observed by H&P (2002, p. 1067).

(25) A systems analyst wouldn't be such a bad thing to be ___¹²

The following (more or less idiomatic) examples can be viewed as further instances of infinitival relative clauses with an original gap in the predicative complement of *be*.

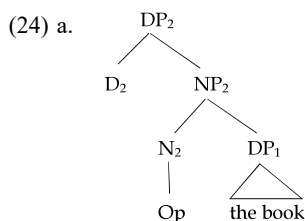
- (23) a. a mother to be
- b. a new owner soon to be
- c. a feeble James Dean wannabe

This concludes the motivation for A-movement of a predicate NP into Spec,T and a subsequent late merger of D for the derivation of *tough*-constructions.

Before turning to consequences for the restricted distribution of subject gaps in *tough*-constructions, I would like to make a short, critical comment on Hicks' (2009) "smuggling" analysis of the constructions.

¹² Although H&P treat this example as an infinitival relative construction, it could be analyzed as an instance of *tough*-constructions insofar as the type/kind reading of *a systems analyst* is available.

He proposes that null operator is a DP consisting of a D head and its N complement, which has a null operator feature and obligatorily selects a DP that serves as the antecedent. In the case of *the book is easy to put ___ on the table*, the empty object position of *put* is originally occupied by the DP₂ in (24a).



- b. [_{CP} [_{DP2} D₂ N₂ [_{DP1} the book]]] [_{TP} to put t_{DP2} on the table]]
- c. [_{TP} [_{DP1} the book] is easy [_{CP} [_{DP2} D₂ N₂ t_{DP1}]] [_{TP} to put t_{DP2} on the table]]]

This DP₂ undergoes operator movement to Spec,C as illustrated in (24b); at a later stage of the derivation, DP₁ is extracted out of DP₂ and moves into the matrix Spec,T, as shown in (24c). This smuggling analysis has both a control-related problem and a “look-ahead”-type problem. Look at the following example.¹³

- (25) Among them, John is quite difficult for us to persuade to be easy to please.

In order to generate this “double” *tough*-construction, we have, first of all, to prepare two instances of complex null operators in (26ai) and (26aii). The null operator (26ai) is inserted in the complement position of *please* as indicated in (26b). The whole DP₂ undergoes operator movement to adjoin to Spec,C of *to please* and, later, DP₁ moves out of DP₂ to become the subject of *to be easy to please*, as in (26c). The resulting structure is combined with *persuade*, whose direct object position is filled by the second null operator in (26aii), as indicated in (26d). DP₄ in (26d) undergoes operator movement to Spec,C of *to persuade to be easy to please* and, at the next stage of the derivation, DP₃ is extracted out of DP₄ and moves into the matrix Spec,T, as in (26e).

- (26) a. i. [_{DP2} D₂ [_{NP2} N₂ [_{DP1} PRO]]]
- ii. [_{DP4} D₄ [_{NP4} N₄ [_{DP3} John]]]
- b. to please [_{DP2} D₂ [_{NP2} N₂ [_{DP1} PRO]]]
- c. [_{DP1} PRO] to be easy [_{CP1} [_{DP2} D₂ [_{NP2} N₂ t_{DP1}]]] to please t_{DP2}]

¹³ Examples of this sort came to my attention during the discussions exchanged with Kotoe Onodera in 2012.

- d. persuade [_{DP4} D₄ [_{NP4} N₄ [_{DP3} John_i]]] [[_{DP1} PRO] to be easy [_{CP1} [_{DP2} D₂ [_{NP2} N₂ t_{DP1}]]] to please t_{DP2}]]
- e. [_{DP3} John_i] is difficult [_{CP2} [_{DP4} D₄ [_{NP4} N₄ t_{DP3}]]] to persuade t_{DP4} [[_{DP1} PRO] to be easy [_{CP1} [_{DP2} D₂ [_{NP2} N₂ t_{DP1}]]] to please t_{DP2}]]

In this sentence PRO should be understood as *John*; however, this control is not expected, since the direct object of *persuade* is not *John* but [_{DP4} D₄ [_{NP4} N₄ [_{DP3} John_i]]]. In addition, a “look-ahead”-type problem will arise, if a single element can undergo *tough*-movement twice, for example. In this case, we have to prepare a null operator that selects another null operator such as: [_{DP3} D₃ N₃ [_{DP2} D₂ [_{NP2} N₂ [_{DP1} John]]]]. If a single element can undergo *tough*-movement three times, then we have to prepare a null operator like [_{DP4} D₄ N₄ [_{DP3} D₃ N₃ [_{DP2} D₂ [_{NP2} N₂ [_{DP1} John]]]]]]. These considerations show that the smuggling analysis is not a solution but a restatement of the problem to be solved.

3. Restricted distribution of subject gaps in *tough*-constructions

This section shows that the predicate NP movement analysis proposed here provides a neat account for the restricted distribution of subject gaps in *tough*-constructions. In section 3.1, the present analysis is shown to accommodate the distributional facts of gaps in ECM subject positions discussed in Takahashi (1997). In the discussion, we make a speculation about a possible parameterization of Chomsky’s (2008) generalized inactivity condition. Section 3.2 shows that the availability/unavailability of “local” subject gaps follows essentially from our analysis.

3.1. Gaps in ECM subject positions

Takahashi (1997) discusses two interesting phenomena found in *tough*-constructions. First, when a gap appears in the ECM subject position, the resulting *tough*-constructions are degraded (see e.g. Postal 1974, Browning 1987, Stowell 1987, among many others). Takahashi (1997) takes the degradation as an indication of a Subjacency Condition violation (Subject Condition effects) and pursues a feature movement analysis of null operator movement, according to which the traditional null operator movement is reformulated as a movement of a [null operator]-feature out of the feature bundle that makes up a null operator. The account is very simple and elegant. The degraded status of the *tough*-construction in (27a) below, where [_{F₁,..., __, ..., F_n}] is a null operator and __ is the trace of the [null operator]-feature (= [_{F_{NO}}]) adjoined to the infinitival CP, is attributed to the general prohibition of extraction from within nominal phrases in subject position (namely, Subject Condition effects) and is argued to be comparable to the degradation of regular *wh*-extraction in (27b).

- (27) a. ?*John is easy [F_{NO}] to believe [F₁,..., __, ..., F_n] to have kissed Mary
 b. ?*Who did you believe [a picture of __] to be on sale
 (Both examples from Takahashi 1997)

Our predicate NP movement analysis accounts for the same range of phenomena, since an NP is extracted from within a larger DP. Thus, (27a) has the structure in (28), where extraction of [_{NP} John] from within DP₁ (which is a subject) yields a Subject Condition effect.

- (28) [_{DP2} D₂ [_{NP} John]] is easy [_α t_{NP} [_{CP} to believe [_{DP1} D₁ t_{NP}] to have kissed Mary]]

This account carries over to the degraded status of the gaps in ECM subject positions in infinitival relative clauses as in (29a, b), cited from Browning (1987, p. 235).

- (29) a. *He is not [a man (for us) to expect __ to succeed]
 b. ??They found [a man to believe __ to be the Messiah]

I will take this successful account of the degraded status of these examples as a welcome consequence of the predicate NP movement analysis proposed here. However, the grammatical status of extraction from within ECM subjects is not invariant among researchers. Thus, Chomsky (2008) observes an obviation of Subject Condition effects in the *wh*-extraction in (30).

- (30) Of which car did they believe [the driver __] to have caused a scandal

Since the analysis that Chomsky offers to extractability of elements out of DPs bears a close connection to the second phenomenon Takahashi (1997) discusses, to which we turn later, let us review his analysis and consider a possible way out from the (presumably) dialectal variation we now have in front of us: a Subject Condition effect in (27b) and its obviation in (30).

Chomsky (2008) claims that the paradigm in (31a-d) below follows from his phase theory on the basis of the two restrictions in (32) and (33).

- (31) a. *[Of which car] did [the driver] cause a scandal
 b. [Of which car] was [the driver] awarded a prize
 c. [Of which car] is [the driver] likely to cause a scandal
 d. [Of which car] did they believe [the driver] to have caused a scandal (= 30)

(32) Anti-deep-search¹⁴ (p. 154)

Search that goes too deeply into a phase already passed is disfavored.

(33) Generalized inactivity condition (p. 154)

Extraction from matrix Spec,T is barred.

The contrast between (31a) and (31b) reminds us of Stowell's (1987) ECP-based account, on which Takahashi's analysis is constructed, but Chomsky's phase-based analysis makes a different prediction about (31c, d). Anti-deep-search (31) disfavors extraction from within a phase edge. The structures for (31a-d) are given in (34a-d), respectively, where both t_α and t_β mark the original or intermediate positions that *the driver* drops at on the way to its ultimate destination.

- (34) a. * $[_{CP} [of\ which\ car] did [_{TP} [_\gamma\ the\ driver] T [_{vP}^* t_\alpha\ cause\ a\ scandal]]]$
 b. $[_{CP} [of\ which\ car] was [_{TP} [_\gamma\ the\ driver] T [_{vP}\ awarded\ t_\beta\ a\ prize]]]$
 c. $[_{CP} [of\ which\ car] is [_{TP2} [_\gamma\ the\ driver] T_2 [_{vP}\ likely [_{TP1} t_\beta\ to [_{vP}^* t_\alpha\ cause\ a\ scandal]]]]]$
 d. $[_{CP} [of\ which\ car] did [_{TP2}\ they\ T_2 [_{vP2}^* t_\delta\ believe [_{TP1} [_\gamma\ the\ driver] to\ have [_{vP1}^* t_\alpha\ caused\ a\ scandal]]]]]$

In these examples, Anti-deep-search disfavors extraction of *of which car* from the containing DP at the stage of the derivation where the latter occupies the positions marked by t_α , since t_α is an edge of the relevant phase head (v^*). In (34a), γ is not the right place from which *of which car* can be successfully extracted, because it violates the inactivity condition (33). As a result, (34a) is an inappropriate expression. In (34b), on the other hand, *wh*-extraction out of the containing DP is legitimately carried out at the stage of the derivation where the latter occupies t_β because t_β and its (immediate) destination (Spec,C) reside in the same phase domain of C, giving rise to no violation of Anti-deep-search. In a similar fashion, *wh*-extraction is permitted in (34c) from within the containing DP that occupies t_β . In (34d), *of which car* can be extracted from γ , without inducing an Anti-deep-search violation, because γ and its immediate destination (= t_δ) are in the same phase domain of the matrix v^* . This *wh*-extraction from γ in (34d) does not violate the inactivity condition (33) because γ is an embedded Spec,T.

Chomsky's analysis in terms of Anti-deep-search and the generalized inactivity condition has the following generalization: Extraction from within a subject DP is possible if the DP occupies a *non-matrix* Spec,T. This generalization, however, is easily falsified by the lack of an improvement of acceptability

14 This falls under the general conditions of economy. When a phase head α searches for a goal, it can access a term that occupies the edge of another phase head β insofar as the Phase Impenetrability Condition is respected. Exactly in this environment, α can in principle access a term *within* the edge of β , which is a typical instance of extraction from within subject we are concerned here. However, this "deep" search is more costly than a regular search targeting the edge of β itself.

expected of the embedded version (35b) as compared to the non-embedded one in (35a), both from Huang (1982).

- (35) a. *Who did pictures of please you (p. 486)
 b. *Who do you think pictures of would please John (p. 497)

Given this inadequacy, it seems to be plausible to drop the reference to “matrix clauses” in the definition of the inactivity condition (33) and seek for a more appropriate notion. An idea that might come to mind is to replace “matrix Spec,T” with “finite Spec,T,” with the consequence that both (35b) and (35a)/(34a) are excluded but not (34d)/(34c). However, I will adopt a different reformulation: replacement of “matrix Spec,T” with “the Specifier of T selected by C”:

(36) Generalized inactivity condition (revised)

Extraction from the Specifier of T selected by C is barred.

This revised version singles out the subject of the infinitival complement to ECM/raising predicates as a legitimate extraction site, with the consequence that (34c)/(34d) are good whereas (34a)/(35a)/(35b) are not.

Let us now return to the (presumably) dialectal variation concerning the Subject Condition effect in (27b) and its absence in (30). On the basis of the shared infinitival ECM complement to *believe* in these examples, let me speculate that the revised inactivity condition (36) has a parameter in the choice of the restriction [selected by C]. For those speakers who choose the value [selected by C], the subject of the infinitival complement to ECM verbs (and raising predicates) is a legitimate extraction site, with an absence of Subject Condition effects as in (30). On the other hand, those who do not choose the value treat every instance of extraction from Spec,T as degraded, as in (27b).

With this in mind, we will proceed to the second phenomenon discussed by Takahashi (1997). Referring to Stowell (1987) and Browning (1987), he reports that there are speakers who judge (37a, b) to be better than (37c) (= 27a).

- (37) a. John is easy to believe __ was arrested by the police
 b. John is easy to believe __ to have been arrested by the police
 c. ?*John is easy to believe __ to have kissed Mary (= 27a)

The contrast now follows directly from the combination of Anti-deep-search (32) and the revised inactivity

condition (36), irrespectively of the parameter value to be chosen for the latter condition. The derivations for (37a) and (37b) are represented schematically in (38a, b), respectively, where the position marked t_δ must be filled by a predicate NP. Therefore, the predicate NP must be extracted at t_α or t_β or t_γ .

- (38) a. $[_{DP} D [_{NP} John]]$ is easy $[_{CP2} t_\delta [C_2 PRO$ to $[_{VP^*} t_\gamma [_{VP^*} believe [_{CP1} t_\gamma C_1 [_{TP1} t_\alpha$ was arrested t_β by ...]]]]]]
- b. $[_{DP} D [_{NP} John]]$ is easy $[_{CP2} t_\delta [C_2 PRO$ to $[_{VP^*} t_\gamma [_{VP^*} believe [_{TP} t_\alpha$ to have been arrested t_β by ...]]]]]]

For those who do not choose the parameter value [selected by C], the inactivity condition prohibits NP extraction at t_α ; Anti-deep-search disfavors extraction from within t_γ . Neither the inactivity condition nor Anti-deep-search, however, prohibits extraction from within t_β . For those who do choose the parameter value [selected by C], not only t_β but also t_α in (38b) (but not in (38a)) is a legitimate extraction site for a predicate NP. Therefore, both (38a) and (38b) are predicted to be acceptable, irrespectively of the parameter value for the inactivity condition.¹⁵

3.2. Gaps in “local” subject positions

It seems to be a general consensus that the subject of *tough*-constructions does not have its derivational root in the subject of the infinitival clauses selected by the relevant *tough*-predicates. Various ungrammatical examples are reported as in (39a-d).

- (39) a. *John is hard __ to laugh (Longenbaugh 2017, fn. 17)
 b. *Bob is hard __ to come (Quirk et al. 1985, p. 1229)
 c. *John is difficult __ to solve these problems (Browning 1987, p. 66)
 d. *John is easy __ to like Mary (Chomsky 1981, p. 314)

This prohibition of “local” subject gaps in *tough*-constructions is not an inviolable one, however. Grammatical examples are also reported:

- (40) a. The room is easy __ to be heated (Nakamura 1976, p. 231)
 b. Short love poems are easy __ to be read and understood (Maruta 2013)

This subsection shows that the contrast we now have essentially follows from the analysis proposed in this

¹⁵ A question, however, remains about the restricted acceptability of these examples as noted by Takahashi (1997), which will be left untouched here.

paper, along with general semantic properties imposed on the constructions. In addition, a small breakdown in expected parallelism between *tough*-constructions and infinitival relative clauses occurs, which is to be dealt with by appealing to a matching version of infinitival relative clause formation.

Let us start with the ungrammatical example with an unergative verb in (39a), which has a schematic structure in (41).

(41) * $[_{DP} D [_{NP} \text{John}]]$ is hard $[_{CP} [_{NP} \text{John}]]$ $[_{CP} C [_{TP} t_a \text{ to } [_{vP} t_y \text{ laugh}]]]$

Since t_y is an edge of v^* , extraction of the predicate NP (= $[_{NP} \text{John}]$) from within it is disfavored by Anti-deep-search (32); t_a , on the other hand, is in the Specifier of T selected by C and, hence, extraction from within it is prohibited by the inactivity condition (36) irrespectively of the parameter value chosen. Hence, (41) is illegitimate.

An essentially similar analysis applies to the examples with transitive verbs in (39c) and (39d), whose schematic structures are given in (42a, b), respectively.

(42) a. * $[_{DP} D [_{NP} \text{John}]]$ is difficult $[_{CP} [_{NP} \text{John}]]$ $[_{CP} C [_{TP} t_a \text{ to } [_{vP} t_y \text{ solve } \dots]]]$

b. * $[_{DP} D [_{NP} \text{John}]]$ is easy $[_{CP} [_{NP} \text{John}]]$ $[_{CP} C [_{TP} t_a \text{ to } [_{vP} t_y \text{ like } \dots]]]$

Extraction from within t_y is disfavored by Anti-deep-search; extraction from t_a is barred by the inactivity condition.

It is predicted, therefore, that when the relevant verb is passivized, a legitimate extraction from an (apparent) subject position is possible. This is embodied by the examples in (40a, b). (40a) has the following structure.

(43) $[_{DP} \text{the}_D [_{NP} \text{room}]]$ is easy $[_{CP} [_{NP} \text{room}]]$ $[_{CP} C [_{TP} t_a \text{ to be } [_{vP} \text{heated } t_b]]]]$

Here, extraction of $[_{NP} \text{room}]$ from within t_b is neither disfavored by Anti-deep-search nor blocked by the inactivity condition. Extraction from within t_a is barred by the latter condition, but we have a legitimate extraction site at t_b . Therefore, grammatical *tough*-constructions with “local” subject gaps can be constructed, insofar as the apparent subject originates from an object position. We will return to the reduced productivity of this type of examples later.

It is also expected that an unaccusative verb provides another environment for a legitimate extraction of a predicate NP. This prediction, however, is not borne out, as the ungrammatical status of the example in (37b) shows. This sentence has the following structure.

(44) *_{[DP D [NP Bob]]} is hard _{[CP [NP Bob] [CP C [TP t_α to [VP [VP come t_β]]]]]}

Here, *Bob* originates within t_β, extraction from which is neither disfavored by Anti-deep-search nor barred by the inactivity condition. Since this reasoning seems to be sound, the inability of the sentence corresponding to (44) should come from some semantic factor.

As stated in Lasnik & Fiengo (1974, pp. 553f), “controllable actions” are the relevant semantic notion. Just as *try* and *convince* require their infinitival complements to denote actions that are controllable by the subject and object, respectively, as shown by the incompatibility of stative events (= uncontrollable actions) denoted by *to resemble Harry* in (45a, b), the infinitival complement in *tough*-constructions must also denote an action that can be controlled by the experiencer of the *tough*-predicates, as shown by the unavailability of *to resemble* in (45a), where the relevant experience is implicit.

- (45) a. *John tried to resemble Harry
 b. *Mary convinced John to resemble Harry
 c. *Harry is easy to resemble (All examples from Lasnik & Fiengo 1974)

Returning to the ungrammatical sentence in (37b) **Bob is hard to come*, the event denoted by *Bob to come* is usually quite difficult to interpret as an event to be controlled by a person other than Bob. This accounts for the illegitimacy of (37b).

In relation to the controllability of actions denoted by infinitival complement clauses of *try* and *convince*, Lasnik & Fiengo also note that passive complement clauses are less compatible with these verbs. This is because passive clauses generally denote states, which are usually uncontrollable. Thus, (46a, b) are ungrammatical.

- (46) a. *John tried to be arrested by the police.
 b. *Mary convinced John to be arrested by the police.

However, similar examples are not always judged to be ungrammatical. Insofar as the reading for a controllable action is contextually established, passive complement clauses can appear, as in (47).

(47) The patient tried to be examined by the doctor.

It seems to be natural to extend this consideration to *tough*-constructions. Thus, in order for a passive

infinitival complement to appear in *tough*-constructions, establishment of a context that enables the “controllable action” reading of the event denoted by the passive infinitival complement is necessary. This will account for the reduced productivity of sentences like (40a, b).

As a last topic, let us turn our attention to infinitival relative constructions with gaps in “local” subject positions, as in (48a-c) cited from Quirk et al. (1985, pp. 1267ff). The verb in (48a) is ambiguous between unergative and transitive.

- (48) a. He is the last man to choose (ambiguous)
 b. He is the best man to be chosen
 c. They were the last guest to arrive
 d. the man to fix the sink

Let us suppose that (48d) has the structure below.

- (49) [[_{NP} man] [_{CP} C [_{TP} t_α to [_{VP*} t_γ fix the sink]]]]

Extraction of [_{NP} man] from within t_γ is disfavored by Anti-deep-search; extraction from t_α is barred by the inactivity condition. Therefore, we have a problem in the case of subject gaps of transitive verbs. A similar problem arises with the subject gaps of unergatives as in (48a). The rest, namely passive (48b) and unaccusative (48c), could be predicted correctly if the object positions of the relevant verbs are chosen as the extraction sites for predicate NPs.

The problems presented by transitives and unergatives as in (48d) and (48a) are not readily accommodated within the present analysis. As a speculation, let me suggest that these examples are formed by what is called “matching operation” for relative clause formation, where no promotion/raising of a predicate NP is involved:

- (50) [[_{NP} man] [_{CP} C [_{TP} PRO to [_{VP*} t_{PRO} fix the sink]]]]

To summarize, this section shows that the restricted distribution of gaps in *tough*-constructions and infinitival relative clauses are basically derived systematically from our proposal of predicate NP movement along with a modified (parameterized) version of Chomsky’s (2008) inactivity condition, Anti-deep-search, and a semantic requirement of controllability in the case of *tough*-constructions.

4. Conclusion

This paper has proposed that in both *tough*-constructions and infinitival relative construction, a predicate NP is extracted from the containing DP at an arbitrary stage of its derivation, insofar as this extraction is not disfavored/blocked by Anti-deep-search and the revised inactivity condition originally proposed by Chomsky (2008).

The infinitival complement clauses in *tough*-constructions and infinitival relative constructions are analyzed as sharing the same numeration, with the difference lying in the optionality of the <Pred, Pred> feature-sharing. If the features are shared, the resulting structure is merged with a D, projecting a DP. If the features remain unshared, LA forces further movement of the NP, which (with a subsequent late merger of D) leads ultimately to the formation of *tough*-constructions.

The contrast between the unavailability of scope reconstruction (due to the edge property of D) and the availability of bound pronoun interpretation and anaphoric reconstruction effects (due to the interior of NP) is shown to follow just as in Sportiche's original analysis. In addition, the lack of weak crossover effects and the availability of a kind/type reading of the subject stemming from the predicate complement to *be* are shown to follow from this proposal.

The degraded status of gaps in the subject position of the infinitival clausal complements to ECM verbs and the availability of "local" gaps in the case of passive clauses and their unavailability in transitive and unergative clauses are also shown to derive from this proposal.

References

- Abney, Steven Paul. 1987. *The English noun phrase in its sentential aspect*. Doctoral dissertation, MIT.
- Browning, Marguerite. 1987. *Null operator constructions*. Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam. 1982. *Some concepts and consequences of the theory of Government and Binding*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1986. *Knowledge of language: Its nature, origin and use*. New York: Kluwer.
- Chomsky, Noam. 2008. On phases. In Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta eds., *Foundational issues in linguistic theory: Essays in honor of Jean-Roger Vergnaud*, 133-166. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2013. Problems of projection. *Lingua* 130, 33-49.
- Donati, Caterina and Carlo Cecchetto. 2011. Relabeling heads: A unified account for relativization structures. *Linguistic Inquiry* 42, 519-560.
- Heim, Irene and Angelika Kratzer. 1998. *Semantics in generative grammar*. Malden: Blackwell.
- Hicks, Glyn. 2009. *Tough*-constructions and their derivation. *Linguistic Inquiry* 40, 535-566.
- Huang, C.-T. James. 1982. *Logical relations in Chinese and the theory of grammar*. Doctoral dissertation, MIT.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge grammar of the English language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hulsey, Sarah and Uli Sauerland. 2006. Sorting out relative clauses. *Natural Language Semantics* 14, 111-137.
- Jackendoff, Ray. 1977. *X-bar Syntax: A study of phrase structure*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Kayne, Richard S. 1994. *The Antisymmetry of syntax*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Lasnik, Howard and Robert Fiengo. 1974. Complement object deletion. *Linguistic Inquiry* 5, 535-571.
- Lasnik, Howard and Tim Stowell. 1991. Weakest crossover. *Linguistic Inquiry* 22, 687-720.
- Longenbaugh, Nicholas. 2017. Composite A/A'-movement: Evidence from English *tough*-movement. Manuscript.
- Maruta, Tadao. 2013. "Short love poems are easy to be read and understood." Manuscript presented at MLF 2013 at Keio University.
- Messick, Troy G. 2012. Ellipsis and reconstruction in *tough* infinitives. In Nobu Goto, Koichi Otaki, Atsushi Sato, and Kensuke Takita eds., *Proceedings of GLOW in Asia IX 2012*.
- Moro, Andrea. 2000. *Dynamic antisymmetry*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Nakamura, Masaru. 1976. *Keiyoushi* [Adjectives], Tokyo: Kenkyusha.

- Postal, Paul M. 1974. *On raising: One rule of English grammar and its theoretical implications*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Postal, Paul M. 1990. Some unexpected English restrictions. In Katarzyna Dwiwirek, Patrick Farrell, and Errapel Mejías-Bikandi eds., *Grammatical relations: A cross-theoretical perspective*, 365-385, Stanford: The Center for the Study of Language and Information, Stanford University.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Sauerland, Uli. 1998. *The meaning of chains*. Doctoral dissertation, MIT.
- Schachter, Paul. 1973. Focus and relativization. *Language* 49, 19-46.
- Sportiche, Dominique. 2006. NP movement: How to merge and move in *tough*-constructions. *LingBuzz*.
- Stowell, Tim. 1987. *As so, not so as*. Ms, UCLA.
- Takahashi, Daiko. 1997. Move-F and null operator movement. *The Linguistic Review* 14, 181-196.
- Takahashi, Shoichi and Sarah Hulsey. 2006. Wholesale late merger: Beyond the A/A-bar distinction. *Linguistic Inquiry* 40, 387-426.
- Tomizawa, Naoto. 2016. *Alleged-ru i keiyoushi-teki ukemi-kei-no tougo-hasei* [Syntactic derivations of adjectival passives of *alleged*-type]. In Akira Kikuchi, Takamichi Aki, Toru Suzuki, Naoto Tomizawa, Tatsuya Yamagishi, and Shin-ichi Kitada eds., *Gengogaku-no ima-o shiru- 26-kou* [26 essays in current linguistic research], 277-288. Tokyo: Kenkyusha.

Predicate NP Movement in *Tough*-Constructions

Naoto TOMIZAWA

Abstract

A new analysis of the derivation of *tough*-constructions in English is proposed in terms of what I will call “predicate NP movement” and an additional A-movement, supplemented by the late merger of D. The idea that the NP part of the subject DP of *tough*-constructions has its origin in the “gap” position in the infinitival complement clauses of *tough*-predicates is not a new one: Sportiche (2006) and Messick (2012). The proposal to be pursued here is different from Sportiche’s in that the extraction of an NP out of a DP occurs basically in the original gap position. This enables us to give a parallel and systematic analysis to the formation of infinitival relative constructions and *tough*-constructions. It is also shown that the restricted distribution of gaps in subject positions in these constructions observed and analyzed by Postal (1974), Nakamura (1976), Stowell (1987), Takahashi (1997), Maruta (2013), among many others, are systematically accounted for.

論 文

記憶再生、視線移動、負担からの情報表示における画面サイズと表示位置に関する検討

本 多 薫 (山形大学人文社会科学部)

門 間 政 亮 (宇部フロンティア大学短期大学部)

1. はじめに

学習支援システム用のモニター画面において、どのような画面設計を行えば、学習情報の見逃しや発見が遅れる、誤操作などのヒューマン・エラーや、学習者の疲労、負担を軽減できるのかなどの検討が必要である。最適な画面設計を検討するには、どの位置に表示した情報を入手しにくいのか、画面サイズの違いによる学習者への負担が異なるのかなどを知る必要がある。また、情報表示においては、「目の移動距離が短くなるような表示が必要不可欠である」と指摘されている¹⁾が、既存の学習支援システムの中には学習コンテンツの表示位置や解答を入力する位置等が画面の上下左右に点在しているものが数多く存在しており、これらのシステムについては、視線移動の距離が長く学習者の疲労・負担が大きいと思われる。情報通信白書(平成30年度版)²⁾の「情報通信機器の世帯保有率の推移」によれば、2017年でパソコンが72.5%、タブレット型端末が36.2%である。しかし、学校におけるICT環境整備の在り方に関する有識者会議(文部科学省)の資料3によれば、画面サイズが小さくなったことによる不都合が認識され、「コンピュータ教室をタブレットタイプに置き換える件数は減少した」と報告されている³⁾。また、2019年の日本市場のサイズ別構成比見通しは、20型以上の占有率が85%、23型以上は55%を占める見通しである⁴⁾。そのため、市販のPC用モニターが利用される学習支援システムのモニターの画面サイズにおいても、デスクトップパソコン用の画面サイズは24インチ程度が多いと推察される。また、教育用コンピュータの動向(学校ICT関連仕様分析)によれば、タブレット型の画面サイズは10インチ前後が77.8%で最も多く使用されている³⁾。

そこで本研究では、モニターの画面サイズ24インチと10インチを取り上げ、表示した文字の記憶再生、視線移動、負担からの情報表示における画面サイズと表示位置について、実験を通して検討する。

2. 実験内容

2.1 実験参加者

実験参加者は19～23歳の大学生12名である。実験前に視力、視野が正常であることを確認した。実験開始前に書面および口頭で、「研究の意義、目的」、「研究の内容」、「予測される不利益、危険性」、「研究参加および参加撤回の自由・制限」、「個人情報・研究データの取り扱い」などの説明を行い、書面による同意を得た。なお、山形大学人文社会科学部倫理委員会の承認（承認番号2019-1）を得て実施した。

2.2 実験環境

実験には、24インチワイド液晶フラットパネルのモニター（DELL G2410, 1920×1080 at 60Hz）を使用した。画面サイズは、24インチ画面531mm×299mm（画面アスペクト比16：9）と疑似的に設定した10インチ画面221mm×125mmの2種類とした（図1、図2）。なお、画面サイズ24インチと10インチで異なる機器で実験を行った場合には、色彩や輝度などが違ってしま

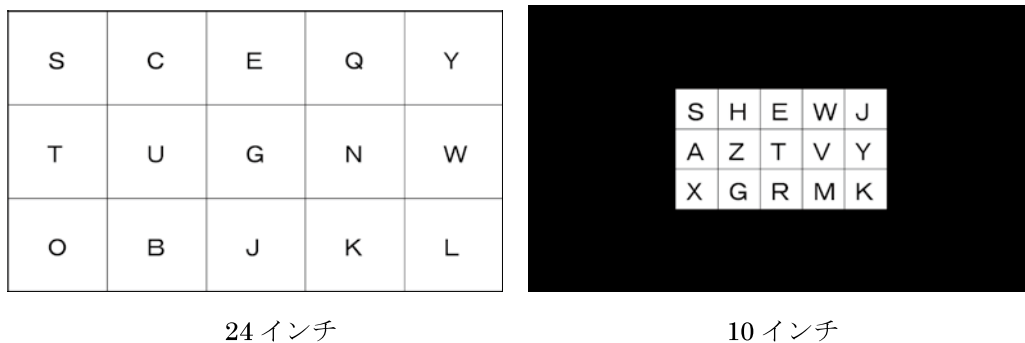


図1 実験画面の一例（アルファベット）

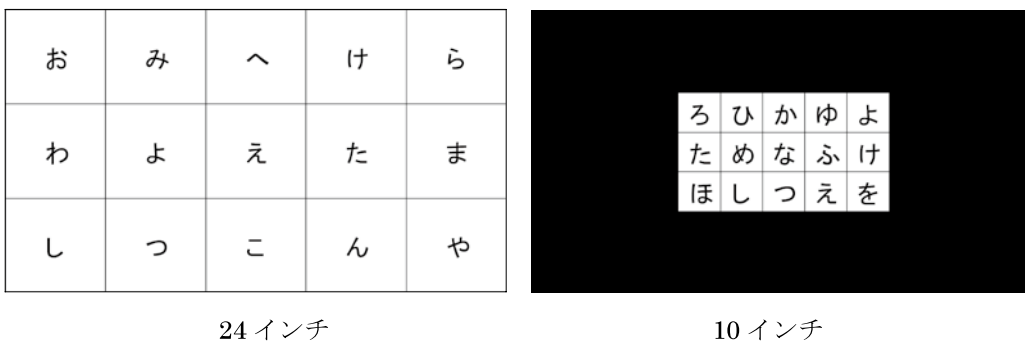


図2 実験画面の一例（平仮名）

うことが考えられるため、24インチワイドモニターの画面を用いて擬似的に作成した10インチ画面で実験を行うことにした。実験参加者にモニターの正面を向かせ、モニターの画面の中心と目の位置との高さが同じとなるようにモニターの高さを調整した。そして、机と画面が垂直（90度）になるよう設定した。また、座位でのオフィス作業での最適視距離は600mm±150mmである⁵⁾ことから、モニターの画面と実験参加者の目の位置までの視距離を600mmに設定した。なお、タブレット型PCの場合には、モニターの画面までの視距離が近くなると予想されるが、本研究ではモニターの画面サイズの違いが情報入手に与える影響を検討するため、実験では画面サイズ24インチと10インチともに視距離は同じに設定した。また、モニターの画面に照明器具からの光線が直接当たらないように調整するとともに、窓のカーテンを閉めた。画面の背景は白色とし、文字は黒色（MSゴシック）とした。画面サイズ24インチと10インチともに、画面を15分割して、その分割した各枠の中央に文字（20mm前後（縦の幅））を配置した。なお、モニター上の輝度は白色部分で239 cd/m²、机上の照度は224～226 lx、室温24～25度、湿度56～70%の環境であった。

2.3 実験方法

実験の流れを図3に示す。チャイム音と共に画面の中央に「+」（プラスマーク：図4）が5秒間表示される。次いで15分割された画面に15文字が10秒間提示される。この10秒間に実験参加者は自由に文字を記憶する。そして、白色の無地の画面に切り替わったら、ただちに用紙に記憶している文字を記入させた（15秒間、自由再生）。記憶の再生では、覚えた順番や表示位置には関係なく再生した文字を記入させた。アルファベットと平仮名を交互に表示し、繰り返し10回を行った（文字2種類×画面サイズ2種類×10回の合計40回）。実験用システムは、文字（アルファベット又は、平仮名）をランダムに発生させ、15種類の文字を自動的に生成する。実験の終了後、主観的評価用紙に回答させた。質問Q1は、「文字の検索は（楽だった・苦労した）」、「文字の検索に余裕が（あった・なかった）」、「画面の大きさは（適切・不適切）」を7段階で回答させた。質問Q2は、「最初にどの位置にある文字を見ましたか？」などである。実験中の視線移動（眼球運動測定装置：竹井機器工業社製・Talk Eye Free T.K.K.2952）と左手人差し指の脈波から心拍（心拍センサ：東京デバイセズ社製・IWS920）を測定した。視線移動の分析では、注視点、停留時間、停留回数、跳躍運動の距離・頻度などを抽出することが一般的である⁶⁾⁷⁾。しかし、本研究の目的は、各表示位置（15分割）において視線が向きやすい位置、また向きにくい位置を把握することである。そのため、文字が表示された10秒間に各表示位置に視線のあった累積回数（1/30秒間隔でサンプリング）を算出すことにした。なお、実験では24インチ画面と10インチ画面の測定順は実験参加者によりランダムとした。

実験参加者には、口頭で『チャイム音が鳴り、画面の中央にプラスマークが5秒間表示されるので、注目してください。その後、画面が分割され、15個のアルファベット、あるいは平仮名が

10秒間表示されます。なるべく多くの文字を記憶してください。10秒経過後に文字が消えます。消えたと同時に、用紙に憶えた文字を記入してください。15秒経過後、チャイム音が鳴り、またプラスマークが表示されます。(一部省略)』と教示した。姿勢に関しては、「実験中、画面を見て作業している間は、極力頭を動かさないでください。(中略) 横を向かず、まっすぐ前を向いて、目の動きだけで画面を見渡すようにしてください。」と指示した。実験では最初に、アルファベットと平仮名の各1回ずつ練習を行った。そして、5分間の座位安静による休息を取った。そして、実験参加者が落ち着いていることを確認してから実験データの測定を開始した。

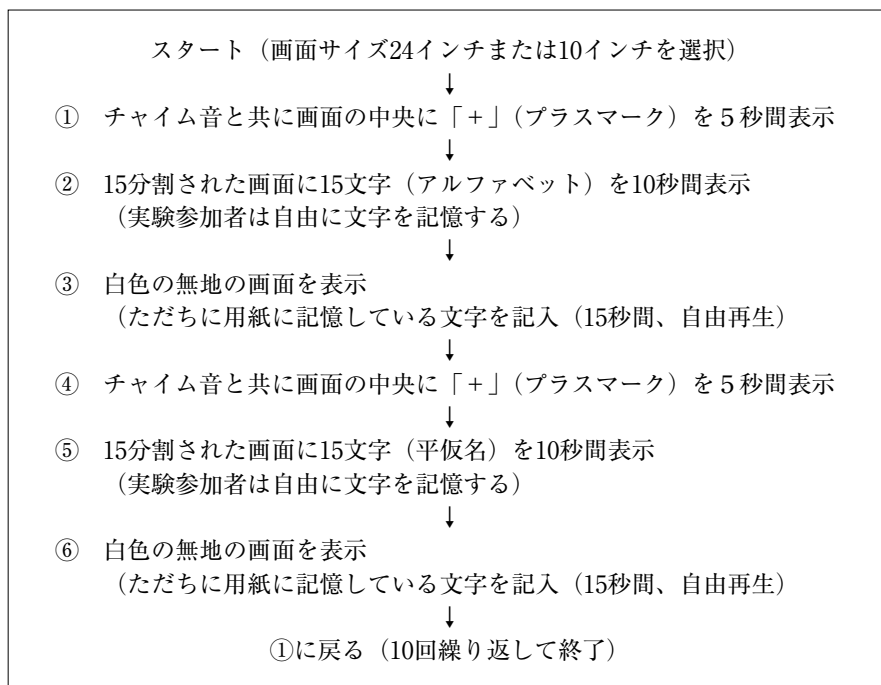


図3 実験の流れ



図4 実験画面 (中央にプラスマーク)

3. 実験結果

3.1 記憶再生と表示位置との関係

表示文字の記憶再生と表示位置の結果（アルファベット）を図5に示す。各実験参加者の10回の試行での各表示位置の正再生率を算出した。ここでの正再生率とは、実験参加者の平均値である。画面サイズ24インチで最も正再生率が高い表示位置は「左上端（56.7%）」である。正再生率が50.0%以上の表示位置は、「左上端」、「中央上左」、「中央上」、「中央」の4か所である。また、最も正再生率が低い表示位置は、「中央左端（34.2%）」である。正再生率が40.0%以下の表示位置は、「中央左端」、「左下端」、「中央下左」、「中央下右」の4か所である。最も正再生率が高い表示位置（アンダーラインで表示）とその他の表示位置の正再生率について、対応のあるt検定を行った結果、2か所の表示位置で有意差が認められた。画面サイズ10インチで最も正再生率が高い表示位置は「中央上左（69.2%）」である。正再生率が50.0%以上の表示位置は、上段の5か所と「中央」の5か所である。また、最も正再生率が低い表示位置は、「中央下右（31.7%）」である。正再生率が40.0%以下の表示位置は、「中央右」、「中央右端」、「中央下右」、「右下端」の4か所である。最も正再生率が高い表示位置（アンダーラインで表示）とその他の表示位置の正再生率について、対応のあるt検定を行った結果、8か所の表示位置で有意差が認められた。また、画面サイズ24インチと10インチの各表示位置の正再生率について、対応のあるt検定を行った結果、表示位置15か所のすべてにおいて有意差は認められなかった。

表示文字の記憶再生と表示位置の結果（平仮名）を図6に示す。画面サイズ24インチで最も正再生率が高い表示位置は「中央上右（67.5%）」である。正再生率が60.0%以上の表示位置は、「中

<u>56.7</u>	51.7	51.7	51.7	47.5
34.2 *	44.2	55.0	45.0	45.8
39.2 *	34.2	44.2	38.3	40.8

24 インチ

63.3	60.8	65.0	<u>67.5</u>	57.5
46.7	53.3	66.7	59.2	50.0
45.8 **	44.2 *	49.2	49.2	40.0 **

24 インチ

59.2	<u>69.2</u>	60.0	57.5	57.5
42.5 **	42.5 *	59.2	35.0 *	35.0 **
43.3 *	41.7 *	47.5	31.7 **	38.3 **

10 インチ

65.8	69.2	<u>74.2</u>	69.2	57.5
50.8 *	59.2	61.7	53.3 *	49.2 *
43.3 *	47.5 **	53.3	44.2 *	50.0 *

10 インチ

正再生率 (%) *: $p<0.05$, **: $p<0.01$

図5 記憶の正再生率と表示位置の関係(アルファベット)

正再生率 (%) *: $p<0.05$, **: $p<0.01$

図6 記憶の正再生率と表示位置の関係(平仮名)

中央上端、「中央上左」、「中央上」、「中央上右」、「中央」の5か所である。また、最も正再生率が低い表示位置は、「右下端 (40.0%)」である。正再生率が50.0%以下の表示位置は、「中央左端」と下段全ての6か所である。最も正再生率が高い表示位置（アンダーラインで表示）とその他の表示位置の正再生率について、対応のある t 検定を行った結果、3か所の表示位置で有意差が認められた。画面サイズ10インチで最も正再生率が高い表示位置は「中央 (74.2%)」である。正再生率が60.0%以上の表示位置は、「左上端」、「中央上左」、「中央上」、「中央上右」、「中央」の4か所である。また、最も正再生率が低い表示位置は、「左下端 (43.3%)」である。正再生率が50.0%以下の表示位置は、「中央右端」、「左下端」、「中央下左」、「中央下右」、「右下端」の5か所である。最も正再生率が高い表示位置（アンダーラインで表示）とその他の表示位置の正再生率について、対応のある t 検定を行った結果、7か所の表示位置で有意差が認められた。また、画面サイズ24インチと10インチの各表示位置の正再生率について、対応のある t 検定を行った結果、表示位置15か所のすべてにおいて有意差は認められなかった。

以上より、最も正再生率が高い表示位置は、左上端（アルファベット、24インチ）、中央上左（アルファベット、10インチ）、中央上右（平仮名、24インチ）、中央（平仮名、10インチ）であった。また、最も正再生率が低い表示位置は、中央左端（アルファベット、24インチ）、中央下右（アルファベット、10インチ）、右下端（平仮名、24インチ）、左下端（平仮名、10インチ）であった。全体の傾向をまとめると、上段左端から上段中央右と中央の正再生率が高く、下段の左右および中央左右端の正再生率が低かった。また、画面サイズ24インチよりも画面サイズ10インチの方が、アルファベットと平仮名ともに、最も正再生率が高い表示位置とその他の表示位置との正再生率に有意差が認められた箇所が多い結果となった。

3.2 視線移動と表示位置との関係

視線の累積回数と表示位置の結果（アルファベット）を図7に示す。各実験参加者の10回の試行での各表示位置に視線のあった累積回数の平均を算出した。ここでの視線の累積回数とは、実験参加者の平均値である。画面サイズ24インチで最も視線の累積回数が多い表示位置は「中央 (54.5回)」である。また、視線の累積回数が10回以下の表示位置は、「左上端」、「中央上左」、「右上端」、「左下端」の4か所である。画面サイズ10インチで最も視線の累積回数が多い表示位置は、「中央 (28.6回)」である。また、視線の累積回数が10回以下の表示位置は、「左上端」、「右上端」、「左下端」、「右下端」の4か所である。また、画面サイズ24インチと10インチの各表示位置の視線の累積回数について、対応のある t 検定を行った結果、「中央下」($p < 0.01$)、「中央下右」($p < 0.01$)の2か所には有意差が認められたが、他の13か所には有意差は認められなかった。

視線の累積回数と表示位置の結果（平仮名）を図8に示す。画面サイズ24インチで最も視線の累積回数が多い表示位置は「中央 (53.3回)」である。また、視線の累積回数が10回以下の表示位置は、「左上端」、「中央上右」、「右上端」、「左下端」の4か所である。画面サイズ10インチで最

も視線の累積回数が多い表示位置は「中央 (29.7回)」である。また、視線の累積回数が10回以下の表示位置は、「左上端」、「右上端」、「中央左端」、「左下端」、「右下端」の5か所である。また、画面サイズ24インチと10インチの各表示位置の視線の累積回数について、対応のある t 検定を行った結果、「中央上右」(p<0.01)、「中央下」(p<0.05) の2か所に有意差が認められたが、他の13か所には有意差は認められなかった。

以上より、視線の累積回数が最も多い表示位置は、すべての条件において、「中央」であった。また、視線の累積回数が少ない表示位置は、「左上端」、「右上端」、「左下端」、「右下端」である。画面サイズ24インチと10インチの各表示位置の視線の累積回数では、アルファベットと平仮名ともに画面の左右端の表示位置を含む15か所中の13か所で有意差は認められなかった。

6.8	9.3	13.3	10.6	7.5
11.2	19.4	<u>54.5</u>	18.5	11.6
9.8	19.6	23.5	21.7	12.5

24 インチ

6.6	14.6	21.0	12.4	5.0
10.9	20.7	<u>28.6</u>	18.7	11.7
8.2	16.3	18.1	13.4	8.2

10 インチ

視線の累積回数 (回)

8.7	11.9	12.9	9.0	6.2
11.0	19.5	<u>53.3</u>	20.2	13.3
8.2	18.7	23.4	18.2	12.1

24 インチ

5.6	12.5	21.5	11.9	5.2
9.5	19.7	<u>29.7</u>	21.1	12.1
8.7	14.3	16.2	15.2	8.3

10 インチ

視線の累積回数 (回)

図7 視線の累積回数と表示位置の関係(アルファベット)

図8 視線の累積回数と表示位置の関係(平仮名)

3.3 心拍と主観的評価

記憶課題中の負担の測定するために、心拍の計測と質問紙による主観的評価を実施した。記憶課題中の心拍数の結果を図9に示す。ここでの心拍数とは、全実験参加者の平均値である。画面サイズ24インチと10インチの心拍数を比較すると、大きな差異はみられない。対応のある t 検定を行った結果、有意差は認められなかった。

実験の終了後の主観的評価の結果を図10、図11に示す。質問Q1の「文字の検索は(楽だった・苦労した)」では、画面サイズ24インチの方が「苦労した」の評点が高い結果となった(対応のある t 検定: t=4.710, df=11, p<0.01)。また、「文字の検索に余裕が(あった・なかった)」では、画面サイズ24インチの方が「なかった」の評点が高い結果となった(対応のある t 検定: t=3.463, df=11, p<0.01)。次に「画面の大きさは(適切・不適切)」では、画面サイズ24インチ

の方が「不適切」との評点の方が若干高いが、有意差は認められなかった。質問Q2の「最初にどの位置にある文字を見ましたか？」は、画面サイズ24インチの表示位置は、「左上端」3名、「中央上」1名、「右上端」2名、「中央」6名であった。また、画面サイズ10インチの表示位置は、「左上端」6名、「中央上」1名、「右上端」1名、「中央」4名であった。

以上より、主観的評価では、画面サイズ10インチよりも24インチの方が、「苦労した」、「余裕がなかった」と評価している。また、画面サイズ24インチと10インチともに、最初に見た表示位置は「左上端」、「中央上」、「右上端」、「中央」の4か所であった。

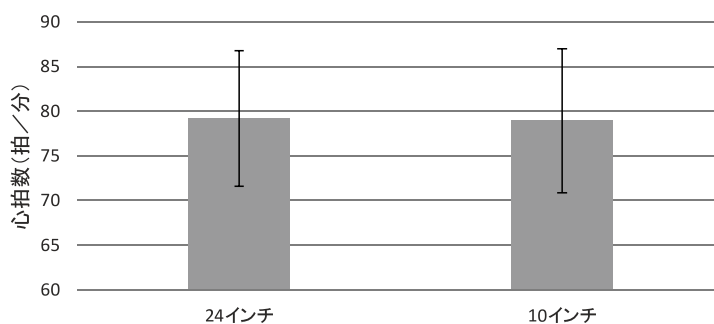
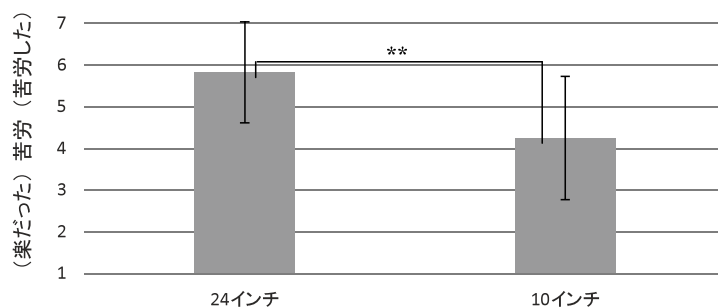
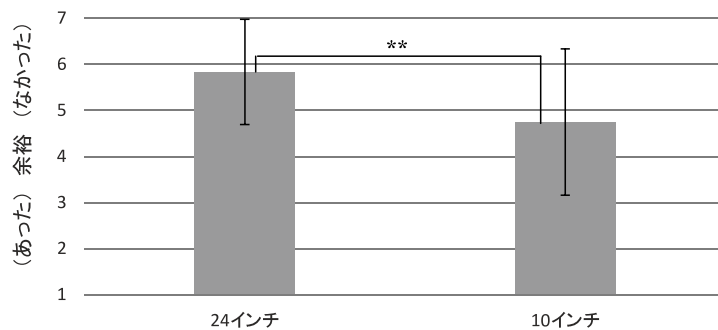


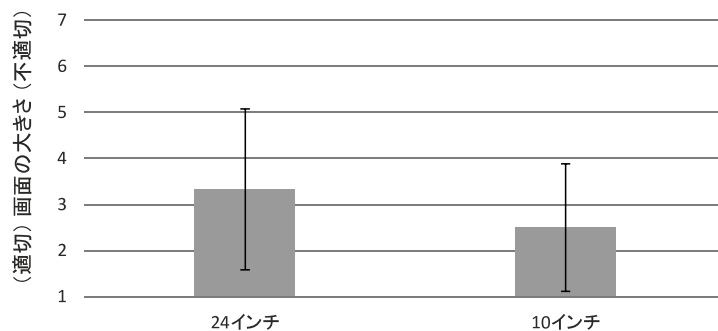
図9 記憶課題中の心拍数



文字の検索に苦勞 **: $p<0.01$



文字の検索に余裕 **: $p<0.01$



画面の大きさの適切・不適切

図10 質問Q1の回答結果

3		1		2
		6		

24 インチ

6		1		1
		4		

10 インチ

(数字は、回答した人数 (人) である)

図11 質問Q2の回答結果(最初にどの位置にある文字を見ましたか?)

4. 考 察

今回の実験では、チャイム音と共に画面の中央に「+」(プラスマーク)を5秒間表示し、実験参加者の視線が画面の中央に向けさせてから、15分割した表示位置の文字を記憶する課題を行わせた。実験結果では、画面サイズ24インチと10インチともに上段左端から上段中央右と中央の正再生率が高く、下段の左右および中央左右端の正再生率が低い傾向であった。17インチモニターによる提示した文字を記憶再生した実験において、正再生数が多いのは画面の上段(中央、左上)であり、正再生数が少ない表示位置は画面の下段(右下)との報告⁸⁾や、提示した12文字の記憶再生と表示位置との関係を調べた実験において、「下段右端」、「下段左端」の正再生率が低いとの報告⁹⁾と一致している。このことは、画面サイズや表示する情報量に関わらず、画面の上部の左端から中央に表示された情報は入手しやすく、逆に画面の下部の左右は表示された情報を入手しにくいと考えられる。また、12文字を記憶再生する実験⁹⁾と本実験の15文字を記憶再生する実験の正再生率を比較すると、15文字を記憶再生する実験の方が各表示位置の正再生率が低い結果となった。このことは、短期記憶容量¹⁰⁾の影響によるものと考えられる。

次に、視線の累積回数が最も多い表示位置は、すべての条件において、「中央」であり、視線の累積回数が少ない表示位置は、「左上端」、「右上端」、「左下端」、「右下端」である。画面サイズ24インチと10インチの各表示位置の視線の累積回数では、15か所中の13か所で有意差は認められなかった。各表示位置の正再生率と視線の累積回数が一致している表示位置は、「中央」と「左下端」、「右下端」である。しかし、各表示位置の正再生率は高いが視線の累積回数が少なく、両者が一致していない表示位置は、上段左端から上段中央右である。また、主観的評価の質問「最

初にどの位置にある文字を見ましたか？」は、画面サイズ24インチと10インチともに、最初に見た表示位置は「左上端」、「中央上」、「右上端」、「中央」の4か所であった。自由再生実験（短期記憶）においては、系列位置効果があり最初に記憶した文字の再生がよいという「初頭効果」が知られている¹⁰⁾。この初頭効果に従うのであれば、視線の累積回数が少なくても画面の上段の正再生率が高くなったと考えても不思議ではない。また、視線の累積回数が少ない表示位置は、画面サイズ24インチと10インチともに「左下端」、「右下端」であった。Web 検索結果ページにおいても、下位に表示された検索結果には視線が留まらないとの報告もある¹¹⁾。このことは、画面サイズに関わらず、画面の下部の左右は視線が向きづらい位置であると考えられる。

次に、画面サイズ24インチよりも画面サイズ10インチの方が、アルファベットと平仮名ともに、最も正再生率が高い表示位置とその他の表示位置との正再生率に有意差が認められた箇所が多い結果となった。また、画面サイズ24インチと10インチの各表示位置の視線の累積回数では、15か所中の13か所で有意差は認められなかった。画面サイズ24インチと10インチでの文字の表示時間は同じであるにも関わらず、画面の左右端の表示位置を含む13か所の表示位置において視線の累積回数に有意差が見られないことは、画面サイズ24インチの方が視線の移動距離が長く速度も速いことを示している。人間が眼によって情報を知覚できるのは視線が停留している間であり、サッケード中にはほとんど情報は得られないと言われている¹²⁾。画面サイズが大きくなると短時間で画面全体に視線を動かし情報を入手しようとすることで、停留時間が短くなり、跳躍運動の距離が長くなると推察される。そのため、画面サイズ10インチよりも24インチの方が、実験参加者間の情報入手の質のばらつきが大きいのではないかと考えられる。

画面サイズ10インチと24インチでは、画面の左右端の表示位置を含む15か所中の13か所の表示位置での視線の累積回数に有意差が認められないことから、画面サイズ24インチの方が視線の移動距離が長く速度も速いことを先に述べた。また、記憶課題中の心拍数に差異は見られなかったが、主観的評価では、画面サイズ10インチよりも24インチの方が、「苦労した」、「余裕がなかった」の評点が高い結果となった。情報表示においては、眼の移動距離が短くなるような表示が必要不可欠であると指摘されている¹⁾が、短時間で画面全域に情報表示するような場合には、画面サイズが大きくなるとユーザへの負担が増加すると思われる。

5. ま と め

本研究では、モニターの画面サイズ24インチと10インチを取り上げ、表示した文字の記憶再生、視線移動、負担からの情報入手における画面サイズと表示位置について実験を通して検討した。その結果、①画面サイズ24インチと10インチともに上段左端から上段中央右と「中央」の正再生率が高く、下段の左右および中央左右端の正再生率が低い、②視線の累積回数が最も多い表示位置は、すべての条件において、「中央」であり、視線の累積回数が少ない表示位置は、「左上

端]、「右上端」、「左下端」、「右下端」である、③画面サイズ24インチの方が視線の距離が長く速度も速い、④画面サイズ10インチよりも24インチの方が、「苦勞した」、「余裕がなかった」の評点が高い、ことを示した。以上のことから、画面の四隅や下段には視線が向きづらい傾向があり、表示された学習情報に気が付くのが遅れたり、見逃す可能性があると思われる。また、短時間で画面全域に情報を表示するような場合には、画面サイズが大きくなるとユーザの負担が増加する。ユーザの疲勞やヒューマン・エラーを防止する観点からも、視覚特性を考慮した情報の配置を心がける。また、画面サイズが大きい場合には、画面全域に情報を表示するのではなくウインドウを分けるなどの対策が必要と思われる。

謝 辞

本研究にご協力いただいた実験参加者の皆さんに心より感謝いたします。本研究の一部はJSPS 科研費 19K03051の助成を受けたものです。

参考文献

- 1) 村田厚生：ヒューマン・インタフェースの基礎と応用，日本出版サービス，東京，p.118-136, 1998.
- 2) 総務省：情報通信白書（平成30年度版），総務省，2018.
- 3) 文部科学省：学校におけるICT環境整備の在り方に関する有識者会議（第5回），資料3（平成29年3月），2017.
- 4) 情報端末事業委員会：情報端末装置に関する市場調査報告書，一般社団法人電子情報技術産業協会，情産-17-情端-1，p.1-7,2017.
- 5) JIS Z 8515:2002 (ISO 9241-5:1998)：人間工学－視覚表示装置を用いるオフィス作業－ワークステーションのレイアウト及び姿勢の要求事項，JISハンドブック37-3人間工学，日本規格協会，東京，p.392-418,2007.
- 6) 苧阪直行：読み－脳と心の情報処理，朝倉書店，東京，p.1-56, 1998.
- 7) 苧阪良二，中溝幸夫，古賀一男：眼球運動の実験心理学，名古屋大学出版会，名古屋，p.199-237, 1993.
- 8) 本多薫：コンピュータ画面の表示位置に関する基礎的研究－文字の検索時間および記憶を通して－，人間工学，第36巻2号，p.95-98,2000.
- 9) 本多薫：ワイドディスプレイにおける情報表示に関する基礎的検討－提示文字の記憶再生と表示位置との関係－，山形大学人文学部研究年報，第14号，p.39-50, 2017.
- 10) R. ラックマン・J.L. ラックマン・E.C. バターフィールド：認知心理学と人間の情報処理Ⅱ－

意識と記憶－, サイエンス社, 東京, p.321-336, 1988.

- 11) 松田侑子, 上野秀剛, 大平正雄, 松本健一: 複数ページに渡る Web 検索結果を対象とした視線分析, ヒューマンインターフェースシンポジウム2008, p.1109-1116, 2008.
- 12) 大野健彦: 視線を用いたインタフェース, 情報処理, 第44巻7号, p.726-732, 2003.

Investigation on the effects of screen size and display position on information presentation, in terms of account memory recollection, eye movement and load

Kaoru HONDA, Tadasuke MONMA

In this study, two monitors of 10 inches and 24 inches were used to display text and the effects of screen size and display position on information presentation were investigated in terms of memory recollection, eye movement and load. We found: (1) that the rate of recollection was low for the left and right edges, as well as the bottom, of the screen, and that the four corners and the bottom of the screen were difficult to see; (2) that line of sight movement is more rapid with a larger screen. This indicated that acquisition of information displayed on a full screen for a short time was a heavier load on the user than a larger screen size.

Article

Developing Intercultural Competence: recognizing the minimization effect

Stephen B. RYAN

1. Introduction

Recently, many scholars have explored and discussed the notion of intercultural competence, intercultural sensitivity, and how this relates to our judgments of others' behavior and thinking. Intercultural competence results in producing unique perspectives that arise from the interaction of several cultures and is a part of developing multilingual or multicultural perspectives (Fantini, 2007). In other words, intercultural competence can give us the ability to adapt to unpredictable multicultural situations, which is a recurrent theme in English as an International Language contexts as well as English as foreign language contexts. Bennett (1986) describes how intercultural sensitivity is not natural to any single culture and that the development of this ability depends on acquiring a new awareness and attitudes. The author introduces an awareness model called the Development Model of Intercultural Sensitivity (DMIS) which consists of a continuum of six stages (discussed in Section 3.2) of personal growth among intercultural communication from denial to integration. The latter being the acceptance of behavioral differences, including language, communication style, and nonverbal patterns. Bennett (1986) emphasizes that developing empathy in intercultural sensitivity is defined as a temporary shift in perspective such that one interprets events as if one were the other person. Empathy has been identified as the key factor when trying to understand and adapt to other worldview belief systems for successful intercultural communication. When the other person is using a significantly different world view to process reality, the development of intercultural empathy allows for a shift in our cultural world viewpoint. Chen and Starosta's (1998) research about intercultural sensitivity takes a wider approach by relating attitudes, such as self-esteem, self-monitoring, open-mindedness, empathy as well as non-judgement to the term. Perry and Southwell's (2011) approach to developing intercultural sensitivity for successful intercultural interaction is to have an active desire to motivate interactants to understand, appreciate and accept differences among cultures.

1.1 English as an International Language

Because English is used more widely as a second language than as a first and spoken widely, it can be defined as an international language. Within the field of English as an International Language (EIL) , for example, being international means that the language has developed to where it is no longer linked to a single culture or nation, but serves both global and local needs as a language of wider communication (McKay, 2002). In the process of achieving the status as English as a lingua franca, the very nature of

English has changed in terms of how many of its speakers make use of English and how English relates to culture (McKay, 2003). This means that the development of English on a global and local scale has created world Englishes, such as Singlish (Singaporean English), which carry unique linguistic and cultural features. Yet, when someone is speaking our native tongue, albeit in another world English form, there is a tendency to unconsciously link our dominant culture values to the form of English that best represents our larger norms and rules of interactions. Because language is a symbol of culture, symbols often have unique interpretations depending on what culture values and norms underpin it. For example, ambiguous communication styles (*aimai*) in Japan is the norm to maintain social harmony; whereas in the American English ambiguous communication is usually interpreted negatively in face-to-face interaction. Because different interpretations are often unconsciously derived from each country's national culture values and norms, more complex cross-cultural interactions involving migration, economic and business situations (see Hammer, 2000) can easily lead to miscommunication and negative evaluations of the other speaker. This is why, acknowledging intercultural competence in first, second and EIL contexts is essential. In this essay, we shall briefly discuss how to acquire Intercultural Competence and several different models that can help us along the journey. The main purpose of this paper, however, is to highlight the minimization stage (Section 3.2.1) of Bennett's DMIS model (2011) as it is arguably the most important stage in understanding cultural diversity. First, it is necessary to define and discuss the concept of intercultural competence within the field of Intercultural Communication, and why it is needed as a critical component to developing intercultural sensitivity for those in contact with dissimilar cultures.

2. Intercultural and Communicative Competence

2.1 Terms

The term culture in this paper shall be referred to as, "...a learned meaning system that consists of patterns of traditions, beliefs, values, norms, meanings, and symbols that are passed down from one generation to the next and are shared by varying degrees by interacting members of a community" (Ting-Toomey and Chung, 2012, p. 16). Norms tell us what is correct behavior and can be defined as a "standard of behavior that exist within a group or category of people" (Hofstede et. al., 2010, p. 29). Values tell us what is right or wrong and are based on what we have learned from interacting with members of our community. Schema can be defined as being, "...generalized collections of knowledge of past experiences which are organized into related knowledge groups and are used to guide our behaviors in familiar situations" (Nishida, 1999, p. 754). "Schema(ta)" and "background knowledge" are used interchangeably to imply unrecognized culture-specific groups of knowledge that the speaker uses to interpret a text or utterance.

Like culture, the term intercultural competence is a slippery term to define but a needed baseline at the beginning of any work using it because a study's interpretations are often influenced by the researcher's particular point of view. For instance, one researcher may be focused on *how well participants recognize* cultural differences in a particular intercultural context. Another may try to answer *how competent participants performed* in the same or similar intercultural context. The former approach concerns intercultural awareness skills while the latter intercultural competence skills. The two are linked but at different parts of the same spectrum of intercultural and communicative competence. Lustig and Koester offer a rather opaque definition of intercultural competence as "...a symbolic process in which people from different cultures create shared meanings" (p. 57, 1999). However, the creation of a successfully shared meaning depends on applying our IC knowledge of the norms and values of both cultures to the appropriate context. How well we can create this meaning determines our level of competence. Unfortunately, it is problematic to recognize our own level of competency and, hence, the need for the models of intercultural awareness for didactic purposes.

Communicative competence is an important concept in cross-cultural studies because it implies more than only linguistic competence. Communicative competence is a term that was first used by Hymes (1971) to describe a system of rules underpinning communicative behavior. Similarly, the field of ethnography of speaking or communication (Saville-Troike 1982, Gumperz 1982b) attempts to answer the question, "What does a speaker need to know to communicate appropriately within a particular speech community, and how does (s)he learn? (Saville-Troike, p. 2). While intercultural competence is based on a solid understanding of our own cultural rules and norms in relation to the culture being compared, communicative competence focuses more on the language part of this cultural understanding and so that a social judgement can be made of how well a person interacts with others (Lustig and Koester, 1999).

Chen and Starosta define intercultural communication competence as, "...the ability to effectively and appropriately execute communication behaviors that negotiate each other's cultural identity or identities in a culturally diverse environment" (1998, p. 28). However, the terms intercultural competence, awareness and sensitivity are often muddled in Intercultural Communication literature obfuscating the meanings and can lead to slightly different conclusions. The differences are summarized below, and thanks to Chen and Starosta's (1996, 1998) work in this area, we have a clear starting point to differentiate the terms. According to their work, intercultural competence is comprised of three interrelated concepts: intercultural sensitivity, intercultural awareness and intercultural adroitness. *Intercultural sensitivity* can be described as our willingness to try and understand and appreciate cultural differences. *Intercultural awareness*, which is the focus of this paper, is the cognitive aspect of intercultural communication competence that seeks to understand cultural tendencies that can affect communication cross-cultural contexts. Developing intercultural awareness most often occurs in didactic contexts such as university lectures, exchange

programs, study abroad or cross-cultural role-plays. Finally, *intercultural adroitness* is the aspect that emphasizes the “skills needed for us to act effectively in intercultural interactions” (1998, p. 28).

3. Models of intercultural awareness

The purpose of intercultural awareness (IA) models is to understand the deep structure or cognitive aspects of a culture. Cultural values tell us how to behave and are the framework of our schema that holds culture together. Schema itself is based on generalizations, or stereotypes, to help us interpret the constant stream of complex stimuli in daily life. Seeking to identify cultural values asks the question “why” as opposed to what or how. Why are Japanese polite? Why do Americans value modesty less? The answer to these why questions can greatly aid in our understanding and awareness of our own culture and increase our intercultural awareness and sensitivity.

So, how do IA models work? IA models originally started to identify the basic factual information of a culture (e.g. Saville-Troike 1978). Hall’s model (1976) classified culture into high and low context which highlighted different thinking patterns. Kohl’s fifty question model (1984) was aimed to develop the sojourner’s knowledge of their host country. Questions such as, “who are your country’s national heroes?” and “what is an important religious ceremony?”, helped participants to understand their own cultural values better. Chen and Starosta (1998) developed an IA model that investigated cultural value orientations on 15 items. IA models seek to form a “cultural map” through collecting empirical information and then showing how to measure intercultural awareness (Chen and Starosta, p. 349). Measuring cultural values, however, is problematic due the large number of data required to cover the complexity of cultural value orientations. Therefore, cultural value orientations are often measured using Likert scale questionnaires to analyze the degree with which participants agree or disagree with targeted statements. More recently, Hofstede’s (2004) developed six dimensions that contrast national culture: individualism, large/small power distance, uncertainty avoidance, masculinity, long-term orientation, indulgence versus restraint. Finally, Bennett’s (2011) Developmental Model of Intercultural Sensitivity (DMIS), mentioned above, describes a developmental process of how we construct boundaries between our cultural “self” that of the “other” culture with the ultimate goal of providing intercultural training in deficient areas in corporate contexts.

3.1 Intercultural Sensitivity

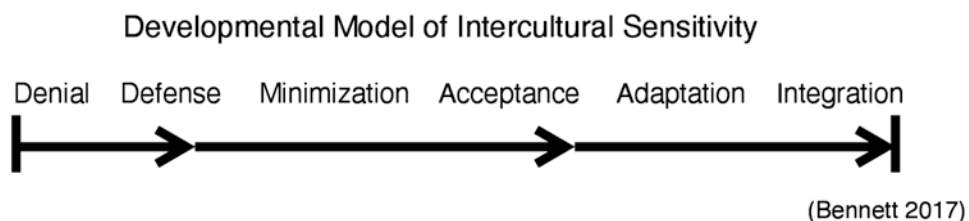
Developing sensitivity, it is argued, as opposed to awareness or skills, would be the necessary first step in order to increase awareness of cognitive cultural differences so that intercultural skills can be further developed and used for interacting successfully. If the learner is not sensitive to intercultural topics and issues, becoming more aware and skillful at interacting with intercultural environments

becomes problematic. Herein lies the problem with developing intercultural competence. Those who often most need intercultural awareness and adroitness fail to accept the first step of acquiring sensitivity of intercultural differences *by seeking only to address the commonalities between two diverse speakers*. In order to develop greater IC sensitivity, the receiver of the information or knowledge must first recognize three levels of understanding: 1) the need for better relationships and successful outcomes with people from different backgrounds 2) an acknowledgement as a starting point to sensitivity that cultural norms and values are indeed unique to a community of people resulting in distinct communication and behavioral tendencies. 3) dispelling the naïve form of individualism and inaccurate idea that if you treat everyone equally and communicate openly, you will succeed cross-culturally. Common sense is only common to the community of speakers to which we derive our culture identity from.

3.2 DMIS model

For didactic purposes, Bennett's DMIS model (2011) is particularly useful and practical for highlighting our level of sensitivity to cultural differences. The DMIS is relevant to the discussion of IC competence and awareness because it highlights problematic areas in thinking that can prevent the transition from IC awareness to sensitivity. Because of this, it is worth describing in detail here and becomes the focus of this paper. The DMIS model describes a six stage process (see Figure 1) we undergo, from denial to integration, to become competent in intercultural contexts or from dissimilar groups within the same national culture and is described in more detail below.

Figure 1



The first stage is denial. According to Bennett (2017), this stage is the most ethnocentric because those within this stage deny that differences are important. The denial stage is characterized by an isolation from those who different than themselves. Imagining that other people have a different experience and worldview is difficult mainly because of a lack of exposure to them. For example, many Americans who have not traveled outside the US cannot tell the difference between a person from China or Japan.

Likewise, someone from an Asian country is likely to have trouble discerning Europeans from Americans or Australians. The result of the lack of intercultural competence means diversity and cultural differences tend to be ignored and negative stereotyping, and dehumanizing more readily occurs. A person in the denial stage will have the attitude of “I don’t need to know” and have what Bennett calls “aggressive ignorance.”

One step after denial is the defense stage. In this stage, we tend to positively evaluate our own world view and negatively evaluate “the other” culture. We believe that we are the “good guys” and often feel that our identity or majority power base is under threat. We have a tendency to have polarizing views that put others in evaluative categories such as, “immigrants are lazy and taking our jobs” or “foreigners are loud and don’t understand how to act properly.” According to Bennett, common implications for minority individuals in this stage is being excluded from dominant group decision making and the denial of equal opportunities. Those in the minority often feel under siege and threatened to try and protect their identity and world view.

3.2.1 Minimization

The next state after denial and defense Bennett labels minimization. This stage is quite common in low context cultures that value social equality and individualistic self identities. It is also the most difficult stage to recognize and acquire a greater depth of intercultural sensitivity unless we have developed a deeper culture awareness and recognition of our own specific cultural schema. In the minimization stage, we tend to recognize superficial cultural differences (e.g. Japanese don’t say their opinions directly or Americans are friendly) but maintain the belief that “all humans are basically the same.” People in this stage tend to ignore or disregard different world views as a way to reduce the threat to their cultural norm(s). We unconsciously (via culture specific schemata) look for commonalities that can confirm this cultural assumption such as personality, character, tolerance of ambiguity, or views of the self. However, as Bennett argues, when we give use to these psychological systems to find commonality as humans, we are giving more weight to these descriptions themselves than the fact that people come from distinct world views with unique values. Assuming what other people would think (e.g. we are all free individuals who want to live in a capitalistic society) is an ethnocentric problem resulting from this form of minimization by assuming human likeness. Bennett cites the example of the US government’s tendency to consistently believe that if they can remove a particular country’s leader, its people will want to live *like us*. This comes from the erroneous position of assuming that cultural values are universally the same for all humans resulting in an unrecognized schema of “we are all basically the same *like me*.” The idea of expecting others to be “just like ourselves” *minimizes* important unrecognized differences and often results in the different interpretations of the same behaviors. The minimization of cultural differences is used as a way of avoiding recognizing our own cultural patterns and prevents us from adapting to understanding others

(Bennett, 2011). In the unconscious search for the minimization of differences via cultural schemata, or “cultural constructs” as Bennett uses, information is construed non-evaluatively within familiar categories of our own world view, not because we believe we are better, but because we believe everyone is essentially the same. This stage makes it difficult to develop our own cultural awareness and intercultural sensitivity to others and in the workplace can stifle diversity and creativity from those with divergent world views. This makes it the most critical and problematic stage to recognize. For most Americans, for example, believing that “we are all basically the same *just like me*” is a deeply held cultural belief because this is underpinned with the cultural values of social equality and individualism. It would be difficult to apply this social equality norm if we believed that people had different views and opinions on social hierarchy and individual versus group norms and values. This is exactly the case between Japan and the US when it comes to the norms of interdependent consensus making in Japan versus defining one’s individuality and independence in the low context communication US. Both unconsciously assume their way is the norm and, therefore, most desirable approach. Several examples of intercultural conflict due to minimization of cultural differences are discussed in section 4.0.

Minimization of the minority culture almost always, and sometimes unintentionally, cedes power and status to the dominant culture to maintain status quo. This minimization effect is usually evident in large institutions with a disproportionate number of culturally diverse minorities in the lower ranks compared with the upper ranks of those with decision making power. Interestingly, for organizations, this minimization often leads to *difficulty in retaining employees from diverse cultural backgrounds* because of an extreme emphasis on conformity, commonalities and a lack of recognition of their own unique cultural context in the world (Bennett, 2004).

If a person or organization is able to acquire enough intercultural sensitivity through education and training, the next stage becomes acceptance. In this stage, the dominant cultural group accepts differences. This means that individuals actively seek out knowledge of different cultures and may even “apply ethical principles cross-culturally.” Organizations finally see the need for training efforts and those in positions of power are encouraged to recognize cultural differences. Once this is done, the acceptance stage manifests itself into behavior that allows us to put ourself in the other’s shoes or what Bennett describes as “cognitive frame shifting.” Our cultural schema becomes more flexible and we become more confident to communicate across different cultural contexts. We are able to recognize power discrepancies and the need for colleagues to have intercultural skills to maintain a climate of respect for diversity.

Finally, adaptation develops into integration which is the final stage of Bennett’s six stage model. In the integration stage, we define cultural differences as part of our identity and often feel that we do not belong in any one single culture. We may have multiple frames of references we can draw from and can move in and out of more than one cultural group seamlessly. Our identity is not based on any one culture

but a conglomeration of two or more cultures. Unfortunately, few of us are at this stage unless we were raised in a bicultural and bilingual environment.

4. Minimization and IC conflict

Recognizing the importance of minimization is not solely a phenomenon in Western individualistic low-context cultures. High-context communication cultures, such as Japan, strongly emphasize group held norms over individual norms; social hierarchy is assumed in contrast to a low-context way of viewing the world. What does minimization look like for a high-context culture? “We are all basically the same *just like me*” schema also applies but from this cultural construct, assumes others value group consensus building and the maintaining of strong harmonious interpersonal relationships above all else. So, when a low-context world view speaker, interacts in this culture, individual opinions are interpreted from the standpoint of how it affects others in the group. This often leads low-context speakers to feel that their opinions have little or no weight or that they are being marginalized or forced to fit-in with others and, thus, threatening their individuality and social equality value world view.

4.1 Example: Japan and the US

Japan as a high context culture that highly values social harmony is a useful contrast to the US. The cultural emphasis on social harmony and in-group interdependency in Japan makes diversity more problematic than in other more multicultural diverse societies. Japanese culture is described as a large power distance, strong uncertainty avoidance culture (see Hofstede et. al. 2010) that highly values harmonious social relationships. This tendency has many strong points (see Ryan 2012 for merits and demerits) such as establishing and maintaining strong interpersonal relationships, team building, teamwork, less workplace stress. However, for those trying to work and live inside Japan as outsiders to this community of shared norms, Japan can be frustratingly opaque and impersonal because these traits often result in individual feelings, opinions being excluded or ignored by (*tatemaie*) ambiguous public face communication values. For the American native English speaker, openness and frankness (*honme*) are vital to establishing trust in social relationships rather than anticipating the feelings of others first. These two conflicting deep structure traits are internalized to help communication run smoothly. Hall describes this as an “action chain” which relies on these internalized processes to quickly make judgements and decisions across the entire spectrum of communication behavior. Minimization is often an unintended consequence to those who are unfamiliar with their own cultural construct or schema for interaction.

5. Discussion

Intercultural competence is a diverse range of appropriate cognitive, behavioral and affective skills that can lead to more effective communication with someone from another culture. However, it is argued here that to have successful cross-cultural outcomes, we need to first acquire intercultural sensitivity. However, as we have discussed, the process of developing IC awareness, and the sensitivity that follows, is counterintuitive because we need to become mindful and aware of our own cultural tendencies as we contrast them with the other culture while suspending any ethnocentric judgements. This is problematic because most of us take for granted that our norms and values are based upon the centralizing tendencies of our larger national culture to make “common sense” decisions and judgements. Bennett’s DMIS model describes six stages of intercultural sensitivity that can help us raise our awareness so that sensitivity may follow. It was argued in section 3.2.1 that the third stage, minimization, is the most critical to acquiring the intercultural sensitivity to increase awareness of cognitive cultural differences so that intercultural skills can be further developed and used for successful outcomes. The minimization of differences as an unconscious cultural norm (e.g. we all want to live in a free market society that stresses individualism vs. group consensus and interdependence) is often used to justify the dominant culture’s behavior but often fails to give real inclusion and empowerment for those in the cultural minority to achieve real diversity. Cultural diversity means more than simply recognizing that differences exist; it also means becoming more aware of our own cultural norms of being so as not to impose them on those from difference cultural backgrounds. Becoming more interculturally competent allows those from diverse cultural perspectives to feel more included, empowered and productive which can inspire greater creativity and drive innovation in an organization or in smaller cross-cultural interactions.

References

- Bennett, M. (1986). A Developmental Approach to Training for Intercultural Sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations* 10, no.2: 179-95.
- Bennett, M. J. (1998a). Intercultural Communication: A Current Perspective. In Milton, M.J. (Ed.), *Basic Concepts of Intercultural Communication*, 1-34, Yarmouth: Intercultural Press.
- Bennett, M. J. (2004). From Ethnocentrism to Ethnorelativism . In J.S. Wurzel (Ed.) *Toward Multiculturalism: A reader in multicultural education*. Newton, MA: Intercultural Resource Corporation.
- Bennett, M.J. (2011). A Development Model of Intercultural Sensitivity (PDF file). Retrieved from <https://www.idrinstitute.org/dmis/>

- Bennett, M. (2017) Development Model of Intercultural Sensitivity. In Kim, Y. (ed). *Intercultural encyclopedia of intercultural communication*. Wiley.
- Chen, G. and Starosta, W.J. (1998). A Review of Intercultural Competence. The University of Rhode Island@URI, *Human Communication*, vol. 2, pp. 27-54.
- Fantini, A. E. (2007). Exploring and Assessing Intercultural Competence. *Centre for Social Development, Washington University*, Washington, USA.
- Hall, E.T. (1976). *Beyond Culture*. Garden City, NY: Doubleday.
- Hammer, M. R. (2000). The Importance of Cross-Cultural Training in International Business. In Weaver, G.R.(Ed.), *Culture Communication and Conflict* (2nd ed.). Boston, MA: Pearson.
- Harris, P. Moran, R.T. (1987). *Managing Cultural Differences*. Houston TX: Gulf Publishing.
- Hofstede, G., Gofstede, G. J. and Minkov, M. (2010). *Cultures and Organizations. Software of the Mind*. Intercultural Cooperation and Its Importance for Survival. New York: McGraw Hill.
- Hymes, D. (1971). *On Communicative Competence*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Kohls, R. (1984) *Intercultural Training: Don't Leave Home Without It*. Washington, D.C: SIETAR.
- Lustig, M.W. and Koester, J. (1999). *Intercultural Competence*. 3rd ed. New York: Longman.
- McKay, S. L. (2002). *Teaching English as an International Language: Rethinking goals and perspectives*. NY: OUP, 142-146.
- McKay, S. L. (2003). Toward an Appropriate EIL Pedagogy: Re-examining common ELT assumptions. *International journal of applied linguistics*, 13(1), 1-22.
- Nishida, H. (1999). A Cognitive Approach to Intercultural Communication Based on Schema Theory. *International Journal of Intercultural Relations*. Vol. 23, Issue 5, pp. 753-777.
- Perry, L. B., & Southwell, L. (2011). Developing Intercultural Understanding and Skills: Models and approaches. *Intercultural Education*, 22(6), 453-466.
- Ryan, S. B. (2012). Understanding the Merits and Demerits of High and Low Context Oriented Communication Cultures in Intercultural Business Conflict: the case of Fukushima and Japanese communication schema. 山形大学紀要 (人文科学), 第17卷, 3号, pp. 37-47.
- Saville-Troike, M. (1982). *The Ethnography of Communication*. An Introduction. Oxford: Basil Blackwell.
- Ting-Toomey, S. and Chung, L.C. (2012). *Understanding Intercultural Communication*. New York: OUP.

Developing Intercultural Competence: recognizing the minimization effect

Stephen B. RYAN

Abstract

Intercultural Communication studies help us to identify the unique cultural perspectives of others so that we do not misunderstand people in important situations such as in educational, health or business settings. To become a competent intercultural communicator, we first need to develop an awareness of our (lack of) cultural knowledge and not solely focus on the commonalities of two culturally diverse speakers because this neglects important value differences of the minority second or foreign language speaker. Intercultural Communication focuses on the study of differences because this is where we can best develop the sensitivity to speakers who have divergent cultural norms and values on our journey of becoming more interculturally competent. The goal of this paper is to define and discuss the concept of intercultural competence within the field of Intercultural Communication, and why it is needed as a critical component to developing intercultural sensitivity for those in contact with dissimilar cultures. Several intercultural competence models are discussed with the main focus on how we can become mindful of how our cultural biases affect the communication process.

Article

English sentence adverbials and truth-conditional meaning: A questionnaire study*

Yukiko KOIZUMI

1. Introduction

Modifiers, such as adjectival and adverbial elements, are sometimes considered to be less central to the meaning of the sentence, especially from a viewpoint of truth-conditional semantics where the meaning of a sentence is defined as its truth-conditions. For example, the sentence *John is happily walking* is typically understood to be true as long as John is walking, and whether he looks happy doing so may not be taken to be as important as the rest of the sentence. However, modifier meaning can play an important part in sentence comprehension, and how a modifier might contribute to the meaning of the sentence can depend not only on its lexical content, but also the context in which it occurs and how it is spoken in an utterance. The central question of the present paper is how adverbials can contribute to the truth-conditional meaning of the sentences. I will explore this question by looking into a class of English adverbials that take the whole clause or sentence as their scope (sentence adverbials).¹

There has been a considerable amount of literature on semantic or pragmatic properties of sentence adverbials, including, but not limited to, Greenbaum (1969), Lehrer (1975), Bellert (1977), Mittwoch (1977), McConnell-Ginet (1982), as also overviewed in Okada (1985). In particular, I will focus on four types of sentence adverbials, classified here as illocutionary, attitudinal, evidential and hearsay adverbials, because they greatly vary in terms of the positions in which they can occur as well as the ways in which their interpretations interact with the truth-conditional content of the utterances.

Few studies have fully addressed the question of when and why certain adverbials may or may not be part of the truth-conditions (hence logical form) of the sentence. Ifantidou's research within the framework of relevance theory (Sperber and Wilson 1995) proposed the way in which one can test whether an adverbial is truth-conditional, or part of the truth-conditions of the sentence. However, her research only laid out intuitive ideas and did not provide empirical data.

In order to fill this gap, the present study reports the results of a questionnaire study using her 'truth-conditionality test' scheme. The results will first confirm that a pragmatic framework, such as the relevance

1 I shall use the terms "sentence adverbials" to refer to those lexical items which typically modify a clause or a sentence itself, rather than a mere verbal phrase. In some other studies, they are referred to as "sentence adverbs", "sentential adverbs", and so on, but here I shall follow the terms used in the series of studies pursued in the relevance-theoretic framework, which I shall also work with here. The term "adverbials" is intended to imply a similar explanation for adverbial phrases (e.g. parentheticals), though I will not discuss it here extensively.

theory, would be best fitted for explaining how diversely sentence adverbials may be interpreted in the utterances in which they occur. The details of the results will also shed more light on how diversely these adverbials are interpreted in terms of their truth-conditional status, and what might be the source of the diversity that seems to be at work. Hopefully they will inform us on what is happening at the interface between semantics/pragmatics and sentence comprehension.

The organization of the present paper is as follows. After introducing the four types of sentence adverbials in Section 2, I will introduce previous theoretical work on sentence adverbials that discuss possible ways to treat them in relation to the truth-conditions of the sentences in Section 3. In Section 4, I will report the questionnaire survey on the sentence adverbials using the ‘truth-conditionality test’. I will discuss the findings and their implications in the final section.

2. Four types of sentence adverbials

Given below are the four types of sentence adverbials that are of interest in this study. They have been discussed in the literature for their significantly different and interesting properties especially in terms of their truth-conditional status. They include adverbials sometimes called “pragmatic adverbials”.

[1] *illocutionary adverbials*. According to the classic extensive study of adverbials by Greenbaum (1969), illocutionary adverbials are equivalent with some of the “style disjuncts” which concern the stylistic properties of the utterance that contains them. In a more recent study, they are considered to function as modifying an implicit illocutionary verb (Bach and Harnish 1979:225). Adverbs like *frankly*, *confidentially*, *honestly*, *seriously*, belong to this type. Examples (1a-1c) would be understood as communicating (2a-c), respectively.

- (1) a. *Frankly*, I’m bored.
 b. She has, *confidentially*, failed the exam.
 c. *Seriously*, your new novel is excellent.
- (2) a. I tell you frankly that I am bored.
 b. I inform you confidentially that she has failed the exam.
 c. I tell you seriously that your new novel is excellent.

The remaining group of adverbials, broadly termed as “attitudinal disjuncts” by Greenbaum (1969), are further classified into three types.

[2] *attitudinal adverbials*. Attitudinal adverbials are associated with the speaker’s attitude or judgement to the statement s(he) makes, rather than naming the speech-act performed in communicating the proposition. *Unfortunately*, *sadly*, *happily*, *luckily*, are the representatives of this type of adverbial.

- (3) a. *Unfortunately*, John missed the train.

- b. *Sadly*, Mary lost her wallet.
- c. *Happily*, Bill succeeded in completing the course.
- d. *Luckily*, Jane has got the scholarship.

(4) a. It is unfortunate that John missed the train.

- b. It is sad that Mary lost her wallet.
- c. It is happily true that Bill succeeded in completing the course.
- d. It is lucky of Jane that she has got the scholarship.

(5) a. *I tell you unfortunately that John missed the train.

- b. *I tell you sadly that Mary lost her wallet.
- c. *I tell you happily that Bill succeeded in completing the course.
- d. *I tell you luckily that Jane has got the scholarship.

Examples (3a-c) are understood as communicating (4a-d), rather than (5a-c), suggesting that the adverbials take a sentential scope, rather than the illocutionary verb *tell*.

[3] *evidential adverbials*. Evidential adverbials are seen as indicating the source or the degree of strength of the speaker's evidence, or in other words, indicating the different types of the speaker's commitment towards the content, or the truth-value of the proposition (s)he makes (Urmson 1963: 228, Palmer 1986: pp66-76). Adverbials like *evidently*, *clearly*, *obviously* belong to this type. (6a-c) are understood as communicating (7a-c).

(6) a. *Evidently*, the money has disappeared.

- b. *Obviously*, John gained weight.
- c. *Clearly*, Jane was irritated with the traffic jam.

(7) a. It is evident that the money has disappeared.

- b. It is obvious that John gained weight.
- c. It is clear that Jane was irritated with the traffic jam.

[4] *hearsay adverbials*. Hearsay adverbials, such as *allegedly* and *reportedly*, are generally treated as a subtype of evidentials (Palmer 1986); they are claimed to indicate that the source of the knowledge that the speaker communicates is not the speaker themselves but someone else. Greenbaum (1969) goes on to describe them as expressing the "speaker's doubt" towards the truth of the proposition she expresses: the speaker thinks the truth of the proposition is somewhat dubious. Examples (8a-b) are understood as communicating (9a-b), respectively.

(8) a. *Allegedly*, the cook has poisoned the soup.

- b. *Reportedly*, Jane has killed her husband.

(9) a. It is alleged that the cook has poisoned the soup.

- b. It is reported that Jane has killed her husband.

These four types of adverbials have traditionally been treated as evidence against truth-condition-based semantics for some lexical items and for speech act semantics (Ifantidou-Trouki 1993). However, they appear to have more diverse properties than what has traditionally been found, which has motivated further investigation in the present study.

3. Previous research: three possible approaches

There are three logically possible semantic and pragmatic approaches concerning the treatment of the truth-conditional contributions of these adverbials. Let us look at each one of them along with the corresponding previous studies, even though not all of them offered extensive discussion on these adverbials in particular.

3.1 The ‘non-truth-conditional’ approach: Speech-act theory

Speech-act theory, first introduced by the philosopher J. L. Austin in his book “How to Do Things with Words” (1962), proposed a series of ideas that are seen as a reaction to truth-conditional approaches to sentence meaning. According to Austin, language is used not always to “describe” the world, but also to perform certain types of actions called speech-acts: asking questions, begging, guessing, warning, making a promise, and so on. One of the central concerns of the speech act theory is to propose the existence of certain linguistic devices that indicate the “illocutionary force” of the utterance.

Austin also claims that an illocutionary act, such as warning, asserting, or ordering, can be performed only if there is a conventional means of performing it, i.e. if there is some device that functions to indicate the performance of the speech act. So-called performative verbs and parentheticals such as “I think” (Urmson, 1963), as well as certain classes of sentence adverbials, have been treated as illocutionary force indicators that function as signaling the kind of speech act being performed.

Following this line of analysis, let us consider some examples containing illocutionary adverbials in (10) and (12):

(10) Confidentially, she failed the exam.

(11) a. She failed the exam.

b. I inform you confidentially that she failed the exam.

(12) Frankly, John is stupid.

(13) a. John is stupid.

b. I tell you frankly that John is stupid.

The adverbials here are also claimed to function as illocutionary force indicators: the speaker of (10) and (12) communicates (11a)-(11b) and (13a)-(13b), respectively. (11b) and (13b) show what kind of

speech-act is being performed when the speaker produces the utterance.

In the speech-act theorists' view, such indicators are considered to be non-truth-conditional, since their function should not be to *describe* the illocutionary force of the utterance, but to *indicate* it. Thus, they are predicted not to contribute to the truth-conditions of the utterance or, in other words, to the proposition expressed by the utterance in which they occur. Although sentence adverbials have not been discussed extensively enough in the speech-act literature, it seems possible to extend this view to analyze other classes of sentence adverbials. Ifantidou (1994) summarizes the salient features of speech-act approaches to sentence adverbials as follows:

- (a) illocutionary, attitudinal, evidential and hearsay adverbials are standardly treated as non truth-conditional and,
- (b) non truth-conditional expressions are treated as indicating a speech-act or propositional attitude rather than describing a state of affairs.

(Ifantidou 1994: 132)

According to this analysis, illocutionary adverbials like *frankly*, *confidentially*, or *seriously*, that we have seen in (10) and (12) above, do not modify any of the propositional content. They merely indicate the type of speech-act performed (cf. Bach and Harnish 1979).

One advantage of adopting this line of analysis is that it can, for example, capture certain types of ambiguity in interpretations for (14):

(14) Seriously, is he coming?

(15) a. I ask you seriously to tell me whether he is coming or not.

b. I ask you to tell me seriously whether he is coming or not.

(Bach and Harnish 1979: 221)

The word *seriously* in (14) has two possible readings, illustrated in (15a) and (15b) respectively, each successfully indicating the type of speech-act performed by different persons. The speech-act account captures this difference.

It is important to note that the speech-act view would predict these types of adverbials to be non-truth-conditional. They would be all considered "semantically external" to the proposition expressed by the utterances which carry them (Ifantidou 1994). However, as we will see below, sentence adverbials we are concerned with seem to behave more diversely than this would predict. In later sections, I shall examine the validity of this prediction in view of the data that I have obtained.

3.2 The 'truth-conditional' approach: Lycan's view and its extension

In contrast with the 'non-truth-conditional' approach advocated by speech-act theory, the view that all sentence adverbials, even speech-act related ones, are truth-conditional and hence part of the logical form

of the sentence, is proposed by Lycan (1984). Lycan (1984)'s claim is based on the assumption that every linguistic expression should be truth-conditional although there are different ways of encoding information (not only describing, but also asking, stating, entailing, etc.).

After the Davidsonian treatment of propositional attitude reports (Davidson 1968, cf. McKay and Nelson 2014), Lycan shows how a paratactic analysis of the semantic contributions made by sentence adverbials can be represented in its logical form. Consider the example below.

(16) Confidentially, the boss is a moron.

(17) a. the boss is a moron. b. I state that confidentially.

(Lycan 1984)

According to Lycan, the logical form of (16) is (17). In Lycan's original words, (17a) is 'displayed' or 'introduced simply as an example or token of the kind of thing that speaker is referring to by means of his demonstrative' (Lycan 1984:148). The second part that involves the adverbial *confidentially*, in (17b), is *entailed* but not asserted. The result of this analysis is, therefore, that what is asserted by the utterance (16) is (17a), but the truth-conditions are given by (17b). Hence, on Lycan's account, *confidentially*, an illocutionary adverbial, is truth-conditional.

Although Lycan himself did not go on to provide a comprehensive account of sentence adverbials, extending Lycan's analysis would yield interesting predictions. Recall that the truth-conditions of (16) would be (17b). (17b) would be true whenever (16) is appropriately uttered, because it follows from (17b) that (17a) is being stated, or asserted. Hence, under this analysis, the illocutionary adverbial *confidentially* is predicted to be part of the truth-conditions of the utterance.

Also, this model would predict other types of sentence invariably truth-conditional as well. For example, consider the following sentences.

(18) Mary, reportedly, failed the exam.

(19) a. Mary failed the exam. b. This was reported.

(20) Mary, unfortunately, failed the exam.

(21) a. Mary failed the exam. b. I think that it is unfortunate.

Extending Lycan's analysis to a case of a hearsay adverbial *reportedly* and a case of an attitudinal adverbial *unfortunately*, the logical form of (18) and (20) would be something like (19) and (21), respectively, which contain the adverbials in the truth-conditions given in (19b) and (21b). This analysis does not predict the variations in the truth-conditional contributions of sentence adverbials.

3.3 The 'hybrid' approach: A relevance-theoretic view

The third logical possibility is a somewhat 'hybrid' approach, which is that sentence adverbials can, but do not have to be, part of the sentence's truth-conditions. This possibility is explored in Ifantidou (1994)

within the framework of Sperber and Wilson's relevance theory (Wilson and Sperber 1993, Sperber and Wilson 1995).

3.3.1 Relevance-theoretic view of communicated information

Wilson and Sperber classify types of communicated information in terms of two factors: (a) whether the communicated content is explicit or implicit, and (b) whether it encodes conceptual or procedural information. Let us briefly look at the two factors in turn.

(a): *expliciture vs. implicature distinction*. Sperber and Wilson assume that interpreting utterances involves deriving both the explicitly communicated content (explicitures) and the implicitly communicated content (implicatures).

Further extending Grice's (1975) theory of conversational principles and the notion of "implicit" communication, Sperber and Wilson defined their original notion of "explicitness" as follows:

(22) *explicitness*

An assumption communicated by an utterance *U* is *explicit* if and only if it is a development of a logical form encoded by *U*.

(Sperber and Wilson 1995: 182)

Sperber and Wilson claim that the explicitly communicated content, or the explicitures, of an utterance typically includes the proposition expressed by the utterance (its logical form or the truth conditions, similar to "what is said" in Grice's terms), as well as various more complex information obtained through 'developing its logical form', or embedding the proposition expressed under an appropriate speech-act or propositional-attitude description. The implicatures of an utterance are propositions communicated by the utterance but are not developments of its logical form.

Another claim made by Sperber and Wilson is that part of the explicitures of an utterance can be derived by a combination of linguistic decoding and inference. The explicitures obtained by a process of context-based inference include higher-level explicitures (Wilson and Sperber 1993)². Some of these higher-level explicitures are associated with the type of speech-act performed.

For example, consider (23) below.

(23) It's raining outside.

(24) The speaker of (23) believes that it is raining outside.

(23) is the proposition expressed by the utterance. If we assume that the speaker of (23) is asserting that it is raining, then the higher-level explicitures of (23) should include (24), a complex proposition obtained by embedding the proposition expressed under an appropriate speech-act description.

² Some part of the proposition expressed (e.g. temporal meaning of the conjunctive and), is also developed through context-based inference, known as pragmatic enrichment (cf. Carston 1998).

Sperber and Wilson observe that not all linguistically encoded meanings are part of the truth conditions: mood indicators and parenthetical verbs are their instances of non-truth-conditional linguistic encoding. However, their approach is unique in that they do not deal with all non-truth-conditional meanings in a unified manner. They argue that linguistically encoded information is classified not only as communicated explicitly or implicitly, but also as *conceptual* or *procedural*. Let us turn to examining this claim further.

(b) *conceptual vs. procedural encoding*. Following Fodor's theory of mind (Fodor 1983), Sperber and Wilson (1993) assumes two types of encoded information: conceptual information, related to conceptual representations in the hearer's mind, and procedural information, related to the manipulation of the conceptual representations.

According to them, a conceptual representation has the following features. First, it has logical properties: it enters into entailment or contradiction relations, and can act as the input to logical inference rules. Second, it has truth-conditional properties: it can describe or partially characterize a certain state of affairs. On the other hand, procedural information is carried by those expressions which help to indicate the way we should "take" the conceptual representation encoded by a sentence or a phrase in which they occur.

Instances of encoding of procedural information have been elaborated by Diane Blakemore (Blakemore 1987, 1992). According to her, certain discourse connectives, such as *so*, *but*, or *after all*, encode procedural information. Let us consider the following example. The sequence (25) has two possible interpretations, which are shown in (26):

(25) a. Peter is not stupid. b. He can find his own way home.

(26) a. Peter's not stupid; so he can find his own way home.

b. Peter's not stupid; after all, he can find his own way home.

(Wilson and Sperber 1993)

The interpretation (26a) reads (25a) as evidence for the conclusion (25b); in contrast, on the second interpretation (26b), the (25a) serves as a conclusion is confirmed by the evidence in (25b). Blakemore argues that the information that discourse connectives such as *so* or *after all*, convey is not conceptual; instead, these connectives provide a constraint on the inferential phase of utterance comprehension. They convey procedural information that helps us reduce the processing effort required to reach the first acceptable interpretation and hence make the interpretation more relevant. These discourse connectives are considered not to be part of the truth-conditions of an utterance. It is important to note, however, that not making contributions to the truth-conditions does not always imply encoding procedural information.

3.3.2 Relevance-theoretic analysis of sentence adverbials

Elly Ifantidou's work on evidentials (Ifantidou-Trouki 1993, Ifantidou 1994), while discussing many

examples in Turkish, also discusses quite a wide range of English sentence adverbials and parentheticals in the relevance theoretic framework. Ifantidou argues that certain classes of sentence adverbials are truth-conditional, while others are non-truth-conditional, using a ‘truth-conditionality test’. Consider the following examples.

(27) a. Mary failed the exam.

b. Mary has unfortunately failed the exam.

c. If Mary has unfortunately failed the exam, she can take it again next year.

This ‘truth-conditionality test’ works as follows: we create a bi-clausal sentence by embedding a target with a sentence adverbial (27b) into a conditional logical connective *if*-clause (27c), and see whether it falls within the scope of the connective. Namely, on (27c), we ask under what circumstance the event in the consequent clause in (27c) would occur: Under what circumstance is the speaker of (27c) claiming that Mary can retake the exam in the following year? In this case, clearly, the speaker is claiming that the retake will take place under the situation (27a), rather than (27b). Therefore, we can see that the adverbial *unfortunately* is outside the scope of the logical reasoning with the connective *if* and is therefore deemed as non-truth-conditional. Now consider (28a-c).

(28) a. The cook poisoned the soup.

b. Allegedly, the cook has poisoned the soup.

c. If the cook allegedly poisoned the soup, the police should make an inquiry.

In this example, the question to examine the truth-conditional status of the hearsay adverbial *allegedly* is: under what circumstances is the speaker of (28c) suggesting that the police should make an inquiry? In this case, the circumstance is (28b), rather than (28a), because unless someone makes an allegation that the cook poisoned the soup, the police would not make any inquiry even if the cook actually did poison the soup. Hence, it seems that the hearsay adverbial *allegedly* here is truth-conditional.

Ifantidou discussed the four types of sentence adverbials introduced in this paper in terms of this truth-conditionality test and argued that hearsay adverbials and evidential adverbials are truth-conditional in some cases at least, while illocutionary and attitudinal adverbials are non-truth-conditional. That is, not all sentence adverbials have the same truth-conditional status.

The fact that some types of sentence adverbials contribute to the truth-conditional meaning of a sentence while others do not appears to be puzzling to the view that the meaning of a sentence is its truth conditions only. How and why do they differ from one another? What type of linguistic information do non-truth-conditional adverbials encode? Ifantidou offers an account in the relevance-theoretic framework, using the conceptual/procedural distinction that we have seen in the previous section. Her first claim is that all sentence adverbials encode conceptual, rather than procedural, information, even though they may vary in terms of their truth-conditional status. A series of arguments are provided to support this claim.

Firstly, she points out that this analysis explains the fact that non-truth-conditional elements can be true or false in their own right, even though they do not make any contribution to the truth-conditions of the utterance in which they occur. Consider (29) and (30) below.

(29) Peter: Frankly, this party is boring.

Mary: You are not being frank. I've just seen you dancing with the blonde beauty in blue.

(30) Peter: Unfortunately, John lost his job.

Mary: It's not unfortunate! He got a fellowship in Oxford instead!

(Ifantidou-Trouki 1993: 208)

The information conveyed by the adverbials in (29) and (30) can be denied by the hearer. This can be explained if we assume that they encode elements of conceptual representations which can be true or false in their own right. Secondly, Ifantidou argues that the assumption that sentence adverbials encode conceptual information is compatible with the intuitive idea that when they are ambiguous between the sentence and verb phrase ('manner') adverbials, the two readings seem to share the encoding of conceptual information, as we see in (31) and (32) below.

(31) Peter spoke frankly.

(32) It's unfortunately true that John lost his job.

Thirdly and finally, Ifantidou introduces an argument from *compositionality* (Wilson and Sperber 1993). As shown in (33) below, illocutionary and attitudinal adverbials can have syntactic and semantic structures that are quite complex.

(33) Quite frankly, he is a fool.

(34) In the strictest confidence, he is a fool.

(35) Very sadly and regrettably, your fete will be rained off.

(ibid.)

The possibility of these complex structures supports the claim that they encode conceptual information: they can be combined with other words to create more complex conceptual representations.

Hence, on Ifantidou's argument, sentence adverbials always encode conceptual information. Then, how could one characterize the difference in semantic contributions that sentence adverbials make to the truth-conditions of the sentence? Following Wilson and Sperber (1993), Ifantidou claims that the difference between those adverbials which are truth-conditional and those which are not manifests itself as a difference in the "levels" of the explicatures they contribute to: while sentence adverbials which are truth-conditional contribute to the *proposition expressed* by the utterance, those which are non-truth-conditional contribute to its *higher-level explicatures*. Even though they do not contribute to the truth-conditions of the utterance in which they occur, they encode conceptual information and can be true or false in their own right. Recall the examples of *frankly* and *unfortunately* in Peter's utterances in (29) and (30). Although

these adverbials appear to be non-truth-conditional, the information they encode can be true or false in its own right and thus can be negated, as Mary's response shows.

Thus, according to Ifantidou, the distinction between truth-conditional and non-truth-conditional adverbials is attributable to the difference in types of information each adverbial conveys: whether they convey information belonging to the proposition expressed or to the higher-level explicatures. This analysis allows for variations in sentence adverbials with respect to the degree of contributions to the truth-conditions of the utterances they occur in. Ifantidou's analysis is based on intuitive observations, however, and is limited to certain representative adverbs. More evidence from the interpretations of various adverbs will help investigate further the aspects of adverbial interpretation and their semantic and pragmatic contributions to utterance comprehension. The results of a questionnaire study, reported in the next section, aim to achieve this goal.

4. Adverbials in sentence interpretation: a questionnaire study

This section reports the questionnaire study conducted on native English speakers. It aimed to help us understand more on how sentences adverbials are interpreted, or more specifically, whether or not they are part of the truth conditions of the utterance.

4.1 Study protocol

Participants. Twenty-two people voluntarily participated in this pencil and paper questionnaire, who all identified themselves as native speakers of British or American English. The majority of the participants were students of the University of London, and there were a small number of non-students who were referred to the author by some of the student participants.

Materials. Each questionnaire list consisted of twenty sets of sentences and accompanying questions, randomly selected out of sixty-three sentences prepared in the form of Ifantidou's 'truth-conditionality test' by a native speaker of British English. Each adverbial tested belongs to one of the four types of adverbials according to Ifantidou's classification. Let us look at one of the examples used in the questionnaire, given in (36):

(36) John still manages to stay cheerful, although he is injured, obviously.

Question A: What is obvious, according to the speaker?

- a. the fact that John still manages to stay cheerful
- b. the fact that he is injured
- c. the whole statement

Question B: In contrast to what circumstance is the speaker of this sentence claiming that John still

manages to stay cheerful?

- a. the fact that he is injured
- b. the fact that it is obvious that he is injured

Following the target sentence, two multiple-choice questions were posed and the participants were instructed to choose only one answer per question. The first one (Question A) is intended to check the scope of the adverbial, and the second one (Question B) concerns its truth-conditional status, or whether it falls within the scope of the logical relations established between the two events depicted in the bi-clausal structure. In the sample set (36), with an evidential adverbial *obviously*, Question A asks what is obvious, to see the scope of the adverbial *obviously*. Question B, of our chief interest here, is to test its truth-conditional status. As for the connective *although*, which suggests a contrast between the event in the main clause and that in the embedded clause, the question asked was “In contrast to what circumstances” the event in the main clause would occur. If a participant chooses the answer *a* (without the adverbial), then that suggests the adverbial is judged as being non-truth-conditional (i.e. it does not fall within the scope of the connective) and if (s)he chooses *b* (with the adverbial), it is judged as truth-conditional.

In order to further investigate on Ifantidou’s truth-conditionality test scheme, test sentences contained some additional characteristics. First, even though Ifantidou’s discussion used only the non-factive connective *if*, we tested using factive connectives, such as *although*, *while*, and *since*. Also, the positions of the adverbials within the clause or the sentence were varied in order to check whether this affected their scope. We also checked whether the presence or absence of commas emphasizing parenthetical status was reflected as a difference in the acceptability of the sentence. The list of test sentence sets is provided in the Appendix. The sentences were randomly assigned to the three questionnaire lists prepared, and no participant was given the same sentence twice. Some filler materials (similar to the target sentences) were also included in the test.

Procedure and data treatment. Participants answered the questions at their own pace. Typically, it took a participant around 20-25 minutes to complete the questions. Out of all of the answers obtained, there were participants that chose both alternatives as possible. Those answers were excluded from the analysis.

4.2 Results

The results are summarized in the Table below.

Table. Adverbials' truth-conditionality judgements as a function of adverbial type.

Adverbial Type	Total judgements (n=)	Part of Truth-Conditions?	
		Yes %	No %
illocutionary	119	15.1	84.9
attitudinal	76	21.1	78.9
evidential	88	31.8	68.2
hearsay	106	50.9	49.1

Overall results indicate the diversity of interpretations of sentence adverbials occurred within utterances. It is not the case that these adverbials are always outside of the truth conditions of the sentence, but it is also not the case that they fall inside of the logical form of the sentence. These overall tendencies are in line with Ifantidou's (1993) predictions rather than those made by the other two approaches. Let us look at a representative example of each of the four types of adverbials.³

[1] *illocutionary adverbial*: Overall, nearly 85% of the times, illocutionary adverbials were judged as non-truth-conditional. Let us consider an example of the illocutionary adverbial *frankly*.

(37) She failed all her exams, frankly.

(38) Mary looks quite well although she failed all her exams, frankly.

To test the truth-conditional status of the illocutionary adverbial *frankly* in (37), the question (38) is asked, where (37) is embedded in a clause headed by a factive logical connective *although*. This allows us to see if the adverbial falls within the scope of the connective. Being asked what is being contrasted with the content of the main clause (Mary looking quite well), 26 of the 27 judgments on this particular item were "the fact that she failed all her exams", rather than "the speaker tells you frankly that she failed..." This suggests that the adverbial is not part of the world situations being contrasted with the main clause, and is therefore non-truth-conditional. Note here that this result does not fit the predictions made by Lycan's model discussed in the previous section, because it predicts all the sentence adverbials to be invariably part of the truth-conditions of the utterance.

[2] *attitudinal adverbials*. The same point will be suggested for attitudinal adverbials, which were interpreted as non-truth-conditional 78.9% of the times. Let us look at an example of an attitudinal adverbial *unfortunately*.

(39) He was, unfortunately, diagnosed with cancer.

(40) He feels quite well although he was, unfortunately, diagnosed with cancer.

In order to test the truth-conditional status of *unfortunately* in (39), (40) was presented. Being asked

³ Attention should be paid mainly on the *ratio* of the truth-conditional and non-truth-conditional judgements since the number of items for each adverbial type is slightly different from each other.

what is being contrasted with the fact that he feels quite well, again, 23 of the 25 participants chose the answer “the fact that he was diagnosed with cancer”, rather than “that it is unfortunate that he was diagnosed...”, which indicates that the attitudinal adverbial here is read as non-truth-conditional. This result is also incompatible with what Lycan’s or any other account that predicts all sentence adverbials to be part of the truth-conditions would predict.

[3] *Evidential adverbials*. The overall 31.8 percent of the total evidential adverbial judgments were truth-conditional. Consider an example of *evidently*.

(41) The money has, evidently, disappeared.

(42) Since the money has, evidently, disappeared, the police are looking into the matter.

In (42), the target sentence (41) is embedded under the subordinate *since* clause, and this time, 18 out of the 33 subjects given this sentence interpreted the adverbial *evidently* as falling within the scope of *since*, i.e. the reason that the police are looking into the matter is that it is evident that the money has disappeared, rather than merely the fact that the money has disappeared. This suggests that *evidently* here can be part of the sentence’s truth-conditions.

These results suggest that the speech-act account summarized in 2.1, predicting sentence adverbials to be invariably non-truth-conditional, is not sufficient to capture the whole picture of the semantic contributions of sentence adverbials. Although the speech-act theorists correctly analyses some sentence adverbials as illocutionary force indicators, the existence of adverbials that are truth-conditional needs to be explained in a different way.

[4] *hearsay adverbials*. The overall truth-conditional judgment ratio for hearsay adverbials was 50.9%, the highest of all the four adverbial types.

Look at an example of the hearsay adverbial *reportedly*.

(43) He was, reportedly, killed in the accident.

(44) Because he was, reportedly, killed in the accident, his relatives have arrived at the scene.

The sentence (43) is embedded into a clause headed by a factive logical connective *because* in (44). The participants were to determine the reason of the man’s relatives arriving at the scene; if they choose the answer that it is the fact that his being killed was reported, it suggests that the adverbial falls within the scope of the logical connective and is therefore truth-conditional, and if the reason is interpreted to be merely his being killed, it is non-truth-conditional. For this item, out of the 27, 17 of them judged *reportedly* to be truth-conditional, whereas the other 10 judged it as non-truth-conditional. The data pattern observed here would not be compatible with the speech-act analysis.

4.3 Discussion

The results above indicate that there is a significant variety in the interpretations of the four types

of adverbials with respect to the truth conditions of the sentence. This finding would not be explained by the theories that view sentence adverbials to be invariably part of, or not part of, the truth-conditions. The relevance-theoretic analysis as developed by Ifantidou's (1993, 1994), which would predict that adverbials may vary in degrees of contributions to the truth-conditions, seems to best fit the observations reported in the questionnaire.

In fact, the questionnaire study revealed more diversity and fuzziness of the truth-conditional status of adverbials than Ifantidou may originally have anticipated. Not only did more participants than expected judge evidential and hearsay adverbials to be non-truth-conditional, their truth-conditional judgements varied even more. For example, in the case of *reportedly* in (44) above, 17 judged it as truth-conditional and 10 participants judged it as non-truth-conditional. However, in a different example of the same adverbial in (45) below, the pattern was the exact opposite: 17 participants judged it as non-truth-conditional whereas 10 judged it as truth-conditional.

(45) Jane poisoned her husband, *reportedly*, although she claims he died of natural causes.

The finding that even a single adverb may be interpreted in various ways seems to differ from what Ifantidou would expect. She admits in her dissertation: "the truth-conditional status of hearsay and evidential adverbials is quite complicated" (Ifantidou 1994: 148). The empirical data here confirmed the complexity of adverbial interpretations.

Then, when and how can a sentence adverbial be important enough to be part of the sentence's truth-conditions, and what factors can contribute to this process? Ifantidou offered a line of explanation. In a nutshell, she pointed out that hearsay adverbials can affect the truth-conditions by marking them as a case of 'interpretive use' rather than 'descriptive use', and also that as for the evidential ones, they can affect the truth-conditions by strengthening (*obviously, clearly*, etc.) or by weakening (*apparently, seemingly*) the speaker's commitment to the truth of the proposition.

This line of explanation seems promising, though it may require further refinement because the results of the survey revealed that the truth conditional status of sentence adverbials might vary even within a single adverb. Let's recall the example of the hearsay adverbial *reportedly* in (45). One of the feedback comments on an earlier version of this paper pointed out that the verb *claim* in (45) is 'attributively used' (e.g. the speaker of the utterance indicates that she attributes the embedded statement to someone else's and herself does not commit to the truth of it) and therefore somehow cancels out the meaning of *reportedly*. If this is the case, the meaning of *reportedly* is not central to the meaning of the sentence as a result of interacting with the rest of the content of the sentence.

Even though the verb *claim* in this example was intended to be merely an alternative verb choice to a somewhat colloquial *say* in 'she said her husband died of natural causes', admittedly, there is a possibility

that the readers interpreted the verb attributively⁴. To that end, I tested two additional sentences without the verb in question, which are given below.

(46) a. John, reportedly, attempted to kill Mike.

b. John killed Mary although he, reportedly, attempted to kill Mike.

(47) a. Jerry's family, allegedly, had a car accident today.

b. Jerry cannot leave work although his family, allegedly, had a car accident today.

In both of the (b) sentences, the adverbial *allegedly* takes its scope over the embedded clause only. However, 3 out of 3 native speakers of English judged it as non-truth-conditional. Regardless of the presence or absence of *claim*, the similar data pattern was observed for the adverbials here. Yet, the context given by the rest of the sentences might play a role in determining whether an adverbial can make a significant contribution to the truth-conditions or not.

Another factor that was not taken into consideration in Ifantidou's test as well as the present survey was prosody. Intuitively, the different readings the participants may obtain could be associated with the different ways that the sentence is presented: if the sentence is presented auditorily, with different prosody, the results may be very different.

(48) Because he was reportedly killed in the accident, his relatives have arrived at the scene.

(49) Because he was, reportedly, killed in the accident, his relatives have arrived at the scene.

The two sentences above are different from each other only in that there are commas around the adverbial *reportedly*, and yet the judgements were different. While all of the 6 participants judged the adverbial in (48) as truth-conditional, only 3 of the 6 judged it in (49) as truth-conditional, surprisingly. The presence of the commas is presumed to make the adverbial somewhat parenthetical, which is linked to the intuition that there is a prosodic boundary separating the adverbial from the rest of the sentence, perhaps making it less a part of the sentence. In this survey, the materials were presented visually and the prosody of the materials was not controlled. In the literature, prosody is known to play an important role in sentence comprehension even in silent reading, as formulated as Fodor's Implicit Prosody Hypothesis (e.g., Fodor 2002). It will be interesting to compare visual and auditory presentations of these sentences.

5. Summary and concluding remarks: preview of further analysis

In this paper, I reported the results of a questionnaire study conducted in order to investigate how the four types of sentence adverbials may or may not affect the truth-conditions of the utterances, using Ifantidou's 'truth-conditionality test' scheme. The data pattern of the study suggested that while

⁴ The intuition is that the verb with the attributive use may bear special prominence in spoken utterances. As the present questionnaire was conducted with written input only, this possible confounding should be resolved in a spoken presentation.

illocutionary and attitudinal adverbials tend to be judged as outside of the truth-conditional content of the sentence, evidential and hearsay adverbials tended to be read as inside of the truth-conditional content. These results provide empirical support for Ifantidou's treatment of sentence adverbials: while they all encode conceptual information, they may vary in terms of their truth-conditional status and the non-truth-conditional adverbials contribute to the higher-level explicatures of the utterances.

The questionnaire study reported here for the present paper was not fully exhaustive and it was not fully controlled as a psycholinguistic experiment. For example, there were not enough filler sentences to prevent the readers from becoming conscious of the construction of interest, or the study did not take intonation (prosody) factors into consideration. However, the study still provided empirical support to Ifantidou's (1993) pragmatic explanation of adverbial interpretations and hopefully it has illuminated readers on some of the varying ways to treat adverbial elements with respect to the truth-conditions of sentences. Future research will continue to further investigate how the linguistic (conceptual) meanings of adverbials and other factors (such as context and prosody) may interact in sentence comprehension in English and other languages as well.

* This paper is a re-examination and development of the research conducted during my year at the University College London. I would like to thank Deirdre Wilson, Mariko Kudo and others for their feedback on the earlier versions of the paper, as well as Steve Ryan for stylistic suggestions. All the remaining errors are my own.

Appendix: List of sentences tested

Given below is the list of target sentences that appeared in the questionnaire. Four versions for each base sentence were created where adverbial positions and the presence or absence of parentheses around the adverbial were varied. An example 4-version set is given below and the rest of the list presents one variant of each target.

Example: *unfortunately*

- (i) He feels quite well although he was unfortunately diagnosed with cancer.
- (ii) He feels quite well although he was, unfortunately, diagnosed with cancer.
- (iii) He feels quite well, although he was, unfortunately, diagnosed with cancer.
- (iv) He feels quite well, although he was diagnosed with cancer, unfortunately.

Illocutionary Adverbials

1. Mary looks quite well, although she, frankly, failed all her exams.
2. He still found the time to entertain his friends while, seriously, he was busy.
3. Because the child honestly is spoiled, we must be strict with her.

Attitudinal Adverbials

4. He feels quite well although he was unfortunately diagnosed with cancer.
5. Although the family had unfortunately been evicted, they managed to find a new place to live.
6. All her friends in the class performed quite well, while she, sadly, failed the exam.

Evidential Adverbials

7. John still manages to stay cheerful, although he is, obviously, injured.
8. John's sister remains very thin while John, obviously, gained weight.
9. Since the money evidently has disappeared, the police are looking into the matter.
10. Since the author is so popular, the book, no doubt, will be a best seller.
11. The play was very entertaining, although the actors, certainly, lacked talent.
12. Although I am not too impressed by the ending, the book, certainly, is very interesting.

Hearsay Adverbials

13. Jane, reportedly, poisoned her husband, although she claims he died of natural causes.
14. While John reportedly won the race, his friends thought he lost it.
15. Because the criminal reportedly has escaped, we must be careful when we go out at night.
16. Because he was, reportedly, killed in the accident, his relatives have arrived at the scene.

References

- Austin, J.L. 1962. *How to do things with words*. Oxford: Clarendon Press.
- Bach, K. and R. Harnish (1979) *Linguistic communication and speech acts*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Bellert, I. (1977) On semantic and distributional properties of sentential adverbs, *Linguistic Inquiry* 8: 337-351.
- Blakemore, D. (1987) *Semantic constraints on relevance*. Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. (1992) *Understanding utterances*. Oxford: Blackwell.
- Carston, R. (1998) *Pragmatics and the explicit/implicit Distinction*. Doctoral Dissertation, University College London, London.
- Fodor, J.A. (1983) *Modularity of mind*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Fodor, J.D. (2002) Psycholinguistics cannot escape prosody. In *Proceedings of the Speech Prosody 2002 Conference*, Aix-en-Provence, France.

- Greenbaum, S. (1969) *Studies in English adverbial usage*. London: Longman.
- Grice, P. (1975) Logic and conversation. In: Cole, P. and Morgan, J.(eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press. Reprinted in: Grice P. (1989), *Studies in the way of words*, 22-40. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Ifantidou, E. (1994) *Evidentials and relevance*. Doctoral dissertation, University College London, London.
- Ifantidou-Trouki, E. (1993) Sentential adverbs and relevance. *Lingua* 90, 1/2:69-90.
- Katz, J. (1972) *Semantic theory*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Lehrer, A. (1975) Interpreting certain adverbs: semantics or pragmatics? *Journal of Linguistics* 11, 239-248.
- Lycan, W. G. (1984) *Logical form in natural language*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- McConnell-Ginet, S. (1982) Adverbs and logical form: a linguistically realistic theory, *Language* 58:1, 144-184.
- McCawley, J. D. (1988) *The syntactic phenomena of English*, Chicago: University of Chicago Press.
- Mittwoch, A. (1977) How to refer to one's own words: speech-act modifying adverbials and the performative analysis. *Journal of Linguistics* 13, 177-189.
- Okada, N. (1985) *Fukushi to sounyu bun (Adverbs and parenthetical sentences)*. Tokyo: Taishukan.
- Palmer, F. (1986) *Mood and modality*. Cambridge: CUP.
- Sperber, D. and D. Wilson (1995) *Relevance: communication and cognition*. Oxford: Blackwell (second edition).
- Urmson, J. O. (1963) Parenthetical verbs. In C. Caton (ed.) *Philosophy and ordinary language*, 220-240. Urbana: Univ. of Illinois Press.
- Wilson, D. (1996) *Pragmatic theory lectures*, University College London.
- Wilson, D. and D. Sperber (1993) Linguistic form and relevance. *Lingua* 90.1/2: 1-25.

英語文副詞と真理条件的意味について ～アンケート調査の結果から～

小 泉 有 紀 子

本論文では、英語における文副詞（unfortunately, reportedly などの文全体を作用域にとる副詞類）の解釈が文全体の真理条件に及ぼす影響について考察する。先行研究では文副詞の真理条件性を扱ったものは多くないが、考えられる可能性（発話行為論、Lycan の理論、関連性理論などのモデル）のうち、文副詞はすべて概念的情報を持つが、真理条件に寄与するものもそうでないものもあるということを予測する関連性理論の立場の分析が、真理条件性に関するテストにより得た実際のデータの多様性を最もよくとらえているということを見る。本論文は、文副詞の意味内容と文の真理条件、また解釈におけるその他の要因（例えば発話の状況やイントネーションなど）がどのように関わりあっているかを明らかにするための出発点となるものである。

論 文

映画における晩年性

アンドレ・バザンとフランソワ・トリュフォーの老化をめぐる議論

大久保 清 朗

1 はじめに——若き日のバザンとトリュフォー

フランスの映画監督フランソワ・トリュフォーが、映画批評家アンドレ・バザンに師事したことはよく知られている。アントワヌ・ド・ベックとセルジュ・トゥビアナによる浩瀚なトリュフォー伝によれば、トリュフォーがバザンと出会ったのは1948年11月30日のこと¹、トリュフォーは16歳、バザンは30歳であった。その後トリュフォーはバザンのもとで文化活動機関〈労働と文化〉の仕事に従事することになる。トリュフォーにとってバザンは彼の「養父」²的存在となっていくが、2人の擬似的な親子関係は、1951年、軍隊から脱走したトリュフォーにバザンが自宅の屋根裏部屋を提供し、1952年2月に除籍された彼の引受人となったというエピソードからも窺い知れる。トリュフォーは1954年2月に『アール』誌の映画評欄の定期執筆者となり、経済的安定を得るまでバザン家に寄宿した³。バザンの妻ジャンヌの回想によれば、「バザンとフランソワの関係は先生と生徒の関係ではなく、映画を愛する者同士、各々の気質と成熟度にしたがいがい映画を語る関係」であったという⁴。山田宏一が述べるように、「バザンはトリュフォーの情緒不安定を一つの方向に——純粋に映画の方向に——みちびいていった」⁵のである。

若き日のバザンからの恩恵に対して、トリュフォーはバザンの著書出版というかたちで返礼している。1970年代にはバザンの映画評のアンソロジーを3冊——『チャーリー・チャップリン』(1972年)、『残酷の映画』、『占領とレジスタンスの映画』(ともに1975年)——編集している。またアンドレ・S・ラバルトとともに、『ジャン・ルノワール』(1971年)と『オーソン・ウェルズ』

1 Antoine de Baecque, Serge Toubiana, *François Truffaut*, Editions Gallimard, 1996, p. 60. [アントワヌ・ド・ベック、セルジュ・トゥビアナ『フランソワ・トリュフォー』稲松三千野訳、原書房、2006年、53-54頁]

2 François Truffaut, « Préface », André Bazin, *Le Cinéma de la cruauté : Eric von Stroheim, Carl Th. Dreyer, Preston Sturges, Luis Bunuel, Alfred Hitchcock, Akira Kurosawa*, Editions Flammarion, 1975, p. 10. [フランソワ・トリュフォー「序文」、アンドレ・バザン『残酷の映画の源流』佐藤東洋磨・西村幸子訳、新樹社、2003年、8頁] バザンの死に際して書かれた追悼文で、トリュフォーは自らを彼の「養子」であるとも述べている。François Truffaut, « Adieu à André Bazin », *Chroniques d'Arts-Spectacles (1954-1958)*, Textes réunis et présentés par Bernard Bastide, Editions Gallimard, 2019, p. 479. 以下、『「アール＝スペクタクル」誌の時評欄 (1954-1958年)』からの引用はCASと略す。

3 上記『「アール＝スペクタクル」誌の時評欄 (1954-1958年)』の編纂者ベルナル・バステイドによる序文を参照。Bernard Bastide, « François Truffaut : direct et sans concession », *CAS*, p. 11.

4 Janine Bazin, « François chez nous », *Cahiers du cinéma*, numéro spécial, Editions de l'Etoile, 1984, p. 14.

5 山田宏一『トリュフォー——ある映画の人生』〔増補新版〕平凡社、1994年、178頁。

(1972年)の編纂にあたっている⁶。

以上を踏まえ、これから検討したいのはバザンとトリュフォーとの間に起こった老化をめぐる論争である。あとで見えていくようにこの老化は2つの意味——監督の老いと、映画の老い——を含意する。といっても、彼らが老化について正面から議論したのではない。それはアダプテーションと「作家主義」⁷を通して間接的になされているにすぎない。それゆえ、この問題はこれまで副次的なものとして看過されてきた。だが老化はバザンにとって、彼の映画の進化という概念とも関連する重要なモチーフである。またトリュフォーにとっても、老化はバザンとの論争の局面で必ず言及せずにはおかない問題であった。トリュフォーは「作家主義」を述べるとき、対句のようにして老化の問題について言及しているのである。本論において、私たちはこの老化を、テオドール・アドルノが提起し、エドワード・サイードが展開させた「晩年のスタイル (late style)」によって再考していく。ここでバザンとトリュフォーが取り組んでいる問題を、今日において晩年性と呼ばれる問題と接続させたい。映画における晩年性——それは映画作家の晩年性と、映画そのものの晩年性とを含意する。そのことで、私たちはこれまであまり触れられて来なかった1970年代以降のトリュフォーのある種の変化、さらには1960年代以降のフランス映画のある種の傾向を明らかにすることができるのではないかと思われる。

2 引用と借用——「芸術は科学でない」

トリュフォーは、『残酷の映画』の序文において、バザンが「自らの天職をきわめて明確に定義」した文章として「批評に関する考察」⁸を引用している。ここではトリュフォーが割愛した部分に注目するため、少し長くなるが引用する（彼が引いたのは下線部分である）。

芸術は科学ではない。生物学においては、ルイセンコ主義はイデオロギー的な狂気の沙汰である。しかしヒッチコック主義やベルイマン主義は批評戦略上の作戦であったし、またそうであり続けている。そしてそれは間違いなく、映画をめぐる思考の歴史を豊かなものとしたはずだ。しかも私自身は個人的には「作家主義」を信じていないのだからいっそう、自由な立場でそういえるのである。だが芸術において絶対的な間違いは存在

6 バザンの死後刊行書物については、アンドレ・バザン『オーソン・ウェルズ』（インスクリプト、2015年）における堀潤之の訳者解説（155-185頁）、特に156-162頁を参照。

7 私たちはこれまでこれら2つの問題系について検討を重ねてきた。アダプテーションについては、2018年12月20日に「映画とアダプテーション——アンドレ・バザンを中心に」(山形大学人文社会科学部1号館301教室)および「アンドレ・バザン研究」(山形大学人文社会科学部附属映像文化研究所アンドレ・バザン研究会。第1号は2017年、第2号は2018年、第3号は2019年に刊行。以下『バザン研究』と号数で略す。)第3号の小特集「映画とアダプテーション」参照。作家主義については『バザン研究』第1号の特集「作家主義再考」と第2号の小特集「作家主義再考2」参照。

8 André Bazin, « Réflexions sur la critique », *Écrits complets*, Editions Macula, 2018, p. 2516-2519. (以下、マキュラ出版社から刊行された全集版をECと略記する) [アンドレ・バザン「批評に関する考察」野崎欲訳、『バザン研究』第2号、161-177頁]

しない。批評における真実は、何か計測可能な客観的正確さなどというものによってではなく、何よりもまず批評が読者に引き起こす知的昂奮によって決められる。つまり批評の質と広がりによってである。批評家の役割とは存在しない真実を銀の盆にのせて運ぶことではなく、芸術作品の与える衝撃を、読者の知性と感性のできるかぎり遠くにまで届かせることなのである。⁹

この引用の前の部分でバザンは、1930年代から50年代前半のフランスにおいては、イギリスやイタリアとは異なり、映画制作と映画批評とのあいだに交流が存在しなかったことを確認し、その上で1958年の執筆当時、「若い世代の知識人」が映画作りに関心を持ち始めたこと、そしてその知識をシネマテーク通いや批評の実践によって身につけるようになってきていると指摘し、フランス映画界の変化の兆しを見ている。バザンは、こうした制作志望の若者たちの映画批評が「論争的」であるのは当然で、なぜならそれは「潜在的な創作者たちによる情熱あふれる批評」であるからだと擁護する。バザンの念頭にあるのは、『カイエ・デュ・シネマ』誌において批評活動を行っていた若者たち——「若いトルコ人たち」とも呼ばれたトリュフォーを筆頭とする青年たち——であることは間違いない。そうした批評は必然的に「不公平」なものにならざるを得ないが、「その反射角の狭さゆえに、客観的批評以上に奥深くまで対象を理解することがしばしば可能になる」と述べている。「反射角の狭さ」——文脈に照らして言い換えれば、極端な主観的批評であろうか——の意義を認めた上で、先の文章が続くことになる。

ここはバザンによるトリュフォーへの影響が明確に見てとれる箇所である。「芸術は科学ではない」(L'art n'est pas la science.) という一文に注目してみよう。先述の通り、トリュフォーは1975年(つまり『残酷の映画』刊行と同年)に、彼自身の映画論集『わが人生の映画たち』を出している。その序文で彼は「わたしたちは批評にあまり要求しすぎてはならない。とりわけ厳密な科学のように作用することを求めてはならない。芸術は科学的ではない (l'art n'est pas scientifique) 以上、なぜ批評が科学的であらねばならないのだろう」¹⁰と記している。監督たちが批評を敵視する傾向をいさめるなかで書かれた一文であるが、ここではトリュフォー自身がバザンと同化しつつ批評の有効性を説いている。トリュフォーのテキストに見られるバザンの引用と借用は、バザンの批評精神がトリュフォーへとスムーズに移行しているかのような印象をもたらす。

バザンを継承するトリュフォー。しかしバザンとトリュフォーとのあいだでは、批評的立場において相反する部分がある。それは「私自身は個人的には「作家主義」を信じていない」という一文である。後に触れるように「作家主義」を標榜したのはトリュフォーであり、バザンは自ら

9 EC, p. 2519. [同前、177頁]

10 François Truffaut, *Les Films de ma vie*, Editions Flammarion, 1975, p. 24. [フランソワ・トリュフォー『映画の夢夢の批評』山田宏一・蓮實重彦訳、たざわ書房、1979年、34頁]

の立場がトリュフォーとは異なることを明言している。ところが、トリュフォーは、自ら編纂したバザン論集の序文で引用するとき、その部分を割愛している。さらに『残酷の映画』は、「エリック・フォン・シュトロハイム、カール・ドライヤー、プレストン・スタージェス、ルイス・ブニュエル、アルフレッド・ヒッチコック、黒澤明」という副題が付され、6人の監督の映画評が監督別に再録するという構成となっている。トリュフォーの編纂方針は、バザンが「作家主義」を信じていたという印象を与えかねない。こうした操作によって、トリュフォーは本来立場を異にすると明言していた「作家主義」の側にバザンを囲い込もうしているようにも見える。だが問題は彼の思惑ではなく、1970年代以降の彼が経験しつつある変化にある。それを明らかにするべく、バザンとトリュフォーの影響関係について確認しておかなければならない。

3 アダプテーション

1950年代のトリュフォーの批評でバザンからの直接的な影響を見いだせるのは、アダプテーションをめぐる議論である。当時のフランスの文芸映画を批判した「フランス映画のある種の傾向」¹¹には、バザンの「『田舎司祭の日記』とロベール・プレッソンの文体論」¹²からの引用が見出される。

『田舎司祭の日記』は、1936年に刊行されたジョルジュ・ベルナノスの同名小説をロベール・プレッソンが映画化したものである。デイドロの『運命論者ジャックとその主人』（1796年）の一部を映画化した前作『ブローニュの森の貴婦人たち』（1945年）が公開時に批評家から無理解を蒙ったのとは対照的に、『田舎司祭の日記』は1951年2月7日に公開されると、たちどころに絶賛を受ける¹³。バザンの『田舎司祭の日記』論は、公開から3か月が経過した1951年6月——「それが引き起こした最初の反響を見届けた後に」（野崎歎）¹⁴——『カイエ・デュ・シネマ』誌第3号に発表された。

バザンの「満を持してという形容にふさわしい」論考の詳細については野崎の論に譲り、ここではトリュフォーへの影響に要点を絞って述べておきたい。バザンは、結論近くで、従来における小説を映画化を2種類に整理している¹⁵。一方にあるのは「小説を別の言語へと美学的に翻訳する」やり方であり、もう一方にあるのは「自由な映画化」、あるいは「映画監督の小説家への

11 「フランス映画のある種の傾向」は、1987年、ジャン・ナルボニとセルジュ・トゥピアナ編纂による遺稿集『目の快楽』に採録された。引用は遺稿集に依る。François Truffaut, « Une certaine tendance du cinéma français », *Le Plaisir des yeux*, Cahiers du cinéma, 1987, p. 192-207. 以下、PYと略記〔フランソワ・トリュフォー「フランス映画のある種の傾向」山田宏一訳、『ユリイカ』1989年12月臨時増刊号、8-30頁〕

12 André Bazin, « Le Journal d'un curé de campagne et la stylistique de Robert Bresson », *EC*, p. 716-722. [アンドレ・バザン「『田舎司祭の日記』とロベール・プレッソンの文体論」谷本道昭訳、『映画とは何か』上巻、岩波文庫、2015年、177-215頁]

13 この経緯については野崎歎『アンドレ・バザン——映画を信じた男』（春風社、2015年）の第4章「文芸映画の彼方へ」、特に「『田舎司祭の日記』の成功」（125-129頁）を参照。

14 同前、129頁。

15 以下、*EC*, p. 721-722. [「『田舎司祭の日記』とロベール・プレッソンの文体論」208-210頁]を参照。

本質的な共感」によってなされる映画化である。前者は小説と映画の「等価性」に基づくアダプテーション、後者は「気質の親和性」に基づくアダプテーションであり、前者の例として『田園交響楽』（ジャン・ドラノワ監督、1946年）や『肉体の悪魔』（クロード・オータン＝ララ監督、1947年）、後者の例として、ジャン・ルノワールの『ボヴァリー夫人』（1934年）、『ピクニック』（撮影1936年／公開1946年）、『河』（1951年）が挙げられている。前者は、いずれも脚本家ジャン・オーランシュとピエール・ポストによって脚色されている。彼らは『ドゥース』（クロード・オータン＝ララ監督、1943年）で初めて協働して以来、数多くの翻案を手がることになった。だがバザンによれば、ブレッソンによる『田舎司祭の日記』映画化はそのどちらでもない。それは叙述を「等価」な映像で置きかえるのでも、作家に「共感」して自由に映像を作り出すのでもなく、「映画を掛け合わされた小説とでもいうような、新たな美学的存在」といえるものであった。

バザンがブレッソンの映画において着目しているのは、映画と小説との共通性を探り当てるよりも、両者の異質性を正面から引き受けるアダプテーションの在り方であるといえる。そのとき、「等価」という一見もっともらしい共通項によって文学作品を映画化する従来の文芸映画は批判の対象となる。バザンはこの論考を「ロベール・ブレッソンのあとでは、オーランシュとポストはもはや文学作品の映画化におけるヴィオレ＝リュ＝デュックにすぎない」¹⁶という辛辣な一文で締めくくる。オーランシュとポストのシナリオ映画を、独自の建築理論でゴシック建築を改変した19世紀の建築家になぞらえながら、バザンは彼らの翻案がもはや時代遅れになることを予言している。野崎は、こうしたバザンのアダプテーション美学がカメラがとらえる対象への信というリアリズムに依拠し、それが最終的には「従来の文芸作品を全面的に否定し去る可能性」¹⁷をも示唆している。『田舎司祭の日記』論の最後の一文には、そうした否定的な力が見出されるのである。

トリュフォーの「フランス映画のある種の傾向」は、こうしたバザンの否定性を徹底的に推し進めた論考であった。『カイエ・デュ・シネマ』誌の1954年1月号に掲載されたこの論文が、いわゆる「心理的リアリズム」、さらにそれによって形成されたフランス映画における「良質の伝統」を徹底的に糾弾するものであることはよく知られている。それは、「まさにバザンの文芸映画論を引き継いだもの」¹⁸であり、「文学を映画へと「脚色」するやり方をめぐる論考」(堀潤之)¹⁹であった。実際、「良質の伝統」を形作っているのは、オーランシュとポストが量産した文学の翻案作品であったからである。

とはいえアントワース・ド・ベックの論考によれば²⁰、「フランス映画のある種の傾向」の構想

16 EC, p. 722. [同前、212頁]

17 野崎、前掲書、147頁。

18 同前。

19 堀潤之「映画的不純性に向けて——ヌーヴェル・ヴァーグと「脚色」の問題」、『研究叢書』第62号（渋谷哲也編「映画におけるイメージとテキストの関係について」）日本独文学会、2009年、68頁。

20 アントワース・ド・ベック『シネフィリー——ある眼差しの発明、ある文化の歴史、1944-1968年』所収の「フランソワ・トリュフォーはいかにして「フランス映画のある種の傾向」を書いたか（1950-1958年）」(Comment

は『カイエ』での発表の2年以上前にトリュフォーの裡で胚胎していた。1951年10月24日の手記には、すでに尊大な映画作家、脚本家による作中人物たちへの軽蔑を告発する覚え書きが記されている²¹。その3日後——ドイツのアンダーナッハの軍刑務所収監中——トリュフォーはオーランシュとポストの脚本についてメモを記す。こうして彼は、「フランス映画は「脚本家の映画」であり、その失敗は脚本家自身の欠点のなかに探すべき」であると確信する²²。さらにラディゲの『肉体の悪魔』（1923年）が『イスイ・パリ』誌で再掲されると、パリの友人を介して営倉に取り寄せ、小説と映画との比較を自らの記憶を頼りに専心する。こうして1951年11月には、これらの2つの考え——尊大な映画作家たちによる登場人物たちへの軽蔑と、フランスの小説の脚色形式の拒否——が結合し「フランス映画のある種の傾向」の骨格ができあがることになる。トリュフォーがバザンの『田舎司祭の日記』論を発表直後に読んだとは考えにくい、少なくとも1952年2月にバザン家に寄食し始め、「フランス映画のある種の傾向」の第1稿にあたる「軽蔑の時代——フランス映画のある種の傾向についての覚え書き」を書き終える1952年12月までの期間に読んだことは間違いない。バザンはこの第1稿掲載を見送り、トリュフォーに『カイエ・デュ・シネマ』誌上で映画評を書くよう慫慂する。トリュフォーが「フランス映画のある種の傾向」改稿版をバザンとジャック・ドニオル＝ヴァルクローズに提出したのは1953年11月6日であり、その約2か月後、『カイエ』1954年1月号掲載に至る。

トリュフォーがバザンの『田舎司祭の日記』論に影響を受けているのは、脚本における「等価」をめぐる議論などに見て取れる。バザンが旧来の脚色の2つのうちの1つとして整理したこの原理は——最後に時代遅れの烙印を押されるにせよ——事実確認として中立的に述べられていた。対して、トリュフォーはそれを敵視している。「かの等価の方法において私を困惑させること、それはある小説が撮影できない場面を含んでいると確信することなど全くできないということであり、さらには、その撮影できないと宣告された場面が誰にとってもそうであるということである」²³。トリュフォーはこの直後にバザンの『田舎司祭の日記』論の末尾を引用し、自論を補強する。

トリュフォーは、ブレッソンの映画とオーランシュとポストのシナリオ版との比較検討に入っていく。オーランシュ＝ポスト版『田舎司祭の日記』シナリオを引用しつつ、忠実さとは名ばかりの裏切りと瀆神行為とを明らかにしていくくぐりは——ピエール・ポストに直接連絡を取り、彼に取り入ってシナリオを入手したというトリュフォーの「かなり不作法な手段」²⁴は非難されるべきであるが——この論考の白眉であろう。田舎司祭と伯爵令嬢シャンタル（ブレッソンの映画ではクロード・レイデュとニコル・ラドラミルが演じている）との教会での問答の場面を

François Truffaut a écrit « Une certaine tendance du cinéma français » (1950-1958) を参照。Antoine de Baecque, *La Cinéphilie : invention d'un regard, histoire d'une culture 1944-1968*, Editions Fayard, 2013, p. 135-167.

21 *Ibid.*, p. 140.

22 *Ibid.*

23 *PY*, p. 196. [「フランス映画のある種の傾向」13頁]

24 Baecque, *op.cit.*, p. 142.

引く。『裁かるるジャンヌ』（カール・ドライヤー、1927年）との共通性を指摘しつつ、バザンが「ドライヤーと同じように、ブレッソンは俳優の顔のもっとも肉感的な側面に固執するのだが、顔は演技を放棄することによって存在の特徴的な痕跡となり、魂のもっとも読み取りやすい形跡となっている」²⁵と称揚したこの場面において、オーランシュ＝ポスト版では原作にはない場面が追加される。そこではシャンタルが、聖体拝領で信者が司祭からキリストの身体として受領する「ホスチア」と呼ばれるパンを吐き出し、それをミサ典書のページに閉じ込む。彼女はその書物を司祭に開かせ、自らの嘔吐物を見せつけて、あざけるのである。それだけでは終わらず、司祭はシャンタルとの問答の末に吐き出された^{ホスチア}聖体を呑み込んでしまう。こうした露悪的な変更を、トリュフォーはシナリオの該当箇所を延々と引用しながら例証してみせている²⁶。

トリュフォーが「フランス映画のある種の傾向」でアダプテーション論を展開したのは、「良質の伝統」を徹底的に排斥し、「作家の映画」——ジャン・ルノワール、ジャック・ベッケル、アベル・ガンズなど——を擁護するためであった。だがそれはまた、彼自身の映画作家としてのマニフェストでもあった。それは、「フランス映画のある種の傾向」から3年後、『アール』誌の1957年5月に発表された彼のエッセイ「フランス映画は偽りの伝説の下で死ぬ」²⁷へとつながっていく。トリュフォーは「明日の映画は私小説や自伝小説よりもいっそう個人的なものになるにちがいない」²⁸と述べ、自伝的映画への志向を鮮明にしている。それは彼の初長編であり、アントワーヌ・ドワネルを主人公とした自伝的連作の第1作目『大人は判ってくれない』（1959年）の誕生を予告しているだろう。このように考えていくと、『田舎司祭の日記』をめぐるバザンのアダプテーション論は、トリュフォーの「フランス映画のある種の傾向」を準備し、さらにトリュフォーの映画作家の誕生を準備していくものであるといえるかもしれない。

だがバザンのアダプテーション論からトリュフォーの映画作家の誕生を直接的に導き出しているのだろうか。なるほど、トリュフォーがアンリ＝ピエール・ロシェの『ジュールとジム』（映画邦題『突然炎のごとく』（1962年））を映画化し、その手法がブレッソンの映画化に類似していることは、すでに指摘されている²⁹。だが『二人の英国女性と大陸』（映画邦題『恋のエチュード』（1971年）³⁰）においてはいささか異なる様相を呈している。「アンリ＝ピエール・ロシェふたたび」によれば、トリュフォーはこのロシェの第2長編の映画化を長い間躊躇していたが、1971年に精神衰弱で入院し、睡眠療法中に再読しながら映画化を決意したという³¹。

ではその結果はどうであったか。そこでは原作小説のテキストをトリュフォー自身が早口で読み上げている。この小説のテキストを映画に取り込むという手法は、『田舎司祭の日記』を映画

25 EC, p. 719. [『田舎司祭の日記』とロベール・ブレッソンの文体論] 193-194頁]

26 PY, p. 196-197. [『フランス映画のある種の傾向』14-15頁]

27 François Truffaut, « Le Cinéma français crève sous les fausses légendes », *CAS*, p. 356-368.

28 *Ibid.*, p. 367.

29 野崎、前掲書、149頁。堀、前掲論文、74-75頁。

30 アンリ＝ピエール・ロシェ『恋のエチュード』大久保昭夫訳、角川文庫、1972年。

31 François Truffaut, « Henri-Pierre Roché revisité », *PY*, p. 152.

化したブレッソンのそれと似通っており、『突然炎のごとく』を踏襲したものである。だが一方で、トリュフォーは原作を大幅に改変している。この小説はフランス人青年クロードとイギリス人女性の姉妹アンとミュリエルの三角関係を描いたものだが、原作小説ではミュリエルが姉でアンが妹であるのに対し、映画ではその年齢が逆転している³²。かつて「フランス映画のある種の傾向」のトリュフォーは、アメデ・エイフルの批評を引用しつつ『田園交響楽』の映画化において、原作にはない人物を追加し心理の代弁者としていることを非難していた³³。こうした人物関係の改変は、トリュフォーを自らが非難した「良質の伝統」に彼を接近させかねない。一方、トリュフォーがロシェと親交を結んでいたという伝記的事実に依拠するならば、トリュフォーのロシェ作品の映画化は、むしろバザンが述べたもう1つのアダプテーション、すなわち作者への共感に基づく自由な翻案に近いと述べることもできる。

いずれにしてもいえるのは、『恋のエチュード』はトリュフォーの作品のなかで、いささか曖昧な位置にあるということである。それは『家庭』(1970年)を撮り終え、自伝的連作〈アントワヌ・ドワネルもの〉に1つの区切りをつけたトリュフォーのなかで、何らかの変化が起きていることを物語っているのではないか。国内では惨憺たる結果に終わった『恋のエチュード』であるが、トリュフォーが死の間際に再編集を行い、この作品に深く執着していたことは何を意味しているのか。そして他のトリュフォー映画にはないこの作品の異様なまでの重苦しさはどうか。また、あまりに赤裸な性愛描写(ミュリエルによる自慰の告白、ミュリエルの嘔吐)は、シャンタルに聖体を吐かせるオーランシュ=ポスト版以上に露悪的とはいえないだろうか。そして陰鬱な死のイメージの数々(アンの病死におけるアイリスアウトの使用、母親の葬儀場面における主人公クロードの沈鬱な表情、またその背後で梯子を使って喪のカーテンを取り除く葬儀屋の姿)。これは『田舎司祭の日記』に範を取るかに見えながらも、それに収まりようのない矛盾が胎まれている。「作家主義」をめぐる扱いで浮かんだ「バザンを継承するトリュフォー」への疑問符がここでも現れる。以後、「作家主義」をめぐる議論に移りたいと思う。

4 「作家主義」

「作家主義 (la politique des auteurs)」とは、トリュフォーが自らの愛する映画監督を擁護する際に戦略的に用いた用語である。アントワヌ・ド・ベックとセルジュ・トゥビアナによれば、「作家主義」はトリュフォーにとって「理論的」であると同時に「戦闘的」な「極めつけの概念」である³⁴。「作家の政策」あるいは「作者の政策」とも訳せる語であり、「作家主義」という訳語を当てた飯島正も「正確に内容をいいあてているとはいえない」³⁵と述べている。管見においてこ

32 またこの姉妹にはチャールズとアレックスという弟がいるが、映画では削除されている。

33 *PY*, p. 195-196. [「フランス映画のある種の傾向」、12-13頁]

34 Baecque, Toubiana, *op.cit.*, p. 144. [ベック、トゥビアナ、前掲書、131頁]

35 飯島正『ヌーヴェル・ヴァーグの映画体系Ⅰ』冬樹社、1980年、163頁。

の語が最も早く現れるのは1954年9月、彼が『アール』誌に執筆した「アベル・ガンス卿」である³⁶。その5か月後、ジャック・ベッケルの『アラブの盗賊』を評した、『カイエ・デュ・シネマ』誌1955年2月号の批評では、「アリババと『作家主義』」とこの語をタイトルとして掲げている。

トリュフォーが「作家主義」で顕揚したアベル・ガンスについて述べたい。『戦争と平和』(1919年)、『鉄路の白薔薇』(1923年)や『ナポレオン』(1927年)など、サイレント期において大作を手がけたガンスは、トーキー以後、とりわけ第2次世界大戦中に撮られた『盲目のヴィーナス』(1941年)の批評的失敗以降、思うように映画制作ができなくなる。1947年から52年にかけてキリストの生涯を題材とした「神聖悲劇」を企画するものの、制作規模の巨大ゆえに頓挫する。その後、久々に監督した映画が、アレクサンドル・デュマの戯曲『ネールの塔』(1832年)を原作とする『悪の塔』(1955年)であった。当時フランスのパリではガンスの監督復帰を記念し特集上映が行われたが、「アベル・ガンス卿」はそのなかで書かれたものである。ここでトリュフォーは次のように述べている。「私は「作家をめぐる政策 [作家主義]」を信奉する。あるいは、映画作家の老化説、さらにいえばその「毫碌」説に与することを拒否する、といってもいい」³⁷。

確認しておくべきは、トリュフォーの「作家主義」が、映画に先行していることである。「アベル・ガンス卿」執筆(1954年9月頃)の時点で『悪の塔』は完成しておらず(フランス公開は1955年3月18日)、トリュフォーは当該作品を未見のままガンスを擁護している。端的に言って「作家主義」は映画の良し悪しを判定するものではない。「私は「作家をめぐる政策」を信奉する(je crois à « la politique des auteurs »)」の部分、より単純に「私は「作家主義」を信じる」とも訳せる(そしてバザンの「私自身は個人的には「作家主義」を信じていない」と対照をなす)のだが、これはあくまで「作家という政策」という意味であり、「作家(=監督)の持つ主義」を信じるという意味ではない。繰り返しになるが作家主義は批評戦略である。「信じる」に足る客観的根拠がない以上、それは賭けに近い。

「作家主義」が何であるかをトリュフォーは、それと対立するもの、否定すべきものによって明らかにする。「アベル・ガンス卿」においては、「振り子の法則」(lois de l'alternance 直訳すれば「交替の法則」)である。この語は、1955年に執筆された「批評の七つの大罪」や1956年に書かれた『パリもし語りなば』(サッシャ・ギトリ監督、1956年)の評においても見出される。ここでは「振り子の法則」は「かわるがわる、ある作家を酷評し、また賞賛したがる」ような「批評的現象」³⁸であると述べられている。言うなれば、これはある芸術家に対する評価の変動の波——それが上昇と下降、成功と失敗とが文字通り「交替」する現象——を指している。トリュフォーの「作家主義」において、天才はこうした現象と無関係であるとされる。

『悪の塔』公開後にトリュフォーは「アベル・ガンス、無秩序と天才」(1955年)を書き、こ

36 François Truffaut, « Sir Abel Gance », *CAS*, p. 82-84. [フランソワ・トリュフォー「アベル・ガンス卿」大久保清朗訳、『バザン研究』第2号、138-145頁]。

37 *Ibid.*, p. 83. [同前、139頁]

38 François Truffaut, « Si Paris nous était conté de Sacha Guitry », *CAS*, p. 190.

の作品を賞賛する。そこで述べられているのは、失敗（と見えるもの）に天才の徴を見出す——失敗作を成功作以上に価値があるものであるとする——アクロバティックな論理である。「今や問題は、人は天才であると同時に失敗者でありえるかということだ。私はむしろ、失敗は才能であると思う。成功することは失敗することである」³⁹。さらに「歴史上のあらゆる偉大な映画は、「失敗した」映画である」⁴⁰と断言し、『新学期・操行ゼロ』（ジャン・ヴィゴ監督、1933年）から『ストロンボリ 神の土地』（ロベルト・ロッセリーニ監督、1950年）まで彼の愛する「作家の映画」を列挙しながら、ガンスを強力に擁護する。その中で彼は「作家主義」が『「ザナック式」批評』（la critique « à la Zanuck »）と相反するものであると語られている⁴¹。そして、ロベルト・ロッセリーニやアンリ・ドコワンの賞賛すべき作品を選別するクロード・モーリヤックは「ザナック式」、つまり反＝作家主義の批評を行っているという。ザナックとは、アメリカの映画会社20世紀フォックスのプロデューサーであったダリル・F・ザナックを指す⁴²。トリュフォーは「「ザナック式」批評」とは「長所と短所を分ける批評」であるとも述べている。どこが良く、どこが悪いかを判断するという評価における相対主義、映画を長所短所に分解することを退け、映画を分割不可能な総体として絶対的に評価する姿勢が、トリュフォーの反＝「ザナック式」批評、すなわち「作家主義」ということになるだろう。

やや奇妙に思えることがある。「批評に関する考察」においてバザンは「作家主義」を信じていないとトリュフォーとは異なる立場にあることを明言しており、そのくだりをトリュフォーは『残酷の映画』の序文で割愛していたことはすでに述べた。だがその一方で、トリュフォーは自らの編纂した『わが人生の映画たち』のなかで、「作家主義」について述べた批評を意識的に除外している。初めて「作家主義」という言葉が用いられる「アベル・ガンス卿」、表題にもなっている「アリババと『作家主義』」は再録されず、『悪の塔』評である「アベル・ガンス、無秩序と天才」は再録されているものの、「作家主義」について言及している脚注は削除されている。あたかもトリュフォーは、自らの経歴から「作家主義」にまつわる事項を抹消しようとしているかのようである。

『わが人生の映画たち』の序文において、トリュフォーは「作家主義」のことを『「カイエ・デュ・シネマ」誌によって世に出され、今日フランスでは忘れられ、しかしアメリカの雑誌においてムーヴェマン・ファン同士でしばしば討議されている』（強調原文）⁴³とそっけなく言及している。「作家主義」は、アンドリュウ・サリス「作家理論についての覚え書き、一九六二年」⁴⁴を介して、

39 François Truffaut, « Abel Gance, désordre et génie », *Cahiers du cinéma*, n° 47, mai 1955, p. 46. [フランソワ・トリュフォー「アベル・ガンス、無秩序と天才」大久保清朗訳、『バザン研究』第2号、148頁]

40 *Ibid.* [同前、149頁]

41 *Ibid.*, p. 44. [同前、150頁]

42 「ザナック映画の監督は、セットに入ってから彼の監督下におかれ、許可なしでは、一ショットたりと撮ることができなかった」。レナード・モズレー『ザナック——ハリウッド最後のタイクーン』金丸美南子訳、早川書房、1986年、172頁。

43 Truffaut, *Les Films de ma vie*, p. 27. [トリュフォー『映画の夢の批評』40頁]

44 アンドリュウ・サリス「作家理論についての覚え書き、一九六二年」木下千花訳、『バザン研究』第1号、86-113頁。

アメリカに紹介されていく。サリスと面識のあったトリュフォーがそれについて知らなかったとは考えにくい、ここでトリュフォーはそうしたアメリカの批評を「ムーヴィーフアン」と一括している。また「作家主義」がフランス本国で忘れられていないことは、トリュフォーもインタビュアーをつとめている映画監督へのインタビュー集『作家主義』が1984年に刊行されていることから明らかであろう⁴⁵。ではトリュフォーは、「私自身は個人的には「作家主義」を信じていない」と書き、かつて自身と対立的な立場に身を置いたバザンに近づいているのであろうか。それでは『残酷の映画』で引用する際、なぜその部分を割愛しているのだろうか。

5 老 化

トリュフォーの「作家主義」についての記述をよく読むと、対となるように老いについての言及がなされていることに気づかされる。「アベル・ガンズ卿」における、作家主義を信じるというくだりでは、すぐ後に老化説には与しないと述べている。彼の「作家主義」は別言すれば「老い」の拒絶なのである。また「アリババと『作家主義』」において彼は次のように述べている。

いつの間にか先輩方は、あいもかわらず重々しい口調で、アベル・ガンズ、フリッツ・ラング、ヒッチコック、ホークス、ロッセリーニ、そしてハリウッド時代のジャン・ルノワールさえもが高齢で映画を生む力を失い、あまつさえ毫碌していると語るまでになっている。⁴⁶

ここでトリュフォーが批判している「先輩方 (nos aînés)」、すなわち天才の老化について述べている年上の批評家とは他ならぬバザンである。それについて触れられているのは、バザンのもう1つのアダプテーション論「不純な映画のために——脚色の擁護」である。この中でバザンは、他の芸術よりも驚異的速度で進化する映画において、その進歩についていけない天才は挫折に見舞われると述べている。「芸術家とその芸術とのあいだの深い不和の原因」が天才を、「容赦なく老いさせる」⁴⁷のだ。その例としてシュトロハイム、プドフキンとともに彼が挙げるのがアベル・ガンズである。トリュフォーが「アベル・ガンズ卿」において映画作家の老化説に与しないと、「アリババと『作家主義』」で、「先輩方」による高齢映画監督たちの「毫碌」説に言及しているとき、念頭にあるのはバザンであるといえる。

45 *La Politique des auteurs*, préface de Serge Daney, Editions Etoile, 1984. [『作家主義——映画の父たちに聞く』奥村昭夫訳、リプロポート、1985年]

46 François Truffaut, « Ali Baba et la "Politique des Auteurs" », *Cahiers du cinéma*, n° 44, février 1955, p. 47. [フランソワ・トリュフォー「アリババと『作家主義』」大久保清朗訳、『バザン研究』第1号、41頁]

47 « Pour un cinéma impur (défense de l'adaptation) », *EC*, p. 830. [アンドレ・バザン「不純な映画のために——脚色の擁護」野崎敏訳、『映画とは何か』上巻、岩波文庫、2015年、171頁]

1957年にバザンが書いた「作家主義について」⁴⁸においては、彼とトリュフォーにおける「作家」観、「天才」観の相違がより明確になっている。野崎欽が述べるように、この文章はバザンと若い映画批評家たちとの間で数年来繰り広げられてきた「作家主義」をめぐる論争に対する「バザン側からの一つの総決算の試み」⁴⁹であった。このなかでバザンは、驚異的速度で技術的進化を遂げた映画芸術において、「天才が十倍も早く燃え尽き、揺るがぬ能力を備えた作家でさえ時代の波に取り残されるとしても当然のことだろう。それがシュトロハイム、アベル・ガンス、オーソン・ウェルズの場合だった」⁵⁰と述べている。こうした作家たちの評価が、トリュフォーら若い批評家たちの支持によって再浮上しているのを認めながら、映画においては時代の流れのなかで天才の活動が著しく制限されたり、失敗を余儀なくされる場合もあり得ること——トリュフォーのいう「振り子の法則」があること——を認める立場を取る。「創造の心理学の最も一般的な法則に従うならば、天才の客観的要素は映画において他のいかなる芸術よりも変化する可能性はるかに大きいので、監督と映画のうちにはたちまちのうちに不応が生じかねず、それが彼の作品の価値を急激に下落させてしまうのである」⁵¹。

バザンはこの「総決算」において、「歳を重ねることはそれだけで映画監督の才能を衰えさせはしない」という「わが若き論争家諸君」（当然トリュフォーを想定している）の主張に一定の理解を示している⁵²。だが、ボードレルやヴァレリー・ラルボーを例に、「偉大な才能は円熟こそすれ、老いることはないのである。芸術的心理学のこの法則が映画に適用できない理由は何も存在しない」⁵³と断言しつつ、それでもなお「疑問の余地ない偉大な人物の作品に陰りがさしたり、老いの衰えが感じられたりする場合」⁵⁴について考えるべきだとしている。そしてここでバザンは特異な言辞を弄している。「人間の老化ではなく映画の老化のうちに悲劇が秘められている。映画とともに老いることのできない者たちは、映画の進化に追い越されてしまう」⁵⁵。老いるのは、人ではなく映画であるというのだ。そして、「そこで表面化しているのはまたしても、創造者の主観的発想と映画の客観的状況のあいだの不一致にすぎない」⁵⁶と、天才老化説への反駁に再反論を試みている。「不純な映画のために」において「芸術家とその芸術とのあいだの深い不和の原因」が天才を老化させるとバザンは述べていたが、ここでは「芸術家」が「創造者の主観的発想」に、「芸術」が「映画の客観的状況」に置き換えられているといえる。バザンにおいて老化の問題は、「心理学的というよりも歴史的な次元の問題」⁵⁷であると述べているのだが、その用語

48 « De la politique des auteurs », *EC*, p. 2150-2156. [アンドレ・バザン「作家主義について」野崎欽訳、『バザン研究』第1号、60-85頁]

49 野崎欽「『作家主義について』解説」、『バザン研究』第1号、82頁。

50 *EC*, p. 2153. [「作家主義について」69頁]

51 *Ibid.* [同前、70頁]

52 *Ibid.* [同前、71頁]

53 *Ibid.* p. 2154. [同前、72頁]

54 *Ibid.* [同前]

55 *Ibid.* [同前]

56 *Ibid.* [同前]

57 *Ibid.* [同前]

に従えば、トリュフォーが「心理学的」に問題をとらえているとしたら、バザンは「歴史的」にとらえているということになる。

「作家主義について」における、映画が老化するという主張は一見唐突に見えるが、すでに「不純な映画のために」においても同様の主張が見出せる。「10年ないし15年の幅をおいて考えてみれば明らかなのは、映画芸術の特性だったものが明らかな老化のしるし [les signes évidents du vieillissement] を示しているということである」⁵⁸。バザンはここで例としてあげているのは、ドタバタ喜劇のような、ある一定期間に隆盛をきわめていた映画ジャンルの凋落、また映画スターの高齢化である。今日から見て、映画ジャンルと映画スターという異なる水準で進行する衰退を老化として関連づけるバザンの論理に違和感を覚えるかもしれない。こうした思考は「天才や才能とは相対的現象であって、歴史的状況との関連においてしか成長しない」⁵⁹という、バザンの「歴史的」な視座の現れと見なすことができる。

天才は老化するとバザンが述べたのは、彼が映画というものを一個の芸術家の産物としてよりも、時代や国籍によって規定された社会的産物と見なしているからである。1954年に書かれた「誰が映画の本当の作者か」において、バザンは「端的に言って、10本のうち9本の映画は、作者を持っていないようなもの」⁶⁰と述べ、作者をもたない作品の唯一有効な批評は、「社会や経済や技術的進化を考慮しつつ、映画を取り巻く状況を包括的に検討するということになるだろう」⁶¹と述べている。ここでバザンの言う映画とは、映画制作システムにおいて量産される劇映画であり、それらは個人の芸術的世界の表現である以前に、匿名的に量産され、大衆の欲望を満たすものであると見なされている。映画を個人ではなく集団ないし社会的産物と見なす思考は、『カリガリからヒットラーまで』(1947年)にも通じるものであるが⁶²、このように映画作品から出発して、その特徴を作家という創造主体に収斂することなく、多元的に関連づけ、多様な文脈に開いていこうとする姿勢は、バザンの映画批評の基本といていい。初期の「映画批評のために」(1943年)では、「他の芸術のようなエリートのために向けられたものではなく、2時間の気晴らしを求めてくる何百万人もの受け身の観客に向けられている」⁶³と、映画の集団的受容が強調されている。そして晩年の作品評である『縄張り』(ジョージ・マーシャル監督、1958年)についての評(1958年)で、ハリウッド・システムは否定的側面を持つものだが、「奇跡の発生器」⁶⁴でもあると述べ、個性的

58 EC, p. 831. [「不純な映画のために」172頁]

59 Ibid., p. 830. [同前、169頁]

60 « Qui est le véritable auteur du film? », EC, p. 1593 [アンドレ・バザン「誰が映画の本当の作者か」大久保清朗・堀潤之訳、『バザン研究』第1号、50頁]

61 Ibid. [同前]

62 「第一に、映画は、けっして個人の生産物ではない」。Siegfried Kracauer, *From Caligari to Hitler: a Psychological History of the German Film*, edited and introduced by Leonardo Quaresima, Rev. and expanded ed., Princeton University Press, 2004 (First published 1947), p. 5. [ジークフリート・クラカウアー『カリガリからヒットラーまで』増補版、平井正訳、せりか書房、1979年、10頁]

63 « Pour une critique cinématographique », EC, p. 78.

64 « La Vallée de la poudre », EC, p. 2451-2452. [アンドレ・バザン「『縄張り』」、『映画とは何か I——その社会学的考察』小海永二訳、美術出版社、1967年、222頁]

なものとともに組織的なものに対しても目を向けようとしている。バザンにとって重要なのは映画を撮る一個人の想像力より、撮られた現実の方にあったのは、「失われた時を求めて——『パリ一九〇〇年』」（1947年）における問いかけ、「一言で言うと、繰り返し言うまでもなく、偶然と現実の世界のあらゆる映画作家よりも才能を持っているのだろうか」⁶⁵からも明らかだろう。

バザンが映画の老化というとき、それは彼の主要な概念の1つである映画の進化に重なり合うものに思われる。彼は「不純な映画のために」で映画の老化に言及した直後に次のように述べる。「技術に期待できる要素を映画の主題群は使い果たしてしまったかのよう」に見える現在、「映画はいつしか脚本の時代に入ったのだ。つまり、内容と形式の関係が逆転した時代である」と。それは言い換えれば「技術すべてが主題を前にして自らを消し、透明になろうとしている」時代である。こうした映画史の転換を指摘するに際して、バザンは河床のメタファーで説明する。すなわち「川床をすっかり掘ってしまい、海に至るまで岸辺から砂粒ひとつ奪い去る力もなくしてしまった河川のように、映画はその平衡状態 (profil d'équilibre) に達した」⁶⁶というのである。「平衡状態」と訳した部分は、地形学では「理想河床変化」と訳すべきものである。同じ用語は、「映像言語の進化」にも見られる。1939年の時点で「トーキー映画は地理学者たちが河川の「平衡状態 (profil d'équilibre)」と呼ぶ状態にまで達していた」⁶⁷。これは映画において「必要かつ十分な技術的条件」が満たされた状態を喩えたものである。バザンにとって映画の進化は、「平衡状態」を介して映画の老化と関連する概念であったといえる。

ここまでの議論を整理すると、バザンにとっては2種類の老化があるということになる。まず作家が映画とともに進化＝老化するという事態、言うなれば喜ばしき老化である。それはある意味で円熟ともいえるような、芸術家であれ誰であれ望ましい変化であり、先の言葉でいえば「創造者の主観的発想」と「映画の客観的状況」との幸福な一致を意味している。その一方で、嘆かわしい老化がある。そしてそれは作家が映画の進化＝老化を受け入れられないときに起こる。時代の歩みに同調することのない不変の才能を持つ「天才」ゆえに起こる老化であり、「創造者の主観的発想」と「映画の客観的状況」が乖離していく事態である。

バザンにおける老化を2種類に分けた上で疑問が浮上する。前者の老化を生きる者、すなわち映画の進化を前にして対処できるような作家なり天才なりという存在は、「作家主義について」において、映画の老化＝進化という事態を説明するなかで理念的に想定されたものといえる。ところでバザンは、そのような事例——ガンスのような嘆かわしい老化現象に陥らなかったようなケース、いうなれば老化のモデルケース——に、現実遭遇していたのだろうか。そのような

65 « A la recherche du temps perdu : Paris 1900 », *EC*, p. 300. [「失われた時を求めて——『パリ一九〇〇年』」、『映画とは何かⅡ——映像言語の問題』小海永二訳、美術出版社、1970年、56頁]

66 « Pour un cinéma impur (défense de l'adaptation) », *EC*, p. 831. [「不純な映画のために」173頁]

67 André Bazin, « L'Évolution du langage cinématographique », *Qu'est-ce que le cinéma? 1 Ontologie et langage*, Editions du Cerf, 1958, p. 139. [アンドレ・バザン「映画言語の進化」野崎欲訳、『映画とは何か』上、117頁] この論考は3つの異なる論考を再構成したものであるため、全集版ではなく『映画とは何か』4巻本の出典を挙げておく。

望ましい老境を迎える映画作家の姿を具体的に想像できているのだろうか。

一方、トリュフォーにとって老化とは、人間にせよ映画にせよ容認しがたい事態であった。その意味で「作家主義」とは、永遠の若さを顕揚するものであったに違いない。老化を否定したとき、トリュフォーの思考に老いを肯定する思考法が欠如していたことは、彼の実年齢によるものかもしれない。「フランス映画のある種の傾向」へと結実する手記を書いたとき彼は19歳であり、「アベル・ガンス卿」を書いたときは22歳であった。トリュフォーの「作家主義」が、その妥当性や正当性を超えて今日において魅力的たりうるとしたら、単純にその永遠の若さへの信仰ゆえではないだろうか。それはロマンティックであり、それ故に、認識を偏向させずにはおかないのである。そして1970年代のトリュフォーのバザンの死後出版事業、それと平行して進められた自らの映画論集の編纂に際して、彼が「作家主義」を持ってあましているかのように曖昧な態度を取るのには、40代となった彼自身が自らの老化（というのは早すぎるが）に直面していたこととも関係しているのではないか。

6 映画における晩年性

それにしても老いはそこまで否定されるべきものなのであろうか。バザンにとっての、ある「客観的状況」を受け入れられないことから来る老化、トリュフォーにとっての「毫碌」は、たしかにある種の凋落の進行であり、その点において忌むべきものであることは否めない。だがその否定的な在り方を、老いにあらず、と強引に無視するのではなく、むしろその否定性そのものを肯定することはできないのであろうか。

ここでエドワード・W・サイドが、テオドール・アドルノの著作から借り受けた「晩年性」の概念を導入してみたい。『晩年のスタイル』において、サイドは、偉大な芸術家たちの晩年に注目し、「人生の最後の一時期に、彼ら〔芸術家〕の仕事と思索が、いかにして新しい表現形式を獲得したのか」⁶⁸を集中して考察する。サイドによれば、芸術家の晩年には、「有終の美をかざるような晩年の作品」を発表できるタイプがいる一方(サイドはレンブラント、マチス、バッハ、ワーグナーを挙げている)、「調和と解決としてではなく、頑迷で、困難で、解決しえない矛盾としての芸術的晩年 (artistic lateness)」⁶⁹を迎えるタイプがいる。そうした芸術家として、サイドはイプセンを挙げる。晩年のイプセンの戯曲がもたらすものは「さらなる不安を呼び覚まし、完結の可能性を取り返しのつかぬまでに傷つけ、観客を、これまで以上に困惑と不安定さのなかに放置する契機」⁷⁰であるというのである。そしてサイドは「莊嚴ミサ曲」など晩年のベートー

68 Edward W. Said, *On Late Style: Music and Literature against the Grain*, Vintage Books, 2007. [エドワード・W・サイド『晩年のスタイル』大橋洋一訳、岩波書店、2007年、27頁。原著からの引用はアメリカのヴィンテージブックスから刊行されている再刊版を使用した]

69 *Ibid.*, p. 7. [同前、28頁]

70 *Ibid.* [同前]

ヴェンについて論じたアドルノの論考を手がかりに晩年性を定義する。すなわち、それは「みずからがその一部であった既存の社会秩序との交流を捨て、その社会秩序との間に矛盾にみちた疎外関係を確立した」⁷¹状態であると。

先ほどの2つの老いをここで思い出したい。そこでは映画の進化＝老化と歩調を合わせて変化していく映画作家とそうでない映画作家がいた。バザンは後者に分類される映画作家のひとりとしてアベル・ガンスを挙げた。そうした分類にトリュフォーは反対し「作家主義」を標榜した。しかしもし、ガンスがいわば「晩年のスタイル」に入っていたと仮定したらどうであろうか。すなわちフランス映画という既存の秩序との交流を放棄し、「矛盾に満ちた疎外関係を確立」せんと映画を撮っていたとしたらどうであろうか。「作家主義」の名の下にガンスを賞賛した「アベル・ガンス卿」で、トリュフォーはガンスがいかに「今ももっとも若く潑潑とした世代」⁷²から指示されているか、彼の映画のイメージが「歳月とともに衰えることのない内的な力を、効果を」⁷³保っているかを力説する。だがここでのトリュフォーの賞賛は抽象的であり、さらに言えば空疎である。彼がガンスの実際のイメージに言及している箇所はわずかに2か所、『失われた楽園』（1940年）のミシュリーヌ・ブレールの涙が本物であること、『楽聖ベートーベン』（1937年）における主演アリ・ボールの顔（おそらくラストの臨終場面のそれ）が「ブロンズから切り出されたよう」⁷⁴であるという指摘のみだ。ここで述べられているのは、どちらもクローズアップの力強さの指摘といえるが、ほとんど不自然かつ執拗なまでに強調される顔のアップこそ、実のところ、ガンスの若さというより晩年性の現れだったのではないか。アドルノ＝サイドにおいて晩年のスタイルのひとつは連続性にあらがった断片的性格を指している。ところでクローズアップとは、登場人物を文脈から切り離し、断片化する手法に他ならない。

サイドによれば、こうしたネガティヴに思える晩年のスタイル、時代に逆行するかのようなスタイルこそが現代的で「新奇な」芸術を予言することになる。物語の連続性を断ち切るような、ガンスの素朴で不器用なクローズアップ。それは、素朴で不器用であるにもかかわらず（であるがゆえに）、ヌーヴェルヴァーグの作家たちのひとつのトレードマークともいえる数々の驚くべきクローズアップ——クロード・シャブロール監督の『美しきセルジュ』（1958年）におけるジェラルド・ブラン、トリュフォー監督の『大人は判ってくれない』におけるジャン＝ピエール・レオ、ジャン＝リュック・ゴダール監督の『勝手にしやがれ』（1960年）におけるジーン・セバーク——を予告したのではないか。もしバザンがその一部を拒否し、トリュフォーが全面的に否定した、ある映画作家たちの老いの内実が晩年のスタイルであったとしたら、ここでの2人の立場の違いから生じる齟齬（と思われていたもの）は、すべてではないにせよ幾分かは解消するのではないかと思えるのである。

71 *Ibid.*, p. 8. [同前、29頁]

72 *CAS*, p. 83. [トリュフォー「アベル・ガンス卿」139頁]

73 *Ibid.* [同前]

74 *Ibid.*, p. 84. [同前、140頁]

サイドは、ベーターヴェンの晩年性を論じるアドルノ自身が晩年のスタイルを体現していると指摘している。であるならば次の問いが最後に残る。バザンにとって晩年のスタイルに相当するものはあるのか、トリュフォーにとって晩年のスタイルはあるのか——40歳で亡くなったバザン、52歳で世を去ったトリュフォーにとって、そもそも「晩年」と呼べる時期があるとしてだが。

バザンに関しては、その著作の全貌がようやく明らかになったばかりである以上、臆断は慎むべきかも知れない。だがアダプテーション論や映画の進化論のなかで、映画が「平衡状態」に達したと述べているバザンは、映画がある意味で行き止まりを迎えてつつあることを予感していたのではないか。少なくとも、そう推測することは不可能ではないだろう。言葉を換えればバザンは映画そのものが晩年に到達しつつあると考えていたのではないか。ではバザンその人はどうか。バザンの高潔な人柄については多くの傍証があり、サイドが描くアドルノのような「時期を失した、スキャンダルな、破局的ですらある、現在についての解説者」⁷⁵とは相容れない。しかしまた、彼の筆がときに辛辣なものとなるのは、『田舎司祭の日記』論の末尾を見ても明らかである。彼の文章が決して平明でなく、錯雑とした印象を受けることも否定できないだろう。河床の比喩のような奇抜な表現もそれを助長する（それが美しいイメージとして私たちを魅了するにせよ）。バザンは、『写真映像の存在論』から早すぎる晩年とでもいうべき矛盾した生を生き始めていたのかも知れないのである。

最後にトリュフォーについて。「自己の人生に対する熾烈な好奇心を肉体的にも精神的にもとことん充たそうとあがきつづけた不安な人生探求家」と彼の生涯を総括したのは山田宏一であるが⁷⁶、「フランス映画のある種の傾向」を発表した血気盛んな批評家から、『アメリカの夜』（1973年）でアカデミー外国語映画賞という栄誉を受けた映画作家へという軌跡は、きわめて順風満帆なものに思える。だが彼の作品のいくつかが暗鬱であることも事実である。『日曜日待ち遠しい!』（1983年）を早すぎる遺作として持つ彼のフィルモグラフィーを見れば、いずれの作品も円熟しているとは決していえないが、さりとして若々しいと呼ぶにはいささか違和感を感じるようなもの——例えば『恋愛日記』（1977年）、『緑色の部屋』（1978年）、——が少なくない。なかんずく、すでに言及した『恋のエチュード』は早すぎた晩年性の顕現とっていいのではないか。映画の最後、2人の姉妹を愛しながら、そのどちらとの恋も成就することのできなかった主人公クロードは、タクシーの黒い窓に映った自分の顔を眺めて、「誰だこれは、まるで老人のようだ」とつぶやき、ひとりでロダン美術館を立ち去る。クロードを演じるのはトリュフォーの分身ともいうべきジャン＝ピエール・レオであり、髭を生やし、サングラスをかけた姿は、他のトリュフォー作品にはない陰鬱さをまとっている。そのたまたまは、「ブルジョワの老化を嫌悪しながらも、隔離性や追放状態や時代錯誤の感覚の増大を主張する」、そんな「内的な緊張

75 *Said, op.cit.*, p. 14. [サイド、前掲書、38頁]

76 山田、前掲書、308頁。

状態 (an inherent tension)』⁷⁷をかかえた晩年のスタイルの体現者とはいえないだろうか。バザンもトリュフォーも、老化や「耄碌」の語彙を用いながら、晩年のスタイルの問題圏に接近していたのである。

サイドは言う。「晩年のスタイルは、まぎれもなく現在のなかに存在しながら、奇妙にも現在から離れて存在している」⁷⁸。そして、ある種の芸術家や思想家だけが、みずからのメティエもまた老化し、衰退する感覚や記憶とともに死と対峙せねばならないと信じ、メティエを「気遣う (care)」ようになるだろう、と続ける。1970年代トリュフォーの裡で生まれていたのはこの「気遣い (care)」であったのではないか。

トリュフォーが——彼の盟友ゴダール、シャブロール、さらにエリック・ロメール、ジャック・リヴェットとともに——創始した映画の潮流は、今日、「ヌーヴェルヴァーグ」という名称で知られる。新しい波。そのように呼ばれてきた1960年代に起きつつあったフランス映画の変化は、——理論的支柱ともいえる「作家主義」が永遠の若さに根ざしたロマンティックな概念であったことも相俟って——きらめく若さの発露と錯覚させ、半世紀以上を経て今に至っている。だが1970年代以降の彼らに訪れた薄暮の時代にはおそらくまた別の名称が必要であったのである。

〔本論は2018年12月20日、山形大学人文社会科学部で開催されたシンポジウム「映画とアダプテーション——アンドレ・バザンを中心に」における著者の口頭発表「忠実さをめぐって——フランソワ・トリュフォー「フランス映画のある種の傾向」におけるアダプテーション批判」に基づく。ただし論文にするにあたり、当時の発表のあとをとどめぬほどに大幅に改変している。本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 (B)「アンドレ・バザンの映画批評の総合的再検討」17H02299の研究成果の一部である。〕

77 Said, *op.cit.*, p. 17. [サイド、前掲書、42頁]

78 *Ibid.*, p. 24. [同前、51頁]

The Lateness in the Cinema Discussion on Aging between André Bazin and François Truffaut

Kiyoaki OKUBO

It is well-known that François Truffaut (1932-1984), a French film director, who met André Bazin (1918-1958), a French film critic, for the first time at the age 16 in 1948, respected Bazin throughout his life, and called him "my adoptive father". But there are notable differences, rather than affinities, of opinion between them in how they thought about cinema. This paper focuses on the problem of "the aging" through their criticisms about "the Auteurs theory"(la politique des auteurs) as well as about adaptation. Praising the great directors he admires such as Abel Gance, Truffaut rejects the idea of aging that causes weakness and inability. Bazin, approving Truffaut's point of view, says that it is the cinema that is getting old even if the directors doesn't. Their discussion reminds us of "the lateness" that Edward Said argued in *On Late Style* in some respects. His insight points us to the possibilities for revising Bazin's and Truffaut's thoughts on film.

「山形大学人文社会科学部研究年報」投稿規程

1 投稿資格

「山形大学人文社会科学部研究年報」(Yamagata University Faculty of Humanities & Social Sciences Annual Research Report) に投稿の資格を有するのは、以下の者とする。

- (1) 山形大学人文社会科学部の教員 (教授, 准教授, 講師, 助教)
- (2) 山形大学大学院社会文化システム研究科学生 (指導教員の推薦ある者)
また,
- (3) 本学部教員以外の者との共同研究についても, 応募を認めることがある。
- (4) 山形大学人文社会科学部もしくは山形大学大学院社会文化システム研究科の主催で開催された講演会の原稿も掲載可とするが, 原稿依頼および原稿のとりまとめについては当該の講演会を担当した本学教員の責任においておこなう。

2 原稿の種類

- (1) 原稿の種類は「論文」「研究ノート」「資料紹介」「翻訳」「判例評釈」「書評」「講演」その他学術研究に資すると判断されるものとする。
- (2) これら以外に, 本学部教員の研究活動に関する報告等を掲載する。

3 原稿枚数

- (1) 原稿は, 各号原則として一人一編までとするが, 2に定める分類項目を異にする場合には複数掲載を認める場合がある。
- (2) 「論文」「研究ノート」「資料紹介」「翻訳」「講演」は, 原則として400字詰め原稿用紙に換算して100枚以内とする。
- (3) 「判例評釈」「書評」については, 原則として400字詰め原稿用紙に換算して30枚以内とする。

4 書式

刷り上がりの版型はB5版とする。なお, 以下に記載のない書式の詳細については, 山形大学紀要の書式に準ずるものとする。

- (1) 原稿は, 縦書きもしくは横書きとする。縦書きの場合は二段組みとする。
- (2) 横書きの場合は裏表紙から始める。
- (3) 外国語論文原稿の投稿も認める。
- (4) 原稿は原則としてワープロで作成し, 使用したワープロ・ソフト名を明記した電子ファイル (フロッピー・ディスクなど) とプリントアウトしたもの2部 (1部は所属・氏名を記載しない) を提出する。
- (5) 日本語 (外国語) の場合は外国語 (日本語) のレジメを付ける。その枚数も上記の原稿枚数に含める。投稿者は, 当該言語ネイティブまたは外国語教育担当教員によるチェッ

クを受けたいので、外国語レジュメを編集委員会に提出するものとする。ただし、当該言語ネイティブまたは外国語担当教員に依頼することが困難な場合には、英語によるレジュメに限り、編集委員会が仲介するものとする。

5 原稿掲載の可否の決定および査読

原稿掲載の可否（原稿の種類に適否も含む。）は、原則として、当該分野の専門家の査読を経て、編集委員会が決定する。ただし、「論文」と「研究ノート」以外の種類の原稿については、その審査方法を編集委員会において個別に決定できるものとする。

6 校正

- (1) 校正は執筆者の責任でおこなう。
- (2) 校正時における大幅な訂正は認めない。

7 抜刷

- (1) 抜刷を必要とする者は、投稿申し込み時に申告する。
- (2) 抜刷の作成費用は、制限部数を超過した分について執筆者の負担とする。

8 図版等

図版、図表、グラフなど印刷に特別の費用を要するものについては、執筆者の負担とする場合もある。

9 原稿提出期日

原稿提出期限は11月末とする。

10 原稿提出先

原稿は、編集委員に提出する。

11 著作権利用の許諾

論文を投稿する者は、山形大学人文社会科学部に対し、当該論文に関する著作権の利用につき許諾するものとする。

12 論文等の電子化及びコンピュータ・ネットワーク上での公開

- (1) 掲載された論文等は、原則として電子化し、人文社会科学部ホームページ等を通じてコンピュータ・ネットワーク上に公開する。
- (2) ただし、執筆者が前項に規定する電子化・公開を希望しない特別の理由を有する場合は、当該論文の電子化・公開を拒否することができる。その場合は原稿提出時に申し出る。

編集委員

中 村 隆 (グローバル・スタディーズコース)
アーウィン マーク (グローバル・スタディーズコース)
加 藤 健 司 (人間文化コース)
鈴 木 明 宏 (経済・マネジメントコース)

編 集 者 山形大学人文社会科学部
発 行 者 〒990-8560
山形市小白川町一丁目4-12
責 任 者 清塚 邦彦
印 刷 所 田宮印刷株式会社
発行年月日 令和2年3月16日

Yamagata University Faculty of Humanities & Social Sciences Annual Research Report

Vol. 17

CONTENTS

Articles

An Analysis of Developmental Structure and Agreement/Disagreement on Proposals in Japanese Problem-Solving Discourse: A Comparison of Native Language Situations and Third-Party Language Contact Situations Fumio WATANABE.....	1
Predicate NP Movement in <i>Tough</i> -Constructions Naoto TOMIZAWA	19
Investigation on the effects of screen size and display position on information presentation, in terms of account memory recollection, eye movement and load Kaoru HONDA, Tadasuke MONMA.....	45
Developing Intercultural Competence: recognizing the minimization effect Stephen B. RYAN.....	59
English sentence adverbials and truth-conditional meaning: A questionnaire study Yukiko KOIZUMI.....	71
The Lateness in the Cinema Discussion on Aging between André Bazin and François Truffaut Kiyooki OKUBO.....	91
Requirements for Contributors	111

March 2020

Faculty of Humanities & Social Sciences
Yamagata University